

全日本リアリズム演劇会議

# 演劇会議

VOL.120 2006年3月



敗戦、すべてを失った人々の群  
 マッカーサーの君臨  
 復員兵、街娼  
 焼跡の闇市  
 ハンラッとしたジマズ、ブギウギ  
 そーて……ブギウギ  
 占領下におった日本人の女の物語！

日本/境野修次・笠置リエノ演出・境野修次

巻頭言 今こそ、初心を忘れず

シリーズ「作家・作品・舞台」②

劇団を訪ねて(劇団きつがわ)

韓国公演を終えて

(ロシア演劇レポート②)

戯曲 夜空の下に降る花は

岩田直二さん/かたおかしろうさんを偲ぶ

後藤 陽吉

菊川徳之助

楠本 幸男

島田 静仁

桜井 郁子

いずみ 凜



劇団石るつ 第56回公演 -2006年-  
 5月19日(金)午後7時/20日(土)午後2時・7時(会場は30分前)  
 深川江戸資料館小劇場(大江戸線 清澄白川駅より徒歩2分)  
 一般・前売 2,500円 当日・2,800円/学生・70歳以上 前売・当日共 1,500円  
 問い合わせ 市川市新浜1-23-5-103 電話・FAX047-356-7217(境野まで)

## 全日本演劇フェスティバル IN 松山

—「坊ちゃん」出版百周年記念—

と き 8月25日(金)26日(土)27日(日)  
 と ころ 松山市民会館(大ホール・中ホール・能舞台)  
 参 加 費 1万7千円前後(予定) ※宿泊費・交流費・観劇費  
 出演劇団 東会議(2~3劇団)  
 西会議(2~3劇団)  
 地元 (1劇団) ※「坊ちゃん」の上演を検討中  
 韓国 (1劇団)

かの有名な「道後温泉」・「俳聖/正岡子規」  
 「坊ちゃん」の松山へぜひお越しください!!

## 〔文集〕「戦争と演劇人」(2006年)

執筆者 武内 亨(俳優座)、浜田寅彦(俳優座)〈インタビュー〉、  
 津田 伸(前進座)、関きよし(池袋小劇場)、  
 星野 毅(人形劇団プーク)、北村耕太郎(東京芸術座)、  
 小竹伊津子(青年劇場)、内田 透(俳優座)、  
 丸橋恒夫(前進座)、神山 寛(俳優座)  
 鼎 談 津上 忠(前進座)、南風洋子(民芸)、佐々木愛(文化座)  
 〈日米安全保障条約〉

発行所 安保体制打破新劇人会議  
 〒160-0022 東京都新宿区新宿2-9-20 問川ビル4F  
 青年劇場気付 TEL 03-3352-7054

B5判 50頁 500円



◇東京芸術座  
「地球の上に朝が来る」  
8月31日～9月4日  
島田九輔／作  
印南貞人／演出



◇劇団群馬中芸  
「なめとこ山の熊」  
10月1・2日  
宮澤賢治／作  
中村欽一／構成  
せらだひとし／演出



◇劇団だいこん座  
「レンタルファミリアー」  
10月8日  
砂木量／作  
高橋寛／演出



劇団石るつ 56 回公演  
『蒼い空そしてブギウギ』

作／境野修次・笠置リエ 演出／境野修次  
5月19・20日 深川江戸資料館小劇場

表紙のいじり

『蒼い空そしてブギウギ』の公演チラシ

昭和天皇在位60年に向けて、「花子のお墓はどこにあるの」と題して、江東区青年館で上演し、その翌年6月にも江東・深川江戸資料館小劇場で公演した。この原作を基にして、さらに占領下を意識し、「蒼い空そしてブギウギ」と改題、改作をすすめ、90年6月に江東・門前仲町天井ホール、92年1月、東京芸術劇場小ホール1、96年1月、同じく東京芸術劇場小ホール2で公演を繰り返してきました。

……この作品は、日本史の勉強の1年分ぐらいに相当する。考えさせる内容だ。本当に歴史を見直し、批判精神をもたなくては！など、観客の反応がありました。

今、憲法改悪の動きに歯止めをかけ、平和の重要性を広めていかなければならない状況であります。だからこそ、この芝居の上演意義は大きいと考え、5月公演を企画しました。



◇演劇集団土くれ  
「煙が目にしみる」  
10月13日～25日  
堤 泰之／作  
石塚幹雄／演出



◇国民文化祭記念劇団・福ら夢ぞ  
「忠直」  
10月30日  
柴野千栄雄／作  
米倉斉加年／演出



◇神戸職演連  
「藤戸」  
11月5日  
野上弥生子／作  
菊池昭一／演出



◇劇団静芸  
「見よ、飛行機の高く飛べるを」  
11月6日

永井 愛／作  
伊藤幸夫／演出



◇劇団からっかぜ  
「ピアニアン」  
11月12日

小川英子／原作  
中村芳子／脚本  
布施祐一郎／演出



◇劇団未来  
「ダモイ、収容所から来た遺書」  
11月18～20・23～27日

辺見じゅん／原作  
ふたぐちつよし／脚色  
森本景文／演出

◇劇団すがお  
「北勢線物語」  
11月20・26・27日  
栗木英章／作  
坂下和代／演出



◇劇団名古屋  
「美ら海(ちゅうらうみ)」  
11月25・26日  
栗木英章／作  
久保田明／演出



◇関西芸術座  
「請願」  
11月30日～12月4日  
ブライアン・クラーク／作  
吉原豊司／訳  
亀井賢一／演出



◇劇団演集(名古屋演劇集団)  
「紙屋悦子の青春」  
12月2～4日  
松田正隆／作  
土屋たかし／演出



◇劇団ひの  
「二十四の瞳」  
12月4・18日  
壺井 栄／作  
佐藤利勝／脚色・演出



◇劇団四紀会  
「父と暮せば」  
12月10・11日  
井上ひさし／作  
無法松猪吉／演出





## ◆ もくじ ◆

グラビア (舞台).....	1
巻頭言 今こそ、初心を忘れず .....	後藤 陽吉 8
シリーズ「作家・作品・舞台」②	
井上ひさしのドラマトゥルギーから透けて見えてくるもの.....	菊川徳之助 10
劇団を訪ねて (劇団きづがわ) 働きながら芝居ができるか? .....	楠本 幸男 19
韓国公演を終えて「銃口一教師・北森竜太の青春」.....	島田 静仁 26
〈ロシア演劇レポート②〉ロシア演劇 この一年のあれこれ .....	桜井 郁子 32
北から南から (劇団通信) .....	40
劇評 劇団あしぶえ『彦市ばなし』 .....	藤沢 薫 52
劇団四紀会『父と暮せば』.....	平田 康 53
劇団四紀会『道』.....	〃 55
劇団名芸『見よ、飛行機の高く飛べるを』.....	磯谷 誠 57
劇団名古屋『美ら海 (ちゅうらうみ)』.....	〃 59
人形劇団クラルテ『セチェアンの善人』.....	神澤 和明 60
劇団きづがわ『こんにちは、母さん』.....	〃 61
劇団息吹『紙屋町さくらホテル』.....	〃 62
劇団大阪『世紀末のカーニバル』.....	今泉おさむ 64
劇団未来『ダモイ』.....	〃 65
関西芸術座『請願』.....	〃 66
劇団かすがい『父と暮せば』.....	〃 67
劇団弘演『ぢらい』.....	竹浪 純 68
『多摩川に虹をかけた男 一田中兵庫物語一』.....	内木 文英 69
演劇時評 再演の舞台に向き合う勘考 .....	鈴木 太郎 71
戯曲 夜空の下に降る花は .....	いずみ 凜 75
岩田直二さん / かたおかしろうさんを偲ぶ.....	99
藤沢 薫 / 溝田 繁 / 栗原 省 / 略歴	
情報BOX	
韓国・馬山演劇祭に出演しませんか 98	
第23回西日本劇作家の会 総会と作品研究会 101	
ピースリーディング vol 8 に感動 青年劇場 上甲まち子 102	
落語で9茶を 劇団コーロ 坂口 勉 103	
「九茶の会」全国交流集会 18 / 住所変更 51 / 「かたおかしろうさんを偲ぶ会」のお知らせ 103	
2006年3月中旬以降の公演 .....	104



舞 台

◇劇団上野市民劇場  
「白梅の夜」  
12月9～11日  
楠本幸男 / 作  
杉森正美 / 演出

◇劇団上野市民劇場  
「結婚の申込み」  
12月9～11日  
楠本幸男 / 作  
杉森正美 / 演出

◇劇団蒼生樹  
「室町版 お気に召すまま!」  
12月16～18日  
劇団蒼生樹 / 作  
濱田重行 / 演出

公 演

## 巻頭言 今こそ、初心を忘れず

秋田雨雀・土方与志記念 青年劇場 後藤 陽吉

(1) いま、日本では……。

1941年12月8日、日本は太平洋戦争に突入した。その戦争での犠牲者は45年8月の敗戦までに日本で310万人、アジア太平洋諸国で2千万人といわれている。そうした犠牲の上にたつて戦後、日本国憲法は、戦争の行為によって再び戦争の惨禍が起こることのないようにすることを前文に明記した。

それから60年。小泉首相は、靖国参拝や自衛隊の海外派兵、改憲への地ならしに狂奔。その自民党の暴走のブレイキ役を任じていた公明党も防衛庁の省への昇格問題では議論百出、憲法改悪を担う勢力に道を譲りかねない様相もあったという。また、民主党の前代表も12月に訪米、9条の「歯止め」を取り払い、海外での武力行使に道を開くメッセージを米国に送り、経済的にも軍事的

にも力をつけてきている中国を脅威として、日米安保の再定義まで求めるまでに至った。

この日本の、日米同盟を基軸とした侵略的変質は、世界平和に逆流・孤立をいつそう深めている。また、小泉内閣の構造改革路線、大企業中心主義の経済は国民生活のあらゆる分野でその矛盾を深刻化させている。アスベスト、耐震強度偽装事件。新自由主義のチャンピオン・ライブドアホリエモンの偽計取引。

今、世の中を狂わしているのはだれ？

こうした状況だからこそ私たちはなおいつそう、平和を志向し、人間を大切に求めている止まないものである。

(2) さて、私たち演劇にかかわるところでは……。

芸団協の5年ごとの芸能実演家の実態調査が発表された。年金や失業への不安、年収も百万円未満が5年前の風靡した長谷川一夫のいう芸の技、歌舞伎の型の中にある芸、その宝塚歌劇団への適応と伝授であった。

※私たちの仕事は魂の技師。俳優、その組織者としての演出、それを支えるスタッフ。どれ一つ欠かせない集団芸術の世界である。感動はそのアンサンブルの中で熟成される。私たちにもこれまでの個々の、集団での蓄積がある。失敗の経験も含め、それらを教訓としてその作品の超課題に見合う方法を発見、構築し観客と感動を共有できたらと思わずにはいられない。

(3) なんて芝居を、なぜ全リ演に……。

現実の変革をめざすとは、全リ演は安保という歴史的な闘いの中で生まれた。今日の憲法問題にはそれにまさる闘いが求められている。

戦後60年を機してそう希う私たちをばげまし勇気づける舞台も生まれてきている。

また時代が、今日の情勢に比べ得る劇団づくりを迫つてもいる。幸い、私たちには学び合い、協力し合う同志的につながり得る全リ演がある。そこでの学習や相互批判は進歩・前進への一里塚。

今大事の憲法擁護とともに、変革をめざす演劇の創造と普及を初心にかえって！

6%から14・7%と2倍以上になっている。

文化芸術振興基本法は実演家地位向上を基本理念に掲げて出発したが、いまだに改善はみえない。文化庁予算は1016億円で伸び率なし、映画支援は1億円の、芸術文化振興会への助成も4億4千万円のマイナス。

こうした中で私の属する青年劇場も、創立以来財政の支柱であった青少年劇場公演、とりわけ学校公演の分野は、少子化や進学のための授業偏重によって芸能鑑賞などは激減、否応なしに財政的に劇団を支える基盤が失われてきている。

この状況下で、全リ演の劇団・個人も、創造、普及、組織運営に幾重もの緊張を余儀なくされている。

※この全リ演の現状については、城谷事務局長が本誌119号の巻頭言で問題を要約し今日の閉塞的な状況に創造者としてどう向き合おうかが問われているとして、個人的な自覚を訴えている。

※折しもNHKがプロジェクトXで苦境に陥っていた宝塚歌劇団再生の物語りを報じた。それは名代のスター長谷川一夫の指導のもとで、池田理代子の原作「漫画に描かれた。瞳の中の星」を舞台で輝かせ（宝塚を今日に存続させる契機となった「ベルサイユのバラ」）での再生復活物語である。その逸話のキーポイントは一世を



## 井上ひさしのドラマトルギーから 透けて見えてくるもの

—「きらめく星座」「紙屋町さくらホテル」  
「父と暮せば」を中心に—

演出家 菊川 徳之助

(1) はじめに

井上ひさしは、劇団「テアトル・エコー」の熊倉一雄から「芝居とコントと歌と踊りの寄せ集新劇を書いてみないか」と誘われて『日本人のへそ』を書いたとあとがきに書いている。井上ドラマの本格的なスタートは、このような形であったようだ。「熊倉一雄にまた乗せられ、『表裏源内蛙合戦』を書いた」とあるが、(また)乗せられて書いたという2度目の戯曲の冒頭に、今日の井上ドラマの原点が示されているかのようなせりふがある。

「……抱腹絶倒ミュージカル！  
題しまして『表裏源内蛙合戦』。  
シエイクスピアも顔色なき、駄洒落に地口に語呂合わせ、モリエールも尻尾をまく滑稽ドタバタ大騒ぎ、それからなにより新劇になく  
てはならぬ思想性やらもたつぷり

入れてその上に、ブレヒトまがいの異化作用、ベケット得意の不条理とやらも、抜からず加えていらざるサービスを焼味噌のごった煮。虚言あれば、手練あり、偽りあれば、手管あり、騙しあれば、魂胆あり、つまるところは引つくるめて嘘で丸めたる、江戸の一大奇人平賀源内先生の一代記。嘘の上に出鱈目を重ね、そらごとについてわりを積み積むうちにまことのひとかけら、真実の一片、浮かび上がれば望外の仕合せ」(手前味噌豆口上)

といった、シエイクスピアにモリエールから、ブレヒトにベケットまで取り揃えた、しかも、「嘘の上に出鱈目を重ね、そらごとについてわりを積み積む」というのだ。その上に、ちゃんと、「積むうちにまことのひとかけら、真実の一片、浮かび上がれば望外の仕合せ」と遊び言葉に混

せて、ちゃっかりと本音も語っている。井上戯曲は、テアトル・エコー時代の言葉遊び(駄洒落、地口、語呂合わせ)に、仕掛けがふんだんにある劇中劇構造、観客に眩暈をおこさせるようなドンデン返し、過剰に挿入される歌が連なる和製ミュージカル、ドラマの中核に据えられる人物の、偽評伝といわれる半生記や一代記が繰り広げられる。

『道元の冒険』で岸田戯曲賞を射止めるが、外からは「作品の底の浅さはいなめぬ」「思想がない」「軽さをみせてしまう」などの批判を受け、「五月舎」時代は、ユーモアからブラック・ユーモアへ、解毒剤から毒薬入りへ、人間存在の闇にせまる作風に変化を見せ、当初の言葉遊びが影を薄くすることになる。「芸能座」「しゃぼん玉座」時代を経て、そして、今日、我々が目の前にする「こまつ座」の物語性と音楽性を重ん

じた円熟の作風に、評伝劇とよばれる井上ひさし独特の人間造形が光っている。さらには、日本を代表する劇作家として新国立劇場の柿落として、天皇制批判を含んだ見事な音楽劇を書き下ろし、東京裁判劇シリーズで第二次大戦時代の人間像を問う井上ひさしドラマの円熟に円熟を重ねた作品が、遅筆堂と称しながらも、快調に書き進められている。「全リ演」加盟の劇団の上演リストを見れば、かなりの数の井上ドラマが見つかるのではないか。

近年、特に気になりだしたことは、(井上ひさしは日本のブレヒト)と指摘する人やブレヒトとの関係に目を向ける人たちがいるということであった。『表裏源内蛙合戦』に(ブレヒトまがいの異化作用)というせりふがあるごとく、ブレヒトを既に知っていた、あるいはどこかで意識していたということは確かなことで

あろうが、井上ひさしとブレヒトの関係を見つめてみるのも必要な気がしているのだ。それにはまず、井上戯曲の実像を解析してみる必要があるであろう。といっても、井上戯曲については既に多くの人が語っているので、そこから結論を導き出せばよいのだが、ドンデン返しのドンデン返しもいとわぬ井上芝居ゆえ、底に流れる(核)となるところのものを掴む必要があるように思われる。

「評伝劇という形式はこまつ座の一手専売のようになっておりますが、……これまでは年譜的事実を徹底的に調べ尽くし、その作業を通して、学者の先生方や専門の研究者にもまだ調べのついていないところを捜し出すという方法をとっていました。そしてそのまだ調べのついていないところを空想力と想像力でがばと押しひろげて芝居にする」(井上ひさしコレクション)という井上ひさし

の言葉からも、なまなかな態度では、「調べのついでにないところを空想力と想像力でがばと押しひろげて」用いる井上戯曲の世界に立ち入ることはできないのではないか。ここでは、思い切った、井上ひさしドラマの秘策を探ってみようと思う。

## (2) 『きらめく星座』の高杉源次郎

昭和庶民伝と呼ばれ、音楽劇としても脚光を浴びたこまつ座の『きらめく星座』(85年)は、心優しい人々が集まるオデオン堂というレコード店が舞台である。この家族、敵性音楽のジャズを好み、息子の脱走兵も出し、非国民と呼ばれている。やがては世界大戦に突入してゆくあやうい時代を見据えながら、「一杯のコーヒーから」などの当時流行の歌に包まれて、苦しくも明るく生きる人々を描くという感動的な作品である。

インタビューで井上は「きらめ

く星座』は私戯曲なんです。(略)『きらめく星座』に漂っている雰囲気は、ぼくの家にあったものです。それを素直に作品に書きました」と語っていることから見ると、この作品は現実の生活から汲み取られたリアルな芝居ということになる。ところが現実にあるとは信じられないようなシーンがある。取り締まる人である憲兵のような人が、非国民と言われている家族と(チャイナタンゴ)の歌を一緒に歌い、脱走兵の息子と二重奏をしながらダンスをするのである。観客である我々は、予想を超える見事な表現に絶賛し笑い転げる。しかしちよつと立ち止まって、目を凝らして見ると、この作品でかなりの部分の劇を進行させるのは、この家に婚に来る傷痕軍人の源次郎という男の言動や行動である。

この家の娘・みさをは大日本傷痕軍人会から表彰されるくらいに傷痕

が強い人物形象と言える。そして一番空想性と想像性が強い人物が劇の進行や劇の世界を支えている役割を果たしているのだ。

脱走兵の長男と追跡している憲兵が手を取り合ってダンスするシーンを、我々はあり得ないと思うが、なぜか楽しいし、笑い転げる。そして、このような冗談とも本気ともわからない場面によって、井上ひさしが(巧みつくっているな)と思ってしまう。この場面の描写で、すべてを受け入れ納得させられてしまう。源次郎なる人間像に疑いの目をもつことなく、何の抵抗もなく終ってしまうという、つまりは井上戯曲術に陥ることになる見事な作品と言える。

## (3) 『紙屋町さくらホテル』の

長谷川清

新国立劇場の柿落とし戯曲『紙屋町さくらホテル』(97年)は、井

軍人に便りを出して文通している。憲兵の権藤は「兄さんのことさえなければ、このオデオン堂は日本一的美談の家になれるに」と惜しがるくらいである。それを聞いた母のふじは、脱走兵を出した非国民のこの家を美談の家にするため、娘のみさが傷痕軍人を婚に迎えることを提案する。文通相手の、溢れんばかりの封書や葉書のなかから、目隠しをしてみさをは婚になる人を選ぶ。引き当てられたのは、戦場で蝶々を捕まえようとして銃弾に当たり、左手を失った、軍国主義を信望する実直な男・高杉源次郎という人物であった。

ここで偶然とはいえない不思議な描写があった。トランク2個に溢れんばかりにあった封書や葉書を最初に憲兵の権藤が何枚か取るシーンがあるが、その時一枚目に引いたのが、東京第一陸軍病院第三病棟の高杉源次郎なのである。みさをが風呂桶に

上ひさし作品のなかでも歴史を問う力作と言われる。被爆死した新劇俳優丸山定夫や元宝塚女優團井恵子といった、我々にもその名が聞こえてくる実在人物から、言語学者や日系二世の敵性外国人などを織り交ぜ、広島での移動演劇団さくら隊を描く。

それだけではなく、そこになぜか薬の売人・古橋健吉という男と、傷痕軍人の林という男が入団してくる。古橋健吉なる人物は、実は海軍大将・長谷川清なる人物で、天皇の密使として陸軍側の本土決戦の備えを探るため、地方を見て廻る、そのためにこの広島に現れるという設定である。そして、傷痕軍人の林という男は、戦争指導者長谷川清の行動を監視するため尾行している陸軍中佐(その後GHQの係官)・針生武夫なる人物である。二人は役者として行動をとることになる。こ

入れてかき回してから選んだ人物も高杉源次郎である。これは運命的に選ばれるものと強い印象を残すために用意されたものか、作者の想像力のなせる業か。この点に目を向けると、敵性音楽のジャズを愛する夫婦のもとへ、また脱走兵が出るような家庭へ、軍国主義を信望する傷痕軍人が婚に来るとは、劇の展開にあまりにも都合な人物ではないか、と思えてくる。さらには、源次郎という人は、劇の進行とともに次第に帝国主義の道義を疑いはじめ、脱走兵まで庇う人間に移り変わっていく。この敵性家族に馴染んでいくのである。これほど劇的な展開に好条件をもつ婚入りがあるであろうかと、疑ってみたくなる。だが、このような展開をみせる人物を見事に作者は、(空想力と想像力)で造形しているのだ。源次郎を他の登場人物と比較すれば、より空想性と想像性



巧みに面白く描いている。なかでもバツグンなのは、日系二世の敵性外国人神宮淳子を二十四時間監視するためにやってくる特高の刑事戸倉八郎が、さくら隊が上演する「無法松の一生」の芝居の稽古に役者として参加し稽古するという、ここでも笑い転げるシーンを作っている。特高の刑事である取り締まる人間が、さくら隊の芝居一座の役者と一緒に役について舞台に立つことなどあるのだからかと疑うが、見事に造形されたアイデアだと絶賛し、またしても作品全体を納得してしまうのである。しかし、長谷川清という天皇の密命を受けた戦争指導者のような男が、広島島の演劇さくら隊に入るという設定こそ、そんなことがあるであろうかと疑いたくなる。だが、さくら隊の人々と海軍大将や陸軍の人間、そして特高刑事が混ざり合って織り成す物語は、緊張と緩和を醸し

という、二代目藪原検校の杉の市の資料を見せて欲しいとの申し出があり、そこで井上ひさしは「このときほど慌てたことはなかった。評伝などとは嘘の皮、二代目藪原検校なる人物は、じつは実在しないからである。つまり、わたしが勝手にこしらえあげた架空の人物だったのだ」と述べているのだ。そしてその研究家に井上は「あまりお力を落とすにありませんように。二代目藪原検校に関してはわたしの書いたことはすべてフィクションであります。なにかも評伝めかして書いたわたくしが悪いのであります」と手紙をしている。先に引用した評伝劇についてのコメントのように、研究者まで信じこませたのだ。「まだ調べのついていないところを空想力と想像力でがばと押しひろげて芝居にする」という〈偽評伝劇〉へのこの言葉こそ意外と作者の本音であり、井上ドラ

出して楽しさは倍増される。

井上ひさしは物語づくりの名人だろう。そしてその先に来るものは、長谷川清が自分は戦争指導者としての戦争責任をとりたいと出頭して来、天皇の責任まで辿り着くというリアリティを獲得することである。庶民の心に触れた海軍大将、全国を行脚するという現実には考えにくいものを〈空想力と想像力〉によって描かれる水戸黄門のようなこの男の造形こそ、このドラマの面白さと核心を成立させていると言えよう。

#### (4) 『藪原検校』の杉の市についてのエピソード

井上ひさし自身が『藪原検校』(73年)のあとがきに面白いというか興味あるエピソードを書いている。ある日本盲人史を研究している人から井上ひさしに手紙が来た——「わたしは四十年間、盲人の歴

史について調べている一学究であるが、あなたの評伝『藪原検校』を一読し、自信をなくした。というのは藪原検校の初代については資料もあり、わたしもかなりのところまで調べがついているが、その二代目、すなわちあなたの書かれた杉の市という人物のことは、皆目知るところがないからである。というよりも、後に二代目になった、この杉の市という男がいたことすら知らない。四十年も盲人史にかかざりあつていながら、悪鬼のごとき二代目藪原検校を知らぬとは、わたしの研究方法になんらかの欠陥があるに相違なく、一時は研究を放棄して(なげ出して)しまおうとさえ思った。(略)ついてはあなたの所持なさっている二代目藪原検校に関する資料を、なにとぞ一度見せてくださるわけにはまいらぬだろうか」

#### (5) 『父と暮せば』における井上術

最近、日本のいろいろな場所で絶賛を博している『父と暮せば』(94年)という作品がある。映画にもなり、DVDにもなり、舞台のビデオもあり、再演が重ねられ、外国語翻訳版も出版された。全リ演加盟の劇団も、連続のように上演している作品である。井上ひさしの作品は、〈音楽劇〉と言われるが、最近の作品はまさに音楽が中心かと思われる芝居である。ところが、この『父と暮せば』という作品は、歌はなく、音楽劇ではないのである。

舞台は昭和二十三年七月の広島。全四場すべてが娘美津江の部屋で、娘美津江とその父親竹造の対話からなる二人芝居である。被爆という

重い事実の物語であるが、ユーモラスな筋運びでもって、しかしリアルな感動を与える名作なのである。これまでのものでその後の井上ひさし音楽劇とは、全く違った作品と見える。『父と暮せば』は突然変異のように現れた、正攻法に書かれた別作品なのであるか。だが、そこは井上ひさしらしく、演劇的な時間空間を操る、作者の言うところの〈劇場の機知〉(「父と暮せば」あとがき)が巧みに使われている。父親は被爆して死んでいるが、娘の前に現れるという、幻か亡霊か幽霊か、とにかく現実には存在しないものの造形として登場する。機知と想像力を使って、単にナチュラルな手法のみではない、死者と生者の対話という形象である。しかし、この手法は奇抜だとも特別な井上アイデアとも思うことなく、演劇として自然に見られる

範疇なのである。ではやはり、「父と暮せば」は、井上ひさしが被爆された人々の生きざまを、感動をもって描いた、これまでの路線と違った(ストリート)な戯曲を書いたと解してよいのだろうか。確かに、一見そのようなドラマに見えるが、そして確かにこれまでの音楽劇ではないが、ちよつと立ち止まって、この作品を眺めて見ると、この作品もまた井上ひさし流に、つまり(空想力と想像力)で書き上げられたドラマと思えるのである。

このドラマには、実はもう一人重要な登場人物がいるのだ。木下正という青年である。木下青年とは、美津江の勤める図書館に来る文理科大学物理教室の授業助手。原爆資料を集めている。故郷は岩手、美津江の好きな宮澤賢治のふる里。美津江の原爆病が出たら命がけで看病するという、美津江の恋人になる青年であ

る。三島由紀夫の「サド侯爵夫人」のサドのように舞台には最後まで登場しない人物である。

しかし、木下青年の存在は、美津江の(自分だけ生き残って申し訳ない、自分が幸せになることがうしろめたい)という思い、この戯曲のメインテーマとなる美津江の意識、その土台要素を生み出している存在なのである。美津江が悩む、このようなキリスト教的な受難(あるいは、罪)とも言える内的認識(意識)を、美津江に生み出させる木下青年の造形を、井上流(空想力と想像力)で作りに出していると思われる。いや木下のような青年は当時の広島に生きていたと反論する人もいるだろう。確かにそのような青年がいたであろう。しかし、美津江の内的苦悩を最も劇的にしている(自分が幸せになることがうしろめたい)というこの行動を、真に効果的に正当化し、優

れて劇的なものにし、美津江の行動(苦悩)をしつかりと作り出している源になるのが木下青年の存在なのである。それは、(現実には存在する青年以上)の好都合の人間像であり、作者がその見事につくりだしていると考えられるものだ。しかも、木下青年の存在があざとい存在にならないために、これもまたもの見事に舞台には登場させないという手法をとっているのである。(劇場の機知)として目に見る仕掛けは、父竹造の死者だけなのだ、我々はいつの間にかいざなわれることになる。

「父と暮せば」がこのように見えてくると、この作品もまた井上ひさしの(空想力と想像力)で作りに上げられた一連の作品路線と同じにあることが透けて見えてくる。つまりは、「父と暮せば」の木下正は、「きらめく」の源次郎や「紙屋町」の長谷川、「薮原」の杉の市と同じ想像(創造)

路線にある人間像と言える。正攻法で書かれたと思われるドラマにも(空想力と想像力)で土台を作り上げる井上ひさしドラマトゥルギーが一貫してある見事な手法である。

井上ドラマを評して「虚実こもこも」の演劇、「虚実とりませ」の戯曲と言われるが、この(虚)の言葉に当たるものは、(空想力と想像力)で書く、あの『薮原検校』の(偽評伝)の(偽)に該当するとすれば、井上ひさし戯曲は「虚実こもこも」の「虚実とりませ」の戯曲ではなく、(虚)が(実)を成立させている作品(実が虚によって支えられている構造)と言える。しかし、我々には、「虚実こもこも」「虚実とりませ」程度に思わせる井上ひさし作劇術は見事なものである。

#### (6) 井上ひさしは日本のブレヒトか

井上ひさしは自筆年譜(65年)で

「この番組(『日本テレビ』九ちゃん)の快調なテンポ、そしておもしろさをなんとかして戯曲にとりいれることはできないだろうか。と思索するうちに、つまりこれは(ブレヒトの芝居にギャグを加えることと同じである)と思いつき、ブレヒトを徹底的に読みはじめた」と。また、ある人のインタビューで「私が若いころ、ブレヒトが全盛で、『三文オペラ』などは千田是也さんの訳を暗誦したほど、ブレヒトと安部公房さんの影響が大きい」とも語っている。ブレヒトを徹底的に読んだということに注目させられるが、最近作の『夢の裂け目』『夢の泪』では、ブレヒト作品の作曲者クルト・ヴァイルの曲(『三文オペラ』など)を劇中歌に使っている。また、例えば、扇田昭彦は「シアターガイド」で、「井上劇は普通、ミュージカルとは見なされない。それは井上劇が、プロードウエ

イ流のミュージカルではなく、社会批評性の強いブレヒトの音楽劇の流れを引いているからだ」。大笹吉雄は、「WALK」という小冊子に「日本のブレヒト——井上ひさし掌論」で、「井上ひさしをあえて(日本のブレヒト)と呼びたくなる」と書いている。現在、井上ひさし作品を上演している劇団がどれほどブレヒトを、あるいはブレヒト的手法を意識して井上作品に取り組んでいるかは明確ではない。が、確かに、井上ひさしがブレヒト的な戯曲作法を使っていることは明らかだ。

ただ、ブレヒトのように戯曲を世界に問いかけていく、開かれた、そして世の変革を願う戯曲と、井上ひさし戯曲が、共通項をもっているかと考えれば、どのような答えが出てくるか。幸いというのか、言及する紙幅がなくなつたので、問題の所在だけを示せば、例えば、井上ひさし



の戯曲は、「兄おとうと」のラストシーンのように、対立していた兄弟が仲良くなるという、ドラマの世界が和解で和やかに終息し、「紙屋町」の天皇批判を口にする長谷川清も、ふと、さくら隊での心楽しい生活を思い起こすことでラストが締めくくられる、といったように、作者が最後に示す劇世界は、各個人が時代につつまれる世界を示しているように思われる。これは、ブレヒトが社会化や社会性に重点を移すのと、井上ひさしの世界は、井上ひさしの宗教性故か、宮澤賢治を愛する故か、急進的な変革性よりも、柔らかに現状に対応する個人の姿勢が浮かび上がって終るように思える。多くの人が指摘するブレヒトとの共通性は確かにあると認められるが、基底のところでは、ブレヒトとははっきりした違いを持っているのではないか。その意味においては、井上ひさしの

ドラマは、個人の内面に覆いかぶさる受難を描いたものであり、意外にも、井上ドラマは（マリア・ヨゼフなる受洗名をもっているからではないが）、広い意味での（宗教劇）と言えるのかもしれない。

虚が虚で終わるのではなく、虚が実を生むという逆転した発想法が今日のリアリズム演劇には必要なのだろう。井上ひさしの（虚）（偽）をもって（実）（真）を得ようとする発想こそ、我々はさらに一歩越えて学ぶべきものと思うのだが、しかし井上ドラマは一歩間違えば、ブレヒト劇的でも宗教劇的でもない（メロドラマ）に終わることを上演者は知っておく必要があるだろう。井上ドラマの（上演の点検）こそ、今求められているものと言えるのかもしれない。

（創造集団アノニム演出者・近畿大学舞台芸術専攻教授）

## 劇団を訪ねて

### 〈劇団きづがわ〉（大阪）

#### 働きながら芝居ができるか？

楠本 幸男

が強いところですね」。

このままでは死んでしまう！

白坂友哉（26歳）の朝は早い。彼は牛乳屋で働く。朝4時半起床。朝の5時から12時半まで配達。配達の後も店で仕事がある。休みは日曜と盆正月のみ。1日の睡眠時間は4、5時間だ。それでも9月から朝からの勤務になったので芝居はやりやすい。それまでは昼からの勤務だったので、9時頃まで仕事で残ることもあり、なかなか稽古に参加できない。去年の3月上演された大阪自演連合同公演の「レター・オブ・グラウン・ド・ゼロ」では大役を演じた。なんと女性の役だった。大阪の劇団のつわものに囲まれ、白坂は難しい役を堂々と演じた。「きづがわのいいところですか？」芝居のメッセージ性

寺島由浩（30歳）は派遣社員だ。今は大阪ガスの下請けで、ガスメーターの検針の仕事をしているが、その前は消臭剤を作る会社に派遣されていた。液をつくり、箱入れ、梱包まで1人でこなした。昼夜2交代制で、夜勤の時は9時まで劇団で稽古して、10時から仕事に入る状態が続く。仕事はきつかった。社員はほん少数で、管理からメンテナンスまですべてこなす。彼らの過酷な仕事ぶりを見て、「このままでは（過労で）人が死ぬ」と思った。「ほくらも、ストライキじゃないですけど、

### 「九条の会」全国交流集会

日時 6月10日(出)11:00～16:30  
場所 日本青年館（JR千駄ヶ谷駅または信濃町駅、地下鉄銀座線外苑駅または大江戸線国立競技場駅）

●第1部 11:00～12:30

全体交流集会（日本青年館ホール）

☆昼食はあらかじめ用意ください。

●第2部 13:30～16:30

分散会（日本青年館ホールおよび近隣の施設）

（申込み締切り）5月15日（必着）

セミクローズド方式で、原則「当日参加」はありません。

「連絡先」「九条の会」全国交流集会

運営委員会

東京都千代田区西神田2-5-7-303

「九条の会」事務局内

mail@9jounokai.jp

TEL 03-3222-15057

FAX 03-3222-15076

本当に（仕事を）休んじやおうかって思いましたよ。で、何とかしてくと、現場の次長に猛烈に抗議しましたけど、だめでした」。寺島は上司に「正社員にしてやる」と言われたが断り、その会社を去った。今は芝居をやりながらできる仕事を選んでいる。去年は仕事がなく、貯金を食いつぶした。今の仕事は、段取りさえきちんと組めば早く終われることもある。しかし、収入は大幅に減った。正社員でない事で親の風当たりもきつい。

毎日がドラマ

昨年の10月、「きづがわ」は「稲の旋律」という劇を上演した。引きこもりの青年の立ち上がりを描いた作品だった。教師の私には不満もあったが、舞台を温かく見守る観客がいた。そこにはまぎれもなく「きづがわ」の観客がいて、舞台と観客の

交流が成立していた。「お客さんは劇団の成長を楽しみにしてくれている。それがうれしい」と語る橋野悦子(39歳)は主役の青年を演じた。彼女は大正民主商工会に勤める。中小零細企業の経営者や、商店主の税務、金融などの相談を受ける会員制



4階の稽古場へはらせん階段を登る

人はなかなか組合に入らないですよ。でも、最近、若い先生がくも膜下で亡くなったんです。組合の役員がいるところはましやけど、そうでないところは管理がきつい」。

### 「派遣」がラインをまわす

河原正隆(48歳)はコンピュータのプログラマーだ。劇団ではもっぱら裏方を務め、小道具係になるとこりにこると評判だ。81年のミュージカル『船と仲間とど根性』で合唱団員として参加したが、芝居をやりたいと入団。6年前に派遣会社に入ってから、勤務地から劇団まで2時間かかり、なかなか劇団に來れない。本当は役者をやりたいのだが今はその時間がない。「プログラムを組んでるのは僕ら派遣社員ばかりで、社員は管理だけなんです。重要なデータも全部ここに入ってるんです」と小さなステイックを見せて

の組織である。大正区の自営業者の3分の1近くが会員だ。19歳のときから「きづがわ」に出入りし始めた。勤めるとき、劇団活動をつづけることが条件だったので、稽古はできるだけ優先しているが、仕事の責任も重くなり、夜の10時、11時まで仕事をすることもある。最近相談が多いのが多重債務だ。「もつと早く来てくれればいいんですけど、相談を受けたときは差し押さえの期限の日になっていたり」。

「今(借金の)取り立てがきてる! 助けて!」「警察に被害届出せ!」緊張したやりとりが続く日々だ。会員と銀行にかけ合いに行ったり、若い取り立て人とわたり合うこともある。彼女は今、悩んでいる。「働きながら芝居をするのはすばらしいことだと思っただけど、私の芝居(演技)は生活感がありすぎるのではないだろうか」。

くれる。「これで(機密保持が)いいのかなって心配になりますよ」。「社員は(生産のことは)何も知りませんよね。派遣がラインをまわしてるんです」寺島があいづちをうつ。

### 心はいつも劇団員

師走の稽古場には劇団員が集まりだしていた。久々に顔を見せる人もいるようだが、劇団員はごく自然に迎える。まるで家族のような雰囲気だ。「劇団員ですか? ええっと、何人かなあ...。18人くらいか。結果できていない人も多くてね」と語るのは劇団代表の林田時夫(61歳)だ。「稽古日? 決まってるじゃないです。平日はなかなか集まれないですね。よく自身がだめだから、土日に集中して稽古するんです」。

喜田和雄(49歳)は大工だ。入団して20年あまりになる。10年前に仕事を独立してからなかなか芝居をす

### 50歳の新人

西尾純子(50歳)はこの春に入団した新人だ。「こんにちは、母さん」で初舞台に立った。「その辺の紙切れに名前を書いて入団したんです」と笑う。しかし、最初はびびった。「家から1時間かかるでしょ。夫は、今でも忙しいのにどうするんや?」って。組合の仕事も忙しかつた。しかし、公演が終わると張り合いのない生活が続いた。家にも時間も長く感じられる。子どもたちも「お母さんは芝居をしてる方が生き生きしてる」と言ってくれた。彼女は小学校の先生。学校現場は年々厳しくなる一方だ。3年前には「交通事故でも起こして(学校を)休もうか」とまで思った。好き勝手なことをする一部の子どもたちにもふり回され、懇談会で親に責められた。今、彼女は組合の支部副支部長も務める。「若

る時間がとれない。建設業界はここ5年ほど厳しい状態が続いているという。「はいずり回っている状態ですよ。今日も首(契約)を切られたとこなんですよ。何とか仕事はとぎれずにやっているが単価が安い。しかし、仕事仲間からは「芝居をやっている」おまえはえらい、わしらの誇りや」と言われたこともあるし、券もよく買ってくれる。今は役がついたとき、稽古に來る状態だが、劇団のことはいつも心の片隅にあるという。

橋本依子(63歳)は去年の秋、『稲の旋律』で久々に舞台上に復帰した。今は小学校教師を退職し、嘱託として新任の先生の指導にあたっている。24歳の時入団。画家になるつもりだったが挫折し、虚無的な生活をしていった。友人に勧められて入団。67年、『清水かずの死』をけんしよう炎患者の前で上演した。患者がば

ろぼろ泣いている。初めて人と交流できたと思った。それから10年、何もかもほって芝居に打ち込んだ。親に反対され、家を飛び出した。稽古を12時に終わり、晩ご飯を食べに居酒屋へ。帰って朝の四時頃まで学校の仕事をした。しかしそんな彼女も12年前、心身症に。家族の病気や職場でのストレスが原因だ。「芝居に打ち込んだら治るのでは」と考え、「パパのデモクラシー」の公演に打ち込んだ。しかし改善しなかった。彼女を救ったのは意外にもギャンブルだった。パチンコにはまった。相当な金額をパチンコにつきこんだ。ある日突然、病気は治り、7年ぶりに眠れるようになった。4年前のことだった。

#### 職場の矛盾を芝居に

劇団きづがわは63年、「南大阪演劇研究会」(劇研)として発足した。

ないですよ」。その佐保田は今年、「父と暮らせば」を企画、出演し、地域で上演した。

劇団代表の林田時夫は67年、名村造船に就職。その直前、高校演劇部の先輩で4つ年上の和田雅子に誘われ「劇研」に入団、そして彼女と結婚する。林田にとっては入団、入社、結婚が同じ年の春につづいた。和田は林田よりも半年前に入団。今年の秋、「こんにちは、母さん」で神崎福江役を軽快に演じた。

#### 地獄の名村

林田は、就職した名村造船が「地獄の名村」と呼ばれていることを入社後に知った。現場はすさまじかった。10数メートルの高所に細い板を渡して船の間を行き来する。工員たちはサーカスのように溶接や塗装をしていた。事務所は騒音で電話が聞き取れない。時あたかも造船ブーム、

創立メンバーで今も劇団に残るのは山本惣一郎(63歳)だけだ。「僕は赤松についてきたという感じだね」。赤松というのは、昨年急逝した、演劇会議の赤松比洋子のことだ。山本や赤松を含めて5人で「劇研」が結成された。

山本は元関電の労働者で技術・設計畑だった。「関電思想差別闘争」の108人の原告の1人だ。職場のボーリング大会のときも、慰安会のときも、「君は来てくれるな」と言われた。参加するといつも課長の横に座らされた。給料も差別された。裁判闘争は02年に全面勝利、解決した。闘争30年、彼は、芝居をやったから闘いを続けられたと言う。「芝居を職場が応援してくれましたね。劇団も、「働く中での矛盾を芝居にしていこう」という方針でした」。

「劇研」は寺や、争議で占拠している工場構内など、稽古場を転々

労働災害も多かった。69年には8人が事故で死んだ。

林田は組合青年部で活動する。組合は投票でスト権を確立しているのに、「進水式をひかえている」という理由でストをしない。林田らは闘わない組合に対して再三異議を唱えた。71年、出向配転を拒否する林田ら2人は会社から閉め出された。林田らは裁判所に不当性を訴え、わずか3日後、仮処分の命令がでた。しかし、会社側は「給料は払うから自宅でいなさい」と命じ、8人のガードマンを雇って構内へ入れなかった。「俺の給料などしれている。俺より高給のガードマンを8人も雇って会社から閉め出そうとしている。会社はそこまでするのか！」林田は歯ざしりした。朝出勤する。しかし、ガードマンに阻まれ入れない。なすすべもなく門前に立つ、そんな日々が続いた。まだそのころはどのよう

としていた。佐保田章(59歳)はこのころ(68年)入団した。昔から人を喜ばすのが好きで、それまで別のサークルで芝居をしていた。「劇研」へ入ったきっかけは「おふくろの歌」という舞台への出演だ。日鋼室蘭の闘いを描いた舞台だった。観客は共感し、泣いている。「すごい！」それまでにやっていた芝居とまったくちがった。「あのころは楽しかった。自分の好きな芝居ができるし、意義もあるし、自分の生き方を見つけたと思った」。彼は今まで自動車の整備士、民芸品の販売、大工などの仕事をしてきた。芝居のために仕事をやめ、終わると次の職をさがした。今はコンクリートブロックの製造販売の仕事をしている。肉体労働だ。家に帰れば脚本など読む気がしない。「体を休めるのが先決」という。「ここ10年ほど景気悪いですね。10年間ボーナスもなし、昇給もずっと



「闘っていたから芝居ができた」(林田)

に闘っていたのか分からなかった。その後「入構妨害禁止」の仮処分もでたが、会社へ入っても守衛がついてくる。労働者はだれも話しかけてこないし、話しかけても逃げていく。やがて、林田は夫婦でピラを作り、会社での出来事や合理化計画などを労働者に訴えていく。1973年、この闘いを林田みずから「立ち



んほうの詩」という芝居に書き、劇団で上演した。仲良くなった守衛の班長が変装して見に来てくれた。会社は会場で密かに労働者をチェックしていたのだ。4年の闘いの後、高裁の判決前に和解する。勝利だった。林田らは復職する。

75年、「劇研」は「劇団きづがわ」と名称を変えた。「このあと78年頃までが劇団はピークやったし、自分としてもいちばん芝居に集中したと思いますね」林田はふりかえる。

1978年、大正区に4階建ての今のビルを建てる。1階は貸しブティック、雅子のアトリエ（服飾）、劇団倉庫。2階、3階は林田夫妻の居宅と劇団事務所、4階が20坪ほどの稽古場だ。稽古場公演には40人ほどの観客が入る。土地代と建設費は林田夫妻が資金を出し、一部、劇団員や支持者のカンパでまかになった。大阪市大正区は、大企業もあるが

#### 突然の、完全勝利

86年、突然、「全員大阪に戻ってもらいます」と会社から和解の提案があった。全面勝利だった。闘いから7年がたっていた。「はつきり言って全員もどれたのがいちばんうれしかったですね」林田は言う。林田らは組合に公開質問状を出した。「おまえら、首切られた労働者を知らん



『こんにちは、母さん』の稽古風景

中小企業も多い町だ。金属、化学、造船などの工場がひしめく。近くを流れる木津川は淀川の支流で運河。高度成長の頃は汚かった。川だけではない。空気も汚染され、公害の町だった。北海道から集団就職でやってきた訓練生は、ほこりのためすぐに鼻毛が伸びたという。

#### 古着を分けあって闘う

稽古場を建てた翌年、転籍出向を断った林田ら9人を会社は解雇した。再び闘いが始まった。造船不況のさなかだった。「仮処分までの2年は収入がないし、つらかったですよ」林田はふりかえる。争議団を作ったカンパを集めたりアルバイトをしたり、行商をして収入を得た。皿を売った、靴下を売った、ぶどうも売った。81年、争議団の闘いを、再び林田みずから脚本に書き（共作）、ミュージカル『船と仲間とど根性』

ぶりして、どう反省してるのか！。もちろんなしのつぶてだった。争議団の9人は新しい労働組合をつくった。

今、林田は囑託として働きながら、全日本金属情報機器労働組合（JMIU）の大阪地方本部書記長として、争議、リストラなどの問題に取り組む。中小企業は経営危機のところが多く、こちらから経営に提案することもたびたびだ。会社をつぶさせないため、賃金カットや、退職金の分割払いなど、ぎりぎりの決断をしなければならぬこともある。人の生活がかかっているだけにつらい選択だ。

#### 一人一人の要求を実現

今年の夏、「きづがわ」の若手が自主的に企画して、鴻上尚史の『ハルシオンデイズ』に取り組んだ。演出は河塚俊哉（34歳）。河塚は金属

を上演する。劇団未来を始め、大阪の劇団、演劇人も協力した。カンパも含めて300万円の収益がでた。

争議団は月一度集まって、家族会を開いた。みんなでカレーを炊いたり支援者から寄せられた古着を分け合った。それを見た争議団の若い弁護士は思った。「物が豊かなこの時代に古着を分け合っている…。この人たちの闘いは本物だ！」その日からこの若き弁護士の仕事ぶりが変わった。

支援を受ければ受けるほど他の闘いのことも考えねばならない。林田はますます忙しくなった。彼がいないうちは和田や山田一巳（55歳）が劇団を支えた。山田は現在劇団事務局長。本職は小学校の先生で、劇団では演出をしたり、役者もするし本も書く。劇団のレパトリーは林田や山田が提案して「なんとなく」決まることが多いという。

関係の中小企業に勤め、主任。仕事は夜の8時、9時までになり、なかなか稽古に來れない。公演1カ月前、若手に泣きつかれ、和田と林田、山田が交代で稽古をみた。公演は何とか成功した。「彼（河塚）は出番がないときは（仕事に疲れて）寝てるよね」「いや、出番があるときも寝てるよ」橋本がつっこむ。「今、若い人とベテランが一緒にやっていけるような可能性が見えてきた」と和田が言う。「これまで通り、闘いや運動を励ます路線もやっていきたい。それと『こんにちは、母さん』のようなエンタテインメント性のあるものもやっていきたいですね。一人一人の要求にそった活動をしていきたい。それぞれが自主的にやっていることも認めた上で、なおかつ劇団きづがわの活動に取れんさせたいから」争議団の闘士は淡々と語った。

（2005年12月取材 敬称略）

## 韓国公演を終えて

「銃口」教師・北森竜太の青春

三浦綾子／原作 布勢博一／脚本 堀口始／演出

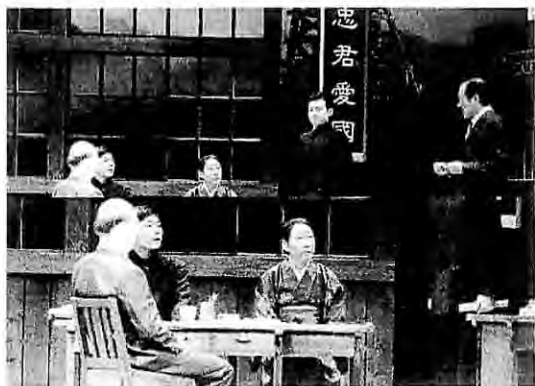
青年劇場 銃口 韓国公演団团长 島田 静仁

(文責・編集部)

青年劇場は昨年「銃口」を戦後60年・日韓友情年2005の特別企画として、韓国、北海道、そして東京再演という演劇行動を展開しました。その中で、私が長年関わってきた韓国での「銃口」公演について報告します。

ご存知のように、昨年が日韓条約締結(日韓国交正常化)40年ということで、多くの文化事業が計画され、演劇交流でも多くの作品が日韓を行き来し、共同作品もつくられました。私たちの「銃口」もその一事業でした。しかしながら2005年は、日韓、日中間の戦後最悪の関係となっ

冷却した状況でも、韓国側の、迎え入れてくれた人々の熱い友情と努力に支えられ、また反感がつのる中で観劇してくれた観客の熱い反応と連帯が逆に大きく浮かびあがってきたのです。以下、概要を綴ります。



舞台写真 蔵原輝人撮影

た年ではないでしょうか。少なくとも私が関わってきた10年近い日韓関係では最悪であったといえます。

2005年という年は、日本による朝鮮半島の植民地支配に向けた決定的な一歩となった1905年の日韓保護条約(第二次日韓協約)乙巳保護条約)百周年、植民地解放(光復)60周年にあたります。

2月から始まった竹島(独島)問題、歴史教科書問題、靖国参拜問題、憲法改定の動き、衆議院選の結果。そして私たちが韓国公演巡演中に、小泉靖国参拜、釜山でのAPECの麻生外相発言……朝鮮侵略の歴史的

### 韓国公演の意義と特徴

①「日韓友情年2005記念事業」として実施されたことの意義  
国内では、文化庁国際文化交流事業であり、外務省「日韓友情年2005」実行委員会記念事業であったこと。また韓国では、韓国の外交交通部(日本の外務省にあたる)の正式の認定事業として、韓国の最大の芸術文化団体である(社)韓国芸術文化団体総連合会(芸総)創設以来の初めての海外招聘事業であったこと。

ちなみに、招聘元になった「芸総」は韓国演劇協会を初め、建築家、音楽、舞踊、文人、美術、写真作家、演芸、映画人、音楽という10の協会で構成されている。芸術文化団体の連合組織であり、海外及び国内各地域に114カ所の支部を擁している。今回の韓国公演はその13カ所の

な傷口を想起させる出来事が次々と日本政府高官から出され、韓国国民の感情は、日本の動きに対して「憤怒」となっていたのです。

竹島(独島)問題が、出るまでに内定していたすべてのスケジュールはいったんストップされ、公演決定していた地域では行政の支援に待ったがかかりました。主催者の現地予算の確保もほとんどが困難をきわめました。そこで、私を含め劇団側から何度も現地に足を運び、真の日韓文化交流をお願いし続けました。

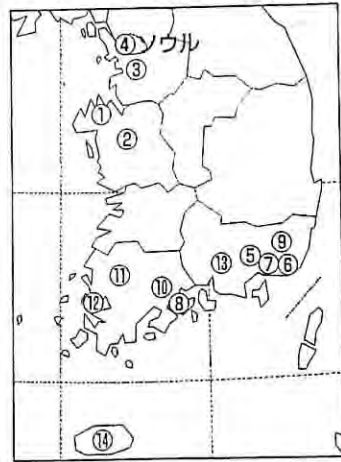
そして、7月末までかかって調整が進み、今回の14地域に及ぶ公演が確保されたのです。まさに、韓国の演劇人を始め、「芸総」に関わってくれた人々の懸命な尽力と厚い友情の結晶のためものです。

日韓の政治情勢が悪化し、日韓友情年2005のとりくみが完全に芸総支部と芸総本部のバックアップがあつて成立した。

②昨年まで劇団に文化庁の在外研修に来ていた金灘日(キムタンイル)氏が中心になって計画をつくり、実際に尽力した公演であり、彼との共同作業であった。

③日韓の多くの演劇人のサポートがあつたこと。  
日韓演劇交流センター(会長大笹吉雄)。林英雄(イムヨンウン)(韓日演劇交流協議会)。金雨玉(キムウオク)(国際児童青少年演劇協会(アシテジ)韓国センター)、韓国演劇協会の事務総長の方智暎(パンジョン)ら各氏と、その友人たちのサポート。そして石坂慎二氏(アシテジ日本センター)とその友人たち。

そして、黄慈恵(ファンチャハ)さんである。全リ演では昨年馬山演劇祭で通訳として活躍した。今回



が秋田雨雀・土方与志を記念したこ  
との意味について) やその思想的背  
景と創造理念・方法についての議論  
もあり、3人の報告内容も含め、日  
韓のリアリズム演劇の交流の歴史を  
知る上でも貴重なものとなった。

〈公演日程 10月13日～11月18日〉

①唐津(タンジン) ②公州(コンジュ)  
③水原(スウォン) ④ソウル(プサン)  
(チャンウォン) ⑥釜山(プサン)  
⑦咸安(ハマン) ⑧麗水(ヨス) ⑨

「銃口」公演チームに喝采を

今年、韓日友情年であるがお祭りの雰囲気は感じられない。竹島問題、小泉純一郎総理の靖国神社参拝挑発、極右政治家たちの妄言など良くない問題が続いたためだ。韓日友情年という名目で数多くの文化行

の成功。その成果とともに、首都ソウルでの上演の成功と反響。

⑦若い演劇人たちとの交流。  
高校生、大学生など青少年観客との出会いができたこと。

⑧ソウル公演初日のシンポジウムの意味。

「築地小劇場の演劇と今日の韓日演劇を語る」を、林英雄氏(演出家、劇団サンウルム代表)、徐淵昊(ソヨンホ)氏(高麗大学教授、演劇評論家、韓日文化交流会議事務局長)、そして日本からは菅井幸雄先生と瓜生正美が参加、馬政熙氏(日韓演劇研究・翻訳家)の進行協力で開催。築地小劇場が近代日本に果たした役割と韓国近代劇に与えた影響、そして青年劇場のルーツなどについて語り合えた。

フロアー発言では、韓国現代演劇の大家である車凡錫(チャーボンスク)先生の積極的な質問(青年劇場梁山(ヤンサン) ⑩順天(スンチヨン) ⑪光州(クワンジュ) ⑫木浦(モツポ) ⑬晋州(チンジユ) ⑭済州(チュエジュ) 14地区24ステージ、観客総数5694人。

韓国のマスコミの報道も、テレビ、インターネット、ラジオ、新聞、雑誌など、百社余りにわたった。その中で韓国でも進歩的なジャーナリズムとして有名なハンギョレ新聞の編集人(専務)キムヒヨスン氏の記事を抜粋して紹介する。(アンケートも訳は公演団の通訳の加藤祐子さん)

\* \* \* \*



10月25日 慶尚南道芸総の方たちと



10月20日 ソウル西江大学ホール客席



11月2日 終演後、梁山の高校生たちと 中央手前が筆者

④韓演劇交流の歴史の中には3つの流れが存在している。

①アングラを中心とした演劇潮流。  
②築地小劇場を源流としたリアリズム演劇の流れ。  
③児童青少年演劇の流れ。

そうした中でこれまで青年劇場の活動が果たしてきた役割が評価されたこと。

⑤三浦文学のもつ韓国での意味。  
国民の3割近いキリスト信者の存在。主催者の各地芸総の代表者たちの三浦文学への共感と期待の大きさ。

⑥14都市での全国巡演となったことと、現地芸総支部、特に各地の演劇協会のみなさんとの出会いと交流

の成功。その成果とともに、首都ソウルでの上演の成功と反響。

⑦若い演劇人たちとの交流。  
高校生、大学生など青少年観客との出会いができたこと。

⑧ソウル公演初日のシンポジウムの意味。

「築地小劇場の演劇と今日の韓日演劇を語る」を、林英雄氏(演出家、劇団サンウルム代表)、徐淵昊(ソヨンホ)氏(高麗大学教授、演劇評論家、韓日文化交流会議事務局長)、そして日本からは菅井幸雄先生と瓜生正美が参加、馬政熙氏(日韓演劇研究・翻訳家)の進行協力で開催。築地小劇場が近代日本に果たした役割と韓国近代劇に与えた影響、そして青年劇場のルーツなどについて語り合えた。

フロアー発言では、韓国現代演劇の大家である車凡錫(チャーボンスク)先生の積極的な質問(青年劇場梁山(ヤンサン) ⑩順天(スンチヨン) ⑪光州(クワンジュ) ⑫木浦(モツポ) ⑬晋州(チンジユ) ⑭済州(チュエジュ) 14地区24ステージ、観客総数5694人。

韓国のマスコミの報道も、テレビ、インターネット、ラジオ、新聞、雑誌など、百社余りにわたった。その中で韓国でも進歩的なジャーナリズムとして有名なハンギョレ新聞の編集人(専務)キムヒヨスン氏の記事を抜粋して紹介する。(アンケートも訳は公演団の通訳の加藤祐子さん)

\* \* \* \*



事やイベントが行われたが、ほとんど大きな感動を与えることができず忘れ去られていった。しかし少なくとも、銃口の上演に関与した人々は韓国人を相手に新しい未来へ向かっていこうと自信を持って話せる資格があると思う。

先月13日、唐津から始まった、銃口の公演は今日梁山で行われる。今後も順天、光州、木浦、晋州公演が続き、来たる18日済州で最終公演の幕を下ろす。日本人だけの劇団が公州、昌原、咸安など、14カ所の都市を回る強行軍をするのは初めてだ。文化的田舎とも言える地方都市で韓国の文化人、観客たちに直接会って交歓したくて今回の企画をしたというのが劇団関係者の説明だ。地域によっては宣伝がうまくいかなかったためにぎこちない面はあったが、ほとんどの公演では観客は熱のこもったスタンディングオ

ベーションで劇団員の苦勞に応えたという。

1964年に創立され、社会性の濃い問題を正面から扱うこの劇団の団員たちが韓国公演にかける人並みはずれた期待と熱意は劇団のホームページでも確認できる。団員たちは各地域の公演状況を掲示板などに書いて中継し、劇団の後援者たちや観客は激励しながら感想を書いたりもしている。40代のある日本人男性は「芝居を愛する人々に国境はない」といい「韓国で見る銃口は格別だ」と表現した。ソウル公演では日本人の観客も多く見られた。

韓日の本当の友好を望み実践している彼らがいるからこそ、過去の清算を取り巻く軋轢と葛藤が終わらなくとも、二つの国の関係を暗く決めつける必要はない。和田春樹東京大学名誉教授は日本に吹く韓流の影響が小さくないと評価し、韓国の監督、

演出家、ドラマのプロデューサーなどが両国の危惧されている現代史が溶け込んでいる文化作品を説得力を持ってつくっていくならば、歴史的な理解に大きな役割を担うだろうと話している。青年劇場の韓国巡回公演はそんな点でこの地の文化人に示唆するところが大きい。5トントラック2台分の機材を載せて、流浪生活を続ける劇団関係者たちに喝采を送り、公演日程が成功のうちに終わることを祈る。

11月3日 キム・ヒョスン

韓国公演アンケートより

(二部を紹介する)

・お芝居を見てこんなに悲しく泣けるのだということ初めて感じました。字幕を見ながら役者さんを見るのが忙しくはありましたが、本当に良い作品で舞台装置や役者の演技、演出すべてすばらしいと思います。

最後に主人公が韓国語で「この作品が両国の架け橋になれば」と言ったときには、我慢していた涙がバツとあふれました。本当に両国の和解となる作品になるといいですね。

(40代女性、ソウル)

・ポストモダンや前衛が強いと思っていた日本の演劇界にこのような真摯で堅固な演劇が存在するとは思いませんでした。根気があり粘り強く真実を明らかにしようとする事実主義的な姿勢がとても印象的でした。少し啓蒙的ではありますが「近代的な良心」の実際を見た気がします。

(50代女性、ソウル)

・見る前は日本に対する良くない感情がありました。見た後、気持ちが変わりました。日本に対する親近感も感じ、役者さんたちの実感こもった演技にとっても驚き、良かったです。

(10代女性、梁山)

・日帝の従軍(徴兵)のときのこと

が思い出される。たくさん涙を流しました。また来てください。

(70代以上男性、光州)

私自身が舞台を通して感じたことは(ちなみに竜太の恩師坂部久哉と朝鮮バルチザン兵士の二役)韓国の観客の実に熱く素直に反応してくれ、涙ながらに激しい拍手をしてくれたことでした。とりわけ竜太が子どもの綴り方を読む場面や治安維持法違反で逮捕・拷問される場面への集中はゾクゾクするものでした。また舞台上の戦時下での家族、恋人、抗日運動の朝鮮人、恩師などのそれぞれの別離・再会シーンへのすごい集中、幕切れの場での心と心を結ぶのが教師の仕事と悟り、再度教師をやる決意を固めるシーンではすすり泣きで劇場は満たされました。

長い日帝の植民地支配から解放され、すぐ南北に分断、朝鮮戦争と軍

事独裁政治での民主化への弾圧。治安維持法ならぬ国家保安法の存在。今、目を見張る韓国の民主化の高揚のなかで、この家族の絆や恋人・兄弟愛への強い共感と反応は、こうした現代史と実に深い関わりがあることを韓国の民族性と一緒改めて深く教えられたわけです。

日本人のなかにも、あの軍国主義に抗して良心をもとうと苦闘した人たちがいたことへの共感。そして、今、民主化の闘いに先頭に立っている方たちや芸術家たちとの連帯ができたことをとてもうれしく思っています。日本の進歩的な演劇運動の一端を韓国14の地域で紹介し、リアリズム演劇の再評価へ一定の役割をはたせたのではと考えています。たくさん感動と涙をくれた韓国のみなさんに感謝しつつ、今後ますますこうした演劇交流をアジアに拡げていくことを祈念して報告とします。

〈ロシア演劇レポート ②⑥〉

## ロシア演劇 この一年のあれこれ

桜井 郁子

〈黄金のマスク賞—2006〉のノミネートが12月20日発表された。ドラマ劇場関係は「大舞台」「小舞台」の各作品賞と、演出家賞、女優賞、男優賞、美術家賞などの候補が挙げられた。例年のように、3月29日から20日間モスクワで競われる。まず〈マスク賞—2005〉の結果を報告してから、〈2006〉ノミネートの詳細を述べよう。

〈2005〉の受賞結果は次のとおり。「大舞台」作品賞と美術家賞は、チェーホフ／原作『ロスチャイルドのバイオリン』（モスクワ青少年劇場、K・ギンカス／演出、S・バルヒン／美術）。「小舞台」作品賞と演出家賞は、W・フォークナー／作『死

の床に横たわりて』（モスクワ・タバコフ劇場、M・カルバウスキス／演出）。注目の新人演出家、カルバウスキス（フォメンコ先生の教え子）は初登場で受賞した。この両作品とも、去年のレポート⑤で紹介済みである。「ロスチャイルドのバイオリン」はペテルブルグでも上演され、ギンカスは勝利賞、なども受賞している。その他の受賞結果は省くが、「革新賞」をもらったのが、モスクワの影絵劇場の「黙示録」。この劇場は05年秋、世界人形劇フェスティバルに招かれて、他の作品を持って来日公演をした。

〈2006〉のノミネートに移ろう。「大舞台」候補作品は、◎チェー

ホフ／作『桜の園』、オムスク・ドラマ劇場。◎シェイクスピア／作『リア王』、トウバ共和国の音楽ドラマ劇場。◎A・オストロフスキイ／作『森林』、モスクワ芸術座。◎A・F・シユミット／作『オスカーとバラ色のひと』、ペテルブルグ・レンソヴェート劇場。◎チェーホフ／作『三人姉妹』、モスクワ・フォメンコ工房。◎ゴリキイ／作『変人たち』、オムスク・第五劇場。

「小舞台」候補作品は、◎『犠牲を装って』（A・オストロフスキイ／原作『最後の犠牲』より）、モスクワ芸術座。◎『少年たち』（ドストエフスキイ／原作『カラマーゾフの兄弟』より）、モスクワ・演劇芸術スタジオ。◎ゴリキイ／作『どん底』、ペテルブルグ・小さなドラマ劇場。◎『田園生活の情景』（チェーホフ／作『ワーニャ伯父さん』より）、モスクワ・スタニスラ

フスキイ邸の傍の劇場。◎ストリンドベリ／作『令嬢ジュリー』、オムスク・ドラマ劇場。◎ゴリ／原作『外套』、モスクワ・ソブレメンニク劇場とメイエルホリドセンターの共催。

オムスク市から3作品が登場しているが、ロシアの地方都市が演劇でも頑張っているひとつの例、後で述べるがそれなりの競争をしていることも関係していると思う。さて、『三人姉妹』と『外套』についてはレポート⑤で紹介済みである、しかも写真入りで。それぞれ04年秋に初演の舞台をみせており、〈マスク賞—2006〉の候補対象が04年秋から05年初夏までのシーズンであるのに対して、レポート⑤の出稿が05年1月だった。この時間のずれがなせる業で、おおかたの論評どおりに報告したら、予言したような結果になった。

演出家賞候補11人と、美術家賞候補6人については省く。女優賞候補4人のうち、『外套』主演のM・ネーローワの強力な競争相手になるのが、ペテルブルグ・レンソヴェート劇場『オスカーとバラ色のひと』を演じたA・フレンドリヒ。彼女と作品そのものについては後で述べる。男優賞候補6人のうちに、モスクワ・マールイ劇場のベテラン、V・ボチカリヨフが『最後の犠牲』の舞台で登場しているのに注目したい。

ノミネートされた作品の多くが東西の古典であることにお気づきだろう。演劇界の趨勢としてもこの傾向は強い。モスクワの「総合プログラム—アフィーシャ」05年12月号で調べたら、全105劇場の全演目1101のうち、作品の多い順にチェーホフ、シェイクスピア、A・オストロフスキイ、モリエール、ゴリ、M・ブルガーコフ

といった作家が並んでいる。ここでもう一度断っておきたい。ロシアの諸劇場はシーズン制（先に書いたようにシーズンは9月に始まり翌年6月に終わる）とともに、日替わりのレパトリー制をとっている。04年で最高になったチェーホフ・ブームが演目に反映して残っているのを考慮しなければならぬだろう。最近19世紀のロシア古典の復活が目立つ。A・オストロフスキイ（1823—186）の変わらぬ人気（例えば『最後の犠牲』を首都の3劇場がそろって初演をだす）に加えて、スホヴォルコバイリン（1817—1903）作『タレールキンの死』がドラマトゥルギー演出センター、A・カザンツェフ／演出で、サルトウイコフシチエドリン（1826—89）作『ゴロプリョフ家の人々』がモスクワ芸術座のK・セラブレニンコフ／演出、E・ミローノフ

／主演で話題になっている。これにシ・アンドレーエフ（1871—1919）原作の『呼び出された7人の物語』、タバコフ劇場、M・カルバウスキス／演出を加えても良いかもしれない。

では、現代作品は？ 脚色でなくオリジナルでは、ブームを呼んでいるような作家や作品は見当たらない。（ノーヴァヤ・ドラマ（新ドラマ）というコンクールが開かれて、新しい作家や演出家の登場をうながす仕掛けもされているが、そこで育った1人らしいI・ブイルイパーエフが『実在 No.2』を書いた。この人は演出家でもある。→2004—マスケ）『革新賞』を自ら書いた『酸素』でもらっている。『実在 No.2』は、精神を患っているある女が神と交わす会話を綴ったもの、個人的な話題から宇宙へと広がりを見せるが、メルヘンか、ドラマか定かでない。

カーは全人生を味わう。手紙は次第に簡潔に、思慮深くくなっていく。わがままな少年期、多感な青年期、70歳のオスカーも、中年のバラ色の看護師も、時に神さえもひとりで演じるモノドラマである。ユーモアがあり、哲学的でもある。レンソヴエルト劇場のフレンドリヒは3時間、わずかな小道具とトーンやしぐさの瞬時のきりかえで演じきり、モスクワの、第6回チエーホフ演劇祭に招かれて好評を博し、（マスケ賞—2006）への登場となった。

内外の名舞台を招いて開く、第6回チエーホフ演劇祭は6—7月モスクワで開催された。ここでの最大の話題は、パリから来たコメディイフランセーズ劇団によるA・オストロフスキイ／作『森林』、P・フォメンコが演出した舞台である。オストロフスキイが1871年に書いた作品、物語はロシアの田舎で怠惰な

しかし私には「オスカーとバラ色のひと」のほうがおもしろい。これはフランスの作家A・F・シュミットが2002年に書いた作品、名優がパリで独演し、評判を呼んだ。断つ



『オスカーとバラ色のひと』 A・フレンドリヒ／主演

ておくが、「ひと」と訳したものとロシア語は「グーマ」、「スペードの女王」の「女王」の意味もあるが、現在も生きている言葉で女性に対する尊敬語である。

この作品も、神に宛てて書く10歳の少年オスカーの手紙12通から成っている。オスカーはがんを患い、入院中。自分の運命を知りたいが、医師も両親も信用できなくて、バラ色の上着を着た付添看護師がただ1人の相談相手で、オスカーは彼女を「バラ色のママ」と呼んでいる。毎日来てほしいというオスカーの頼みに、彼女はその代わり毎日神にあてて手紙を書けば、12日間来ましよう」と答える。しかも年末の1日は10年に当たるという。かくて日々、オスカーは成長し、老いながら、彼女に愛や痛み、別れや許し、信仰、死の受容さえ教わる。少年をめぐってロマンスも事件もいろいろ起こり、オス

生活をむさぼっている女地主のもとに、旅回りの役者2人が駆けこんで来ることから始まる。2人は淀みきった地主屋敷の日常に波風を立てて去っていく、ついでに恋に悩む若者たちのカップルを援助して…というもの。

巨匠フォメンコはかつて1度だけレニングラードで演出した芝居の、外国語による上演を試み、各人物や細部にこだわりつつ全体を損なわなかった。コメディイフランセーズの俳優たちは、自らの特徴である様式的な演技力を活かして見事な舞台をつくりあげた。フォメンコはその功績により、05年7月、フラン



『森林』 P・フォメンコ／演出 第6回チエーホフ演劇祭より



スの「芸術文学コマンドール」勲章を授与された。フォメンコついでに言っておけば、各賞を総なめした「三人姉妹」は工房の他の作品とともに、フランス、ベルギーなどのヨーロッパ巡行をはたし、ペテルブルグへは8演目での長期ツアーを行った。

「チエーホフ演劇祭」はロシアの芝居とともに、海外のいろいろな舞台を招聘する。毎年アメリカ、イギリスなどに続いてスイス、デンマーク、05年はブラジルからはじめてやってきた。日本からの常連、鈴木忠志の「イワーノフ」のほか、台湾、韓国なども来てモスクワの「東方熱」にこたえた。

フェスティヴァルは数々あるが、今回は「シベリアのトランジット演劇祭」も紹介しておこう。毎年行われるらしいが、ノヴォシビルスク市から始まって、オムスク市、トムスク市を経て、05年はクラスノヤルスク市にやってきた。今回の話題作品はオムスクの「桜の園」「令嬢ジュリー」「変人たち」、プリアート共和国ウラン・ウデからの「三文オペラ」、ノヴォシビルスクの「リチャード3世」、トウバ共和国の「リア王」、チヌメニの「夜警」などなど。グランプリはA・ブラウデンが演出した「変人たち」がもたらした。へマスクー2006)ノミネートにあがっている作品が見える。来年はウラン・ウデで開催とか。

ク市にやってきた。今回の話題作品はオムスクの「桜の園」「令嬢ジュリー」「変人たち」、プリアート共和国ウラン・ウデからの「三文オペラ」、ノヴォシビルスクの「リチャード3世」、トウバ共和国の「リア王」、チヌメニの「夜警」などなど。グランプリはA・ブラウデンが演出した「変人たち」がもたらした。へマスクー2006)ノミネートにあがっている作品が見える。来年はウラン・ウデで開催とか。

モスクワ演劇界の受難などを書いておかねばならない。05年10月、旧知の「ニキーツキエ・ヴォロータの辺り」劇場が火災に見舞われた。拡張予定の隣接の元映画館の火災が原因と報道された。このポリシヤ・ヤ・ニキーツカヤ通りはここ3年、劇場の火災が絶えない。02年12月国立音楽院、03年7月マヤコフスキイ劇場、04年11月スタニスラフスキイ邸の傍、劇場、05年3月のヘリコン・オペラ劇場、そして今回の「辺り」劇場である。歩いて15分の距離の通りに相次ぐ火事！このうち「傍」劇場の原因は「放火」であることが報道されたが、建物の老朽化・無防備さもさりながら、このモスクワの1等地にビルを建てたがるマフィアのせいかなどとの噂も聞く。

受難だけではない。別の大通りで数年前に炎上したスタニスラフスキイ・ダンチェンコ記念音楽劇場が見

事に再建された。俳優で演劇人同盟議長であるキャリアギンがひきいる「エトセトラ」もきれいな新築劇場にお色直しをした。

さあ、05年最大のニュースを書かねばならない。S・ジェノヴァチがとうとう演劇大学の教え子たちとともに新しい劇団「演劇芸術スタジオ」を結成し、モスクワ市に公認された。まず演出家ジェノヴァチの履歴とその仕事をざっとおさらいしておく。——57年生まれの演出家、演劇教育者。クラスノダルク文化大学卒。演劇教育者としての履歴は83年国立演劇大学(旧GITIS、現在RATI)フォメンコ指導の演出科コースに入ったことから始まる。自分の資質に加えて、同じような舞台創造の原則や方法を持つ巨匠との出会いが、彼の今日の基礎になる。88年大学卒業後、フォメンコの演出科コースで教え始め、マスタークラス

であった。

私の目を惹いたのはここで上演されたV・セメノフスキイ/作「ジナイダー・ライヒの愛と死」。ライヒは映画・舞台上に名を轟かせた女優、演出家マイエルホリドの最盛期とともに過ごした妻であり、演出家の逮捕後、自宅で何者かに惨殺され、葬儀も当局から禁止された栄光と悲劇の主である。作品は、研究者・伝記作家のK・ルドニツキー著伝記と、マイエルホリドの娘ターニャ・エセーニナの回想を基にして書かれている。はたしてライヒは才能があつたのか、なかつたのか、善良だったか、それとも悪意をもっていたか、はたしてあの演出家にこの女優が必要だったかどうかなどを争点にした論争と実証を舞台にしているらしい。ライヒを演じた女優E・ネムゼルは「金のソフィト賞」をあてられた。

と舞台を作る。ゴゴリ/原作「ウラジミール3等勲章」、シエイクスピア/作「冬物語」など。同時期、彼は演劇スタジオ「人間」でゴゴリ/原作「パンノチカ」を演出(演劇人同盟賞を受賞)、その好評により「人間」の知名度を上げ、スタジオはモスクワに公認された。

それぞれの個性を持つ俳優・スタッフを一つの創造集団にまとめ、結束させて、舞台を作り上げていく彼の演出家としての方法論が、この時期確立し、磨き上げられていったようだ。91年彼がスタジオを去り、マラーヤ・ブロンナヤ劇場に演出家として採用された時、俳優集団もともにも移動した。マラーヤ・ブロンナヤでの仕事は多彩、シエイクスピア/作「リア王」(モスクワ市長賞)、オストロフスキイ/作「深淵」(ともに92年)、民話劇風「粉屋で魔法使い、ペテン師で結婚仲介人」(93



『少年たち』S・ジェノヴァチ／演出

チ／演出の『マリエンバド』（ユダヤ人作家シロロム・アレイヘムの書簡とメモで構成されている。レアリヌイ・テートル、演劇祭に招待された）や、ジェノヴァチの教え子A・コルチエコフ／演出のシエイクスピア／作『お気に召すまま』も含まれている。制作部はあるというが、いちばん気にかかるのは劇団の建物がまだないこと（ロシアのレパートリー劇場はみな建物をもって

いる）だが、友人のニュースによると、ある篤志家が申し出ているらしい。よかった！  
最後にジェノヴァチの演出した『少年たち』に触れておこう。ドストエフスキイの長編小説『カラマーゾフの兄弟』によるが、その1部だけ引用される。兄弟のうち登場するのは末弟のアリョーシャだけ、つまりアリョーシャを中心に据えて、まわりの少年少女たちのエピソードでつないだ芝居。エピソードは少年イリユーシャ・スネギリョフが登壇、石を投げられる場面に始まり、その死後、墓石の前での「誓い」の場面でおわる。登場人物のそれぞれ（犬の役もある）を活かす演出、アリョーシャの台詞にこめられたドストエフスキイのイデーが活かされた舞台だという。既に、トウランドット・クリスタル賞を受賞、（マスク）にノミネートされた。

年）などを経て、ドストエフスキイ／作『白痴』3部作9時間（95年）を作り上げ（黄金のマスク）演出家賞）を獲得、同劇場の首席演出家になった。その後もツルゲーネフ／作『小喜劇』（96年）、現代劇のA・ヴォーロージン／作『5つの夜に』（97年）、ゴーゴリ／原作『降誕祭前夜』（98年）と好調な演出が続くが、突然解雇された。観客や評論家たちの評判とは全く逆の見解を経営陣は持っていたようだが、ジェノヴァチ自身はインタビューでも彼らを非難するような発言はしなかった。彼の俳優たちも、行き場を失い、劇場を去った。

フォメンコ工房や、大学での仕事は続き、01年彼は大学で教授となり、フォメンコの演出科コースを継いで、学生たちを募り、芝居つくりにとりかかった。一方21世紀はじめ、彼の演出が首都の代表的な劇場を賑わした。マールイ劇場のA・オスト

ロフスキイ／作『真実は良いが、幸福はもっと良い』は観客に喜ばれるとともに、各賞を獲得。モスクワ芸術座ではM・フルガーク／原作『白衛軍』を、05年秋またマールイ劇場で、モリエール／作『氣に病む男』を出している。

05年初め、ジェノヴァチのスタジオができるらしいという噂が駆けめぐったが、秋になってモスクワ市が公認したことが明らかになった。なぜこども注目されるのか。これまでにない演劇スタジオの誕生だからである。演劇大学（RATI）でも芝居を作っていた学生たちは、卒業するとそれぞれ俳優、演出家として各地、各劇場へ散らばっていく。今回はともに『少年たち』などを作った学生たちが、互いに互いが必要と感じ、ジェノヴァチを中心にした劇団をつくと主張してやまなかったという。

ジェノヴァチへのインタビューでみると、彼は学生たちに演劇生活の厳しさを教え、慰留したが、彼らの決意を変えることにはならなかったという。ジェノヴァチにすれば、大学の4年間で俳優も演出家もできあがるわけではない、演劇人は永遠に学ばなければならぬ、スタジオはその絶好の場だというのが持論だから、彼らに同意した。かくて、この4年間に作った6演目をレパートリーとしてスタジオを作り、無報酬で教え子たちは舞台に立ち、先生は次の学生たちの教育にとりかかることになった。これほどの結束をつくったのは、フォメンコ以来の教育者を手ばなさなかったことも一因だろう。演劇に芸術を重ねたスタジオの命名は、この演出家のこだわりを表している。

6演目の中には、フォメンコ以来の教育者で演出家E・カメンコヴィ

# 北から南から

## ・劇団通信

### 〔劇団海鳴り〕

昨年10月22日、第33回定期公演「煙が目にしみる」提泰之／作・我孫子正好／演出を、3年ぶりに1000席の紋別市民会館大ホールで上演しました。ワンステージでもあり観客動員を心配しておりましたが、小ホール公演より入場者数が増し、500人余が足を運んでくださいました。

身近な内容で、笑い、涙の人間ドラマに観客の感想も好評でした。初舞台の4新人もあがることなく堂々と役をこなし、古手も脱帽です。4人とも今後、研修団員として籍を置くことになり、またほかに2人の女性が入団。久々に若いエネルギーが稽古場に満ちています。

さて、今秋、創立40周年を

迎えます。地元を題材にした創作に取り組もうと企画中です。(五十嵐陽子)

### 〔劇団さつぽろ〕

年末年始の休みをはさんで「三まいのおふだ」の稽古に入っています(8年ぶりの再演)。幼稚園や保育園での上演を中心に1月22日より公演スタート。今回は長年、飯田演出のもとで舞台監督を務めてきた佐々木恒心の初演出。

昨年春にスタートした児童部は12月の「ヒューマンノイド05」上演をもって第一期を終了。1月15日に全員集まっての修了式と打上げを終え、第2期への準備をはじめたところです。

劇団の06年度、学校、町村での巡演活動がどのように展

開できるのかはなはだ不透明。町村合併の結果や道財政の問題など、我々が直接どうすることもできない状況も多く、「地道にやるっきゃない」といったところです。

昨年7月に取り組んだ「父と暮せば」の山根チームが白石区と西区で3月上演が決まり、両方とも「九条の会」や「革新懇」などの方々のご協力で行った委員会がたちあがったのが明るいニュースです。(長谷川京子)

### 〔劇団弘演〕

劇団弘演では、12月10日、11日に、森田有／作・作間しのお／演出「ぢらい」をスピークアネガで上演しました。両日とも多数の観客を動員して、無事に新年を迎えること

ができました。特に初日の10日には、用意しておいた椅子が足りなくなるほどの盛況ぶりでした。今回の作品では、弘演初の円形舞台(正確には八角形)で観客との距離が近く演じている私たちは不安でいっぱいでしたが、観客の皆様はそんな不安を吹き飛ばすように、大爆笑の渦でした。上演後の感想も上々で「来年も楽しみにしています」との声が多く、劇団員一同改めて気を引き締めているところで

す。06年のスタートとして、1月22日に弘演稽古場で「森下法雄のお話玉手箱」を上演しました。ペテラン俳優森下法雄が柔らかい口調で津軽に伝わる昔話を津軽弁でお送りしました。(田中 毅)

### 〔黒石演劇研究会〕

11月13日に、創立60周年記念公演第一弾として、ふたくちつよし／作・中辻鉄雄／演出「山茶花さいた」を上演しました。会員数が厳しいこともあり、浪岡演劇研究会さんからも2人協力してもらい、無事終えることができました。「山茶花さいた」は、一見どこでもある家族のコメディあり涙ありの話ですが、現実と照し合わせてしまい、稽古中に考えさせられる場面もありました。

今春は、60周年記念式典、記念誌発行の予定です。

秋は60周年第二弾の公演を考えています。会員数が少ないのが気になりますが、次回も公演ができるように頑張りたいと思います。

### 〔劇団だいこん座〕

秋の公演は、砂本量／作・高橋寛／演出「レンタルファ

ミリー」を10月8日に鶴岡市中央公民館ホールで上演しました。いわゆる「家族とは何か」を問う作品で、リストラ、ニート、新興宗教、ボランティアなど現代人がかかえる悩みがたくさん入っています。キャスト8人のうち4人が初舞台でしたが、新人とは思えない演技でとても好評でした。この4人のうち2人が入団したのも収穫でした。だが、努力はしたものの赤字公演で、次回へのエネルギーがそがれた感があります。

今年には劇団創立30周年、6月に記念祝賀会を予定しています。10月には記念公演として地元の材で「ワッパ一揆」という百姓一揆を上演予定です。10年前に一度上演しているのですが、出演者数35人かどうか集めるのか、10人しかいない弱少劇団は今から準備しなければと、ない知恵をしばっています。

### 〔青年劇場〕

昨年は実行委員会公演、「銃口」の韓国公演をはじめ、めまぐるしい1年でした。韓国公演では、日本人にも軍国主義によって弾圧され被害を受けた人がいたことを初めて知ったという方が大勢いたそうです。韓国では、日本の治安維持法を真似て作られた「国家保安法」がいまなお残っており、緊張感をもって観たという感想もあつたようです。「歴史認識の共有」は、それほど簡単なことではなく、まずはお互いを知るところから始めなければなりません。日韓友情の年に「銃口」公演のはたした役割は大きなものがあったと思います。詳細は、本誌の、韓国公演団長島田静仁の報告をこ一読ください。

★第91回公演 5月は「尺には尺を」。「真夏の夜の夢」で旗揚げした劇団の久々のシエイクスピア劇です。

★第92回公演(10・11月)は「族譜」(仮題)。朝鮮併合当時、「創氏改名」政策にかかわった若い画家の葛藤が描かれた小説を舞台化します。

★全国巡演 演劇鑑賞会公演では「喜劇キュリー夫人」、関越地方・首都圏「菜の花らぶそでい」、東北地方・九州地方。学校・青少年劇場公演では「3150万秒と、少し」「ケプラー・あこがれの星海航路」を巡演。

青年劇場「50年への挑戦」応援5000万円募金開始からまもなく1年。おかげ様で全国各地からご協力いただいております。この場をお借りして厚くお礼申し上げます。目標達成に向け今年も引き続き取り組んでまいります。(広尾 博)

### 〔劇団銅鑼〕

大雪災害のニュースに連日心の痛む年明けとなりました



た。該当地域の方々のご無事とご健闘をお祈りいたします。

05年前半の公演は、1月27日、29日、「流星ワゴン」重松清／作・青木豪／脚色・磯村純／演出、東京芸術劇場小ホール。2月3日、5日、横浜相鉄本多劇場。9日、兵庫県立芸術文化センター中ホール。15日、宇都宮演鑑主催。昨年アトリエ公演で好評を得た家族のものがたりの再演です。

【ドリムアレイの錬金術師】山下欣宏作、平石耕一／脚色・演出。3月11日、北とぴあ。恒例となった北区内田康夫ミステリー文学賞作品の劇化で今回は一般公募で選ばれたお年寄りたちとの共演です。

【楽園紛争】獄本あゆ美／作。黒岩亮演出。4月17日、21日、北とぴあ。時代は未来。地球温暖化、異常気象は進み、未知の病原菌に犯されて、世界は人間はどうなっているの

だろうか。歴史と地図を俯瞰して共存や非戦の意味を追求してみよう。(菊地佐玖子)

#### 【東京芸術座】

昨年は戦後60年ということとで、歴史を振り返り、私たちは何をなすべきかを問うために、記念公演として「地球の上に朝が来る」(島田九輔／作 印南真人／演出)を9月に紀伊國屋サンシアターで上演しました。戦前戦後、一世を風靡した「あきれたほういず」のリーダーで異才の芸人、川田晴久を主人公に、権力におもねない凛とした生き方を通した半生を描きました。

直後の総選挙では、ワンフレースポリテックスで大量当選を果たし、庶民いじめの政治を突き進んでいます。「憲法九条」をターゲットにして、日本を「戦争のできる国」へ右旋回させようとして「憲法

改悪」を企んでいます。くらしと平和を守る闘いが正念場になっていきます。劇団内にも若手を中心に「九条の会」を立ち上げました。

今年に入り、「夏の庭」[Chateau・e・eー遠い水の記憶]「ウメコがふたり」の旅公演が出たり入ったりで、忙しく全国を回っています。「夏の庭」はこの3月で終演し、4月からは「GO」(金城一紀／原作・いずみ凜／脚本・杉本孝司／演出)が全国へ出ます。(郡司)

#### 【劇団蒼生樹】

昨年12月16日、18日、神奈川県立青少年センター多目的ホールで、オリジナル時代劇「室町版 お気に召すまま」(劇団蒼生樹／作・濱田重行／演出)を上演しました。この会場で、演劇を上演するのは初の試みで、すべてが手探りでした。特に、このホール

には中央に巨大な柱があるために、この処理をどうするか、最大の課題でした。

「巨大な柱を大木に、会場全体を森に見立てた舞台にしよう」という座員の思い付きまではよかつたけれど、その世界観に合う作品がない。それなら自分たちで書いてしまおうと、シェークスピアの「お気に召すまま」をベースに、役者全員が自分の台詞を自分で書くという大胆な試みに出ました。さらに、「年末はやはり時代劇でしょう」ということで、時代設定を室町時代にしたけれど、本番当日までラストの処理が決まらない始末。手探りのまま本番を迎えましたが、お客様の評価は意外に上々(?)でした。

次回の夏公演も、「手探り」が続くそうです。(福原 毅)

#### 【劇団ひの】

昨年末の「二十四の瞳」(壺

井栄／作・佐藤利勝／脚色・演出)上演は、大成功のうち幕を閉じました。「浅川少年少女合唱団」との合同公演は総勢56人の出演者になりました。合唱とドラマとのコラボレーションが作品を引き立て、子どもたちの生き生きとしたストレートな演技と大人たちの力のこもった熱演のアンサンブルは迫力のある舞台を創り上げ、大きな反響を呼びました。

「過ちを二度と繰り返さないために」「分かりやすいメッセージを」「今この時代に届きたい」という演出の熱意も伝えることができたのではないかと思います。観客数も目標の1000人を超えることができ、観劇後の後援会加入者、劇団へのカンパもいっぴになく多く集まりました。自画自賛が過ぎてしまいましたが、劇団の力を出し切った公演であり、達成感のもて

る取り組みになったと思います。と同時に、今後、劇団が発展していくための課題も見えてきたような気がします。

今年、2、3月に児童館などへの出前公演(民話劇)、6月・7月に「オズの魔法使い」の再演をします。「二十四の瞳」をきっかけに入団した子どもたちが引き続き舞台に立ちます。子どもとともにつくる舞台の魅力は大きく、また期待が広がります。12月には、久々(3年ぶり)の稽古場での公演をします。(佐藤伸枝)

#### 【演劇集団土くれ】

第54回公演は10月1日、15日、ステージ数4、会場・港区麻布区民センターホール。第126回麻布演劇市参加。共催・港区キスポート財団。堤泰之／作・石塚幹雄／演出「煙が目にしみる」入場者661人(キヤパ736席)。

舞台は大変好評で、アンケートの集約枚数は224枚に達しました。この作品はかなりの集団が上演しており、どう比較されるか、「土くれの煙が目にしみる」をどう創るか、創造的には課題を抱えた公演でした。集約された批評はおおむね「土くれの舞台」として評価していただきました。反面、作品との関係ではリアリズムの問題も含め厳しい批評もありました。集団構成員や観客の意識、趣向の変化なども含め「どんな舞台、作品」を提示していくか、いかなければならないか、大いに議論すべき宿題をもらいました。

今年には劇団創立40年の記念公演です。日程は、11月15日、17日、会場・麻布区民センター。作品は目下検討中。遅くとも6月には稽古開始の予定です。(石塚)

#### 【群馬中芸】

昨夏、新作「なめとこ山の熊」(宮澤賢治／原作・中村欽一／構成・せらだひとし／演出)を製作しました。(宮澤賢治の原文による語り芝居)のシリーズ5作目になります。

宮澤賢治の童話は、近年多くの劇団で取り上げられています。そのほとんどは童話をもとに脚色された舞台です。私たちは、童話を原文のまま語り演じることで、賢治が童話に込めた精神を舞台化できればと願っています。その独特の文体の中には人間への、そして生きとし生けるものへの温かな眼差しがあり、(時には批判や風刺を含めて)、百年を経た現代に生きる私たちに生き方を示しています。

9月の未来スタジオ公演に続いて学校での公演が始まっています。巡回公演は他に、「イーハトーヴォものがたり

パート4、「すすめ」どらねこ団」を公演。また2月からは新作「カエルの豆太」(福田博/作・童話「かえるの豆太」による歌芝居)(中村欽一/構成台本・せらだひとし/演出)の稽古に入りませ。5月3、4、5日、あかぎ未来スタジオで公演を予定しています。(秋山としひと)

#### 〔劇団埼玉〕

昨年は、途中で作品の変更になり、一年半ぶりの公演となりました。

80回公演「夏の盛りの蟬のように」吉永仁郎/作・川村武夫/演出、2月18、19、25、26日、埼玉稽古場。

今年創立40周年になります。今後の課題をたくさん抱えての公演です。

(森本拓治郎)

#### 〔京浜協同劇団〕

地域の歴史上の人物、田中

兵庫を劇化した「多摩川に虹をかけた男」の公演中です。

これは、私たちが青少年劇作家、小川信夫氏にお願いして書いてもらったものですが、川崎市が5年前からやっている川崎市青少年舞台芸術活動事業として採り上げられ、3会場・5回の上演で30000人の観客をめざします。市が300万円を出し、合計800万円の規模。公募の市民、青少年に、民芸、川崎演劇塾、ひとみ座、京浜など市内の劇団も出演し、出演者は70数人にのぼります。青年座の高木達氏の演出がシャープでしかもあつたかくわかりやすく、みんなのやる気を引き出してくれました。

大雪の初日、「泣いた」「感動した」「よかった」の感想が寄せられています。こういう大胆な試みも大変ではありますが必要なことではないかと思っています。

大雪山の初日、「泣いた」「感動した」「よかった」の感想が寄せられています。こういう大胆な試みも大変ではありますが必要なことではないかと思っています。

次も地域のことを題材にした創作劇。劇団員の和田庸子のデビュー作「ミスター・チムニー」(天空百三十尺の男)。内田勉の演出で6月から7月にかけて上演する予定です。

#### 〔劇団静芸〕

プレハブの稽古場は寒い。今年の記録的寒波、豪雪、でも静岡では雪も降らず、風花が舞うこともほとんどない。全国の劇団の人たちの苦勞を考えると、恵まれています。

◇昨年11月6日、静岡市芸術祭での永井愛/作「見よ飛行機の高く飛べるを」(伊藤幸夫演出)公演は、外部からの応援や、新人が多く出演する中で、一定の成果をあげ、好評でした。なんとか350人をこえる観客と、無駄をはぶいて節約と経費節約の血のにじむ努力の中で、黒字にこぎつけることができました。

◇新年は、昨年と同様に、静岡市ファミリー劇場(親子の演劇鑑賞)に小島真木/作「きつねっ子と波ごぞう」を改作し、「遠州灘の狐っ子」として公演します。2月26日、清水文化センター、3月5日、静岡、大里公民館ホールでの小劇場公演です。寒い稽古場で狐っ子たちが裸足でかけまわり、踊り、歌い、一冬の寒さにまけないように、がんばっています。改作しての再演に、より高い舞台にしよう稽古に熱が入ります。

(山崎三郎)

#### 〔劇団名芸〕

昨年11月の「見よ、飛行機の高く飛べるを」(永井愛/作・佐野秀明/演出)は稽古場でのロングラン上演で、新聞評やお客さんから高い評価を得ることができました。

引き続き12月の第4回南文化フェスティバルでは、小品

「娘二人一掌」(平塚直隆/作・柴田晃子/演出)を上演し、若い感性が光ったと思います。

年明けとともに、第10回

研究公演「お勝手の姫」に取り組んでいます。(作/小川未玲、演出/長田芳枝) 評判の作品なので、演出を先頭に短期決戦で追い込み最中です。3月3〜5日 名古屋平針小劇場。

そんな中で、名古屋芸術奨励賞を受賞することが決まり、1月30日表彰式です。

劇団員数が40人、44年間の歩みは過大に評価されていますが、実体は稽古場への集率はよくなく、また客数も700人前後と低迷しています。この後、恒例の子ども劇場、秋の市民芸術祭主催事業公演と続くので、正念場とらえて創造・普及両面の飛躍を目指し全力を尽くしたいと思います。(栗木)

#### 〔劇団名古屋〕

秋の公演「美ら海」(栗木英章/作・久保田明/演出)11月25・26日、3ステージ。名古屋に住む主婦カメラマンが、ふとしたきっかけで米軍の海上基地建設に反対して座り込みを続ける沖繩辺野古のおばあちと出会い、沖繩の現実を翻弄されながら自我に目覚めていく。

劇団単独では約10年ぶりの創作劇。現地からの報告だけではなく、名古屋に生きる私たちの体温を表現したいと取り組みました。現在進行形のテーマに取り組み困難に直面しつつも、何とか沖繩の今を伝えられたと思います。観客744人。劇団の力量からまずまず、でもテーマの広がりの点ではもう一歩。助成金の削減・廃止、受益者負担という名の会場費値上げなど、制作面では踏ん張りどころです。また、アンケートな

どで演技者としての課題の具体的な指摘があり、今後の活動に反映したいと思えます。

(岩田)

#### 〔劇団演集(名古屋演劇集団)〕

2005年冬の定期公演「紙屋悦子の青春」を無事終えました。会場は今回初の名古屋市中区にある長円寺会館サンギータでした。長円寺には多目的ホールの他にもいくつか教室があり、合唱の練習や寺全体をあげての行事などが行われます。そのため、芝居本番中に隣から歌声が聞こえてきたりして大変でした。そんなハプニングはいろいろありましたが、来場していただいたお客様には好評の中に打ち上げることができました。動員もアクセスの困難、キャパの割に435人と、まあまあ結果が出ました。チケットの普及は個人個人の働きかけが目立つ中、インター

ネットや名古屋市西区の稽古場辺への宣伝効果も少しづつではあるが見られるようになりました。ハードルを少しでも高くしていけるよう、継続していくことだと思えます。

(磯谷 誠)

#### 〔劇団すがお〕

桑名は比較的温暖な地域ですが、それでも大変に寒く、稽古場は底冷えします。雪国の皆さん大変でしょうが頑張ってください。

●桑名演劇塾第5回公演「幕末親子絆―桑名日記―柏崎日記」2月25日2回公演、桑名市民会館。柏崎演劇研究会賛



助出演「おとし文」、3月4日午後2時、柏崎市民会館。

公募の市民と劇団員が共同で取り組む演劇塾は10年を迎えました。25人の出演者で取り組んでいます。幕末時代、桑名藩の飛び領地が今の新潟県柏崎市にありました。転勤で離れたなれになった親子が書き綴った交換日記から劇団名芸の栗木英章氏に執筆を依頼した作品です。180年ぶりの交流がよみがえった公演です。総経費が800万円を超えますので、財政的にも大変な公演ですが、文化の市民交流も楽しみです。

●2月26日、桑名シティホテル「60歳のラブレター」桑名市文化協会のイベントに出演します。

昨年秋季の公演は、11月「北勢線物語」、ひさしぶりの創作劇を名芸の栗木さんに依頼して上演しました。廃線の危機にあいながら沿線の人々の

努力で生き残った私鉄のナロケージのオムニバスドラマ。

桑名市文化祭と「支援する会」の手で、桑名市コミュニティプラザといなべ市さくらホール2会場、3ステージ。700人の観客は少し寂しかったが、内容は好評で会場には涙をふく観客を何人か見かけました。ぜひ、次回作も上演したいとの要請を受けています。

#### 〔劇団夜明け〕

「演劇会議」120号、すごいことです。演劇会議発行に情熱と努力を傾けられてきたすべての人に感謝いたします。これからも続いていくこと、そして200号が何十年か後に実現することを心から願います。そのためには私たち劇団がこれから何十年先まで続いていなくてはなりません。

「人間に本当に平和な世界

の実現ができるのか？」

子どもの危機の深刻さ：イライラする小学2年生が4割を超え、「私なんかいない方がよい」と思う小中学生は3割近い。フリーターは200万人、ニートは60万人を上回った。児童虐待の相談は3万件を超えた。少年が殺されたのは04年、181件に上がる。最悪で5%を超えた失業率、3万人を突破し続けている自殺者。イラク戦争、憲法九条の危機。今、希望を語るのには容易ではない。しかし、こういう時代を乗り越えようと、私たち劇団は「希望」を語り続けたいと思う。

（鈴木）  
創立50周年記念講演No.2は、「紙屋悦子の青春」松田正隆／作、鈴木弘文／演出、2月10、19日（10ステージ）マジヨリカバンパー。

#### 〔劇団たけぶえ〕

12月11日のたけのっ子劇場「ピーターパン」（こぼやしひろし／作、柴野千栄雄／演出）公演終了後、劇団は冬眠です。公演が終わるのを待つようにして早くも大雪に見舞われ戸惑いしましたが、今は雪の中にじっと耐え、やがて来る春に備えてしつかり勉強(?)しているところです。

第一弾は、3月の「新越前市誕生記念式典」での「たけのっ子ミニ公演」です。乗り気ではない企画ですのでなかなか腰が上がりません。しかし、そろそろ稽古を始めねばなりません。他に、春の「近代一幕劇探」と12月の「たけのっ子劇場」も早く台本を決めなければなりません。

他に、市男女共同参画室から共同での演劇制作の打診、地域の映画制作団体からの要請、そして継体天皇1500年イベントなどいくつかの

事業参加の話があります。地域に根づいた活動を劇団の基本とし、演劇を市民活動の一環ととらえている私たちとしてはありがたいことと思っております。

懸案の劇団の機構改革も進めねばなりません。今年のはのんびりと、とはいかないようです。

#### 〔劇団上野市民劇場〕

昨年暮の12月ぎりぎり、今年だからこそその思いで戦後60年メモリアル公演を無事終えることができました。人数が足りない悩みが消極的な姿勢となっていました。幸い短編2作品（楠本幸男／作）に、地元の戦争体験者をゲストに迎えトークとのコラボレーション企画が大好評で成功しました。

今年創立55周年、2月5日に劇団総会を開催しました。総会に当たり、前号（1

19号）の城谷事務局長の巻頭言は力強い教示と励みになります。かつての黒澤参吉さんの言葉「小さな町だからこそ有利な条件もある」が重なります。弱少高齢化劇団は劇団なりにうんとふんばって元気な1年にしたいと思えます。（福北）

#### 〔劇団からつかぜ〕

寒い稽古場の中でストーブを囲みながらレパ選の最中です。劇団の実情に合った作品がなかなかなくて苦労しています。それでもこの号が出る頃は作品も決まって走りだしていることでしょう。昨年12月17日に総会も無事終わりました。

念願のイス席への改良もできましたし、春秋公演通して目標達成もできました。劇団員が少なくなっている状況の中で、それぞれ荷が重くなり大変だったことと思います

が、アンサンブルの取れた芝居創りができたと思っています。そのパワーは観客の皆さんに伝わったんじゃないかと自負しています。年末の餅つき大会に6ステージ中3ステージを観に来てくれた親子が参加してくれて感激していました（芝居に？ 餅に？）。

今年は何とか新人を確保して観客数も増やそうと年間目標を「新人5人以上で1000人の観客を迎えよう」にしました。絵に描いた餅にならぬように組織も変更して、稽古場をきれいにします。劇団の観客の中からも働きかけをしていく。ポスターを製作して劇団OB、OGや地域の観客の方に貼っていただけるお宅を開拓して通年貼っていただくなど運営委員会が中心になって取り組むことになりました。また劇団を支えてくださる組織、「友の会」が宙に浮いた状態になっているので

何とか再生をかけたかと思っています。（坂田真生）

#### 〔劇団京云〕

日本中が大雪に見舞われているようで、京都でも近年見たことのないほど雪が降っております。この寒い中、新年早々私の住むアパートで外装工事があり、壁を塗りながら職人さんたちの話す声が耳に入ってきます。

「今年には三八豪雪の年より降つてほしいで。お前、三八豪雪知らんわなあ。昭和38年にな」と、丹後北陸での豪雪の被害、そして離村、廃村のことを後輩にポツポツと語る年配の職人さん。窓越しに私は、京芸が上演した「雪崩」の台本を思いだしながら聞いていました。

「雪崩」の物語から40数年、今日も地方には老人と子どもだけの村があり、子どもはいずれ離れていく傾向にありま



す。年々市町村合併がありま  
す。中央へ中央へ、人も学問  
も文化もお金も最後には《東  
京》にたどり着く構図が、私  
はやはり悔しい。しかしその  
反面、地域に根差して演劇活  
動をしようと行われてもピンと  
こない部分もあるのです。

地域に根差すと言っても住  
んでるだけじゃないですか、  
などと数年前劇団代表に話し  
たら一喝されましたが、結  
局自分は地域で何かやれてい  
るのか、何をやりたいのかに  
考えが及んでいません。今年  
はひとつ、京都で演劇をする  
ことについて考えてみようか  
な、と思いました。(赤土)

#### 〔劇団自立の念〕

今憲法がアブナイなか、森  
田有／作「日の丸」をいつで  
も上演できるような準備を進め  
ています。「日の丸」は十数  
年前に発表された衝撃の問題  
作です。劇団の代表作として

何回も再演を重ねておりま  
す。今こそやり続けねばと思  
っています。

#### 〔関西芸術座〕

昨年の暮れからお正月にか  
けて、劇団にとつてうれしい  
ことが続きました。9月のス  
タジオ公演「反応工程」に出  
演した酒元信行に関西俳優協  
議会より、新人賞が送られま  
した。年が明けて、大阪新劇  
団協議会主催、新劇フェステ  
イバル作品賞を「反応工程」、  
女優演技賞を12月スタジオ公  
演「請願」に出演した河東け  
いを受賞しました。劇団活動  
をしていく中で大変喜ばしい  
ことであり、劇団員にとつて  
励みになります。

3月のスタジオ公演「見果  
てぬ夢」の稽古真つ最中です。  
劇団の大ベテランから新人ま  
で関芸ならではの役者たちが  
毎日奮闘しています。今回は  
初の試みとして、毎日の稽古

日誌を劇団のホームページに  
掲載することになりました。  
お楽しみしていただけるかど  
うかわかりませんが、一度ホ  
ームページを覗いてみてくだ  
さい。(金谷克海)

#### 〔劇団息吹〕

秋の公演、「紙屋町さくら  
ホテル」。大阪市内公演と八  
尾プリズムホールの買い取り  
公演の動員数は1000人近  
く、ここ何年かぶりの動員数  
で成功裏に終えることができ  
ました。

終わった後で作品の大きさ  
に今さらながら驚いていると  
ころです。3時間という上演  
時間もさることながら、舞台  
装置、ドラマの内容、その理  
解、役者の力量などが試され  
る舞台でした。音楽、ダンス、  
声楽、などその道のプロの人  
に指導を受け、それなりの舞  
台成果を上げることができま  
した。ピアノを弾ける役者が

いるということで現役の音大  
生に出演してもらいました。  
今回の公演が終わり2人の  
入団者がありました。1人は  
この1年間劇団の裏方として  
手伝ってくれた男性と今回の  
公演を観てくれて感動し、私  
もこの劇団で役者をやりたい  
と、入団を希望してきました  
(女性です)。ここ1、2年公  
演が終わると劇団員が増える  
と言っただけのことが続いて  
います。

夏には四国の松山でお会い  
できることを願って。…!!  
(柳辺)

#### 〔大阪府職員演劇研究会〕

昨年は自演連合同公演、春  
の演劇まつり公演、組合主催  
の文化祭に取り組みました。  
今までの文化祭では裏方と  
して支えてきましたが、昨年  
は裏方の働きを担当すると  
もに憲法9条改悪の動きに対  
し、短時間で劇研オリジナル

「列外三名」を作り上げ、職  
場の演劇集団の力が再認識さ  
れたと思います。

昨年末の総会で活動の総括  
と06年の方針を決めました。

行革の嵐の中、さまざまな  
職場で疲弊しつつの文化活動  
のためからか休団者が相次ぐ  
寂しい総会でありましたが、  
代表を杉田満とし前代表の田  
坪文一とともに劇研員の創意  
と工夫をこらし「年に2回の  
劇研独自の公演をうつ」を目  
標に頑張っていきます。

(樋口)

#### 〔劇団コロ〕

劇団コロの2006年  
は、6回目をむかえ、今や  
恒例行事となったアトリエ公  
演から始まりました。劇団若  
手・坂口裕介のオリジナル作  
品「がらくたはーとNO子守  
唄」(浅灘拓／演出)を、1  
月7～9日の3日間に4回公  
演しました。公演の合間には、

劇団員手製のおでん、ぜんざ  
いを販売、バザーも行い、ア  
カペラや太鼓などのパフォー  
マンズもと盛りだくさんの  
催しで、アトリエ公演の間は、  
日頃は静かな(?)劇団事務  
所全体がお祭りムード一色と  
なりました。

さて、劇団コロも創立20  
周年を迎えることができました。  
20年間の成果を観ていた  
だこう、それも日頃はなかな  
か観ていただくチャンスなの  
い小学校公演の作品をぜひと  
も観ていただくということ  
で、8月30日から9月3日に  
小学校作品を中心に5作品を  
一挙上演します。「劇団コロ  
の三びきの子ぶた」「天満  
のとらやん」「のんのんばあ  
とオレ」「わいどま、ぎゃあ  
というたたききさるど」「は  
だかになった殿さん」です。  
「はだかになった殿さん」は、  
昨年の11月23日に急逝され  
たおかしろう氏への追悼公

演(ふじたあさや／演出)で  
もあります。

20周年を一つの糧に、新た  
に一步踏み出したいと思っ  
ています。(漢 利子)

#### 〔劇団大阪〕

2007年、昨年開催しま  
した新人募集ワークショップ  
卒業生による「きらめき公演」  
井上ひさし／作「頭痛肩こり  
樋口一葉」の稽古で2006  
年の幕開けです。少しでも新  
しい人が劇団へ入ってもらえ  
たらと始めたこのワークショ  
ップなので、この公演を機会  
に新たな仲間が増えることを  
望んでいます。

昨年は新人の入団がない  
うえ、退団者がでるなど劇団  
も真剣に新人募集に力を入れ  
ていかないと、毎回客演を招  
いての公演となること必至で  
す。そこで今年、定着しつ  
つあったワークショップの開  
催は見送り、公演時のオーデ

イションによる新人発掘を試  
みることにしました。試行  
錯誤しながらの取り組みとな  
るでしょうが、何とかしなけ  
ればという気持ちでいっばい  
です。

昨年末の定期総会では、劇  
団公演が稽古場である谷町劇  
場のみとなりつつある現在、  
もっと大きな劇場での公演を  
!という意見も出てしまし  
た。しかしながら観客動員の  
問題は深刻です。休団者や退  
団者が出れば当然観客も減る  
わけで、さらに最近の観客動  
員は減少しているのが実状で  
す。どうしたら観客が増えて  
いくのかという問題は、どう  
したら劇団員を増やしていく  
ことができるのか、という問  
題同様にこれからの劇団の課  
題となっていくことだと思  
います。そのためには自己満足  
に終わらないいい芝居づくり  
を今年も目指していきたいも  
のです。(伊藤節子)

〔劇団未来〕

第64回公演、ふたくちつよし／作 森本景文／演出の「ダモイ」は11月18日～27日、劇団未来ワークスタジアムで12ステージ、548人の観客に見ていただき、充実した舞台をつくることができました。

その結果、13劇団（14公演）が参加した大阪新劇フェスティバルの中で、山本幡男役を演じた波田久夫が（主演男優賞）を受賞することができました。

今回の取り組みは劇団創立以来、初めての試みとして、金曜日の昼公演を企画したところいちばん先に満席になるという成果がありました。休日の夜公演には客席が埋まらず、どのようにしていくかが今後の課題となりました。

また、裏の創造では、各場面に変化のある装置とPCによる映像を取り入れ、一定の成果を得ることができました。

た。しかし大道具作り、転換要員の配置などでは課題を残しました。

今年1月10日の稽古開きに始まり、24・26・29日と3日間総会を開き、05年の総括と06年度の活動方針を決定しました。この中で6月23日～25日公演予定の第65回公演の台本を決定しました。

劇団を取り巻く状況は内外とも厳しいものがあります。地域の人々との連携、全リ演に結集している仲間劇団と情報を共有して、より良い舞台を創造していきたいと思っています。（F&O）

〔劇団かすがい〕

いよいよ、新スタジオ「コミュニティシアターAQ」柿落とし公演が始まりました。昨年3月に町工場跡を借り受けてから、約10カ月、ほぼ毎日のように引越作業と内部改装（舞台から照明・音響設備

まで）を、劇団員とたくさん協力者の力を借りて行い、やっと公演ができるまでにこぎつけました。

上演するのは「父と暮せば」（井上ひさし／作・植崎英三／演出）。1月13～29日の全15回公演です。本来は2人芝居のこの作品、主人公・美津江の恋の応援団長である父・竹造に、さらに応援団員6人がつくという演出で、斬新でユニークな「父と暮せば」になりました。

約1年間、芝居ができなかつたというエネルギーと自分たちでこのスタジオを作ったという自負で、出演者・スタッフ一同、この芝居にかける思いは強く、熱のこもった公演となつていきます。この熱気が、地域の人々に受け入れられ、スタジオを「地域のコミュニティシアター」にしたいという劇団の夢の実現になると信じて頑張っています。（トト）

〔劇団四紀会〕

現在、新春恒例の家族劇場公演「仙女の錦」彦市はなし」追い込みの真最中。いずれも再演とは言え、前回から10年以上を経ており、劇団員一同大わらわです。続く新開地小劇場では、昨秋上演した「道」とは打って変わり、有吉佐和子／原作「悪女について」を上演。さらに夏に行われる市民劇場では、一昨年の演劇界にセンセーションを巻き起こした坂手洋二の傑作「だるまさんがころんだ」にチャレンジします。

というわけで、四紀会の公演形態は現在この「家族劇場」「新開地小劇場」「市民劇場」に分かれ、それぞれの特色を生かしながら探りながら、活動を続けております。そして、忘れてならないのは、現在休止している演劇教室（研究生制度）。全リ演加盟劇団共通の課題である後継者づくりに

欠かせない機関であり、来年は創立50周年。今、その半世紀をどう迎えるのか、議論を重ねているところです。今、その再開に向けスタートを切りつつあるところです。

（里中）

〔演劇集団和歌山〕

昨年、久々に新入団員がありました。51歳の新人です。さて、劇団は昨年12月に総会を開きましたが、今年の具体的な上演作品が決まりません。新作の創作劇にも取り組みたいのですが、まだ、作者は「これにする」という決め手がありません。劇団員からも、上演作品候補が出てこないというまことに困った状態です。

昨年の「風吹にひびく唄」を全リ演のフェスティバルでという話もあるのですが、まだ話が煮つまっていません。とりあえず月曜から体操で体

を動かしていきたいと思っております。劇団の冬は毎年こういった状態です。（楠本）

〔劇団あしづえ〕

昨年12月12日に「NPO法人あしづえ」として、新たなスタートを切りました。

活動内容は演劇創造活動のほか、学校や地域でコミユニケーション能力を育てる活動、八雲国際演劇祭の運営に関わる事業、文化施設の管理・運営事業の4つで、これらは、これまで「劇団あしづえ」が行ってきた活動のすべてです。劇団を支えてくださっている後援会（会員約500人）もサポート会員として参画し、サポート会の運営を積極的に展開してくださることになりました。

今年12月12日に「NPO法人あしづえ」として、新たなスタートを切りました。

創造活動では、「ブラボー！ファール先生」の再演の準備に入りました。出演者17人、上演時間2時間の大作です。鳥根演劇ネットのメンバーに友情出演を呼びかけ、劇団大阪の清原正次さんら、関西の役者お2人にも客演をお願いし、鳥根の劇団に刺激をいたしたいと期待しています。創立40周年と法人設立記念公演「ブラボー！ファール先生」公演は6月11、25日と7月は未定。どうぞ、お楽しみに。（有田美由樹）

〔福岡現代劇場〕

8月25～27日に松山で開催される第10回全日本演劇フェスティバルに、猿渡公一／演出による、今泉亜希子出演、筑前琵琶（演奏中村旭園）の引き語りの「信太妻」の公演を予定しています。昨夏の大濠公園能楽堂での公演は能のような雰囲気があったと観

客からの声もありました。

12月8・9日には、ルナル／作、猿渡公一／演出による「にんじん」を上演予定しています。今からどのような芝居にするか、劇団員同士で口角泡を飛ばし合っています。（新平）

〈住所変更〉

劇団久喜座  
〒346-0005  
久喜市本町1-4-45小林方  
TEL・FAX  
0480-215338

劇団自立の会  
〒520-0063  
大津市横木1-10-6谷田方  
劇団上野市民劇場  
〒518-0873

伊賀市丸之内共同ビル3F  
TEL  
0595-2315252  
FAX  
0595-246444

## 満員の客をしっかりとらえた舞台

劇団京芸 藤沢 薫

### 劇団あしづえ『彦市ばなし』

木下順二／作 園山土筆／演出

劇団あしづえの「彦市ばなし」千秋楽を観た。この劇団の場合、2年越しの最終日ということになる。練られた上での舞台が観られるのは楽しみである。

木下順二の民話劇といえ、われわれの年代が芝居をやり始めた1950年代に続けて発表された。「夕鶴」をはじめとして、その頃芝居をはじめた大方の人が、これらの民話劇の洗礼を受けたといっても過言ではない。

私ごとで恐縮だが、私が生まれて初めて出演したのが、大学時代に演じた「彦市ばなし」の彦市だった。そのときの演出がこばやしひろし氏である。その後、ある劇団で「殿さま」をやっているから、この芝居は懐かしいというようなものではない、未だにセリフの断片が自然に出てくるくらいなのだ。

民話というのは、貧しい農民がかなわぬ夢を思い描いた物語だというのが定説だが、どの話も名もない農

民が偉い人をやつつける痛快な話が多い。この話も彦市が普段は口も聞けない殿様にカツパを釣ると大ぼらを吹いて一泡吹かせる話だが、そこへ彦市に隠れ糞をだまし取られた天狗の子がからみ、目まぐるしい展開をみせる。

客席は、千秋楽らしく大入満員だった。はじまった芝居は、懐かしいものとは程遠い、全く違う芝居を観ているようだった。2年間続演したという慣れも見えず初日のような緊張感があった。芝居はテンポよく進行し、途中根っこの形が変わる舞台転換も黒子が踊りながら楽しく変

えてゆき、しっかりお客をとらえて、彦市（原敬彦）も殿さま（松浦夕美）も天狗の子（小川寛子）も全身で演じきって爽やかな印象を受けた。聞けば3人も新人と聞いていい若手だという。その若手の舞台をベテランの黒子がしっかり支えているという作風も気に入った。

枝葉末節にこだわらず、ドラマに向かって直球勝負というのはいかに共感するところだが、なにかもの足

りない感じが残る。端的にいえば、話をよく分かったが正直、芝居を楽しむところまでいかなかったというところだろうか。われわれの常識では、もっとゆったりした時間の流れの中で大らかに話が展開するはずで、人物形象も芝居の仕方もあまりに淡泊ではないかという印象はぬぐえない。

彦市の不敵ともいえる満々たる野心、生まれてはじめて下々の暮しぶ

りを見聞した殿さまの異常なまでの好奇心、人間にだまされた子天狗の激しい敵愾心、これらの要素が希薄だと芝居は平板になってしまう。頻繁に独白が出てくるこの種の芝居に、声をひそめるリアリティは不要である。要するに、格調と様式もったこの戯曲のとらえ方がナチュラルに過ぎたのではないかと思われるのである。

（11月13日 しいの実シアター）

## 死者によって生かされる生者

### 劇団四紀会『父と暮せば』

井上ひさし／作 無法松猪吉／演出

神戸の4つのおやこ劇場の統一例会で、劇団四紀会の『父と暮せば』が取り上げられた。子どもたち

は、一度だけ思わぬところで笑いが出たが、ほとんどは静かに舞台に集中していた。

演劇評論家 平田 康

「わしは正面から見てしもうた、お日さん2つ分の火の玉をの。…真ん中はまぶしいほどの白で、周りが黄色と赤を混ぜたような気味の悪い色の」。これまで何回も観たこの劇だが、おとつたん（竹造）のこの言葉がきちんと耳に残ったのは



今回が初めてだった。

私が最初に原爆に強く関心を抱くようになった大学生のときの原爆展で、「原爆体験記」編纂のために京都市内の被爆者の話を聞いて回ったとき、印象に残ったのが被災した場所によってそれぞれが見た原爆の色が違うことだった。白、赤、黄……

作者の井上ひさしが、原爆についての情報をいかにコンパクトに、しかし正確に伝えようとしているかを、この公演の竹造（大西衛一）の台詞まわしで改めて思い知らされた。第一場では占領軍による原爆情報隠蔽問題、二場では原爆瓦を手始めに「上空580メートルで爆発：温度は摂氏1万2000度……」といった事実、三場では子孫にまで影響する原爆症の怖さ、という具合だ。観客に親切に、一度にあまり多過ぎることなく、基礎的情報が散りばめられている。それが観客に届くかどうか

は主に竹造役の語り方にかかっている。大西は、幕開きの押入れの中からの第一声以後、最初から強いインパクトでの語り終始した。それが最も効果をあげたのは、「事実」の伝達だったと言える。言葉は飲み込んでしまうような彼の悪い癖は8割かたは影を潜めていたが、2、3度はとちりに気づいた。しかし圧倒的な勢いがそれを感じさせなかった。

もちろんこの劇が多くの人々の心の琴線に触れ続けているのは、強烈な体験を媒介に、今では郷愁さえ感じる父娘の暖かい交流の中で、娘が過去にとらわれた生き方を脱皮して、前向きに生きる勇気を取り戻す過程にある。美津江（篠原彰）はこの微笑ましい過程を、自然に、しかし節目をもって充分に演じていた。前回の公演の演技から、飛躍的と言つていいほど発展していた。父親に甘えながら、だが自分の主張をもって対

決するからこそ成長するという当たり前の成り行きが、安心して納得できる舞台だった。

それにしても、多くの原爆劇が生き残った者の目線で書かれているのに対し、これは死者のメッセージが基盤だ。もちろん竹造は美津江の心の中から生まれる存在だとも解釈できるが、殺された者たちの思いの結晶だと対置した方が立体的だ。

ところで、一場から終始井上戯曲らしくたつぷり過ぎるほど言葉が聞かされた後の幕切れ近く、沈黙が訪れる。美津江がああとき、父を捨てて逃げたという罪意識を、彼の渾身の説得で乗り越えて、「こんどいつきてくれんさるの？」と言うまでの間。ト書きには「短い沈黙のあと」とあるが、実際は相当に長かった気がした。しかしそれがその後の彼女の身振りや表情とあいまって、決定的転換を表わすクライマックスにな

り得ていた。これは演出（無法松猪吉）の功績だろう。

また前の公演では装置が際立っていて、演技の足を引っ張っていたが、今回（狂井たかし・村井伸二）は戯曲の指定通りの最小限の飾りで、観

## 劇団四紀会『道』

フェデリコ・フェリーニ／作 岸本敏朗／構成・演出

小劇場の密度を生かして地域に密着し、新しい観客層の開拓を目指す「新開地小劇場」も第6回を迎えた。上田成子のジャズピアノ演奏もすっきり板についた感じ。彼女の言葉

を借りれば、最初は舞台の隅に置かれていたピアノが今は真中に据えられているとのこと。それが多くを物語っている。個人的には、その都度の彼女の編曲・解釈が楽しみだが、今回は映画音楽特集で、後の『道』との関係でトランペットとの共演が

あったためかもしれないが、やや大人しい気がした。

『道』は「存知フェデリコ・フェリーニの名作映画。あの大空間を自在に使った黒白のすごい迫力を、狭い空間で舞台化するのは大冒険で、構成・演出の岸本敏朗はそれを百も承知で敢えて挑戦した。その「舞台化へのベース」は道化。原作も大道芸人、サーカスの世界だが、最も道化の雰囲気を持つのはジェルソミーナだ。ザンパノはその対極にある。

彼女はネガティブな意味でもフルだが、一方で積極的はいくつかの領域を生きる可能性を持つ。それに対して、彼の方は頑強に自己の殻に固執して破壊する。

この舞台では最初から7人の道化が登場し、サーカスや祭りの雰囲気醸し出す。熱演だ。岸本がパンフで告白している通り、いわゆる新劇の枠内にいた俳優の肉体にとつて、それは途方もなく大きな課題であったのは想像に難くない。そしてその成果は、白井博之の指導のもとで相当な程度達成されていて、全体として楽しめた。しかし残念ながら、奇才ジュリエッタ・マッシーナが生まれるがらにして身に付けていた道化の「質」は、7人の「量」ではカバーし得なかった。

所詮私たちの世代には映画の印象が強過ぎるのだろう。私の古いノートには、1957年7月11日に観た

言わずと知れた、永井愛の代表作のひとつである。今回、この名芸版『見よ、飛行機の高く飛べるを』を劇評するにあたって、まずは原作の戯曲を読むところから始めてみた。なんせ、3時間ほどのものを1時間45分に仕上げるには相当のご苦労があっただろうし、これを読まずして「あーだ、こーだ」言うのは失礼とも思ったからである。さっそく8年も前に買った「せりふの時代」を引っ張り出すところから開始！ 捜すの

## メッセージ色の強い舞台

### 劇団名芸『見よ、飛行機の高く飛べるを』

永井愛／作（栗木英章／台本） 佐野野明／演出

に苦労した分、いろんなことを言いますが、どうぞご勘弁を。前半の部分がほとんどカットされていた。そのため、舞台は女生徒たちが内緒で機関紙を作ろうというところから始まる。これがチョットとマズイと思った。前半の肝心の人間関係を紹介する部分がカットされている。延ぶと初江の関係については、前半のカットされていた「初江の演説に共感し、たったひとり密かに拍手をしていた」延ぶのくだりや、初

江の「貧しい人はみんな残飯屋が来るのを楽しみに待ち、漁る」と言う話の中に、延ぶは見失いがちな何かを発見し、自分を見直そうと心に誓うのだ。そこで延ぶと初江は同じ目標を持ち始めるのである。今回の演出では「質実剛健」から「良妻賢母」への校風変更に対してということには拘っていたが、少し説得力に欠ける。光島延ぶが元々どんな人物で、初江と出会い、なぜそれまでの優等生だった自分を捨ててまでそんなことを始めたのが曖昧になっていった。それはストーリーの大幅カットのせいだ。また、前半2場面同時進行がかなり続いたが、あれは完全に失敗。観客はどっちを見



記録がある。「生き方の違いを超えた人間性」というものはあるか？…人間の孤独さ、生きる意味などが迫ってくるが、それでいてテーマが決して物語を圧倒しない」などと書きなぐっている。岸本の舞台は、プロット＝物語の点では映画に極めて忠実だ。母に売られたジェルソミーナとザンパノの出会い、彼女が鎖切りの相棒として彼の暴力の中で成長する様、3人目

の主役としてのキ印の登場、修道院のエピソード、キ印の死と彼女の精神の破壊、そして彼が彼女を捨てる、メロディによる回想、やがてラストが訪れる。劇の途中から、そのラストがどうなるのか、すごく気になっていた。映画では、暗い海に向かって大男アンソニー・クインのザンパノが野獣のように「ジェルソミーナ」と咆哮する。その叫び一つの重みが、それまでのすべての物語と同じ重さを持っていて、人間の実存というか生きるわびしさというか、大きなもやもやが観ている者を圧倒し尽くしたのだった。

もちろんその再現を期待したのではない。あの迫力をどういう形で表現するのか、不安を伴う強い関心を持ったのだ。そして実際には、舞台のザンパノは道化たちに囲まれてうずくまり号泣した。この幕切れは、話の流れからいえば自然で納得がい

くが、しかし劇のエネルギの点では不十分というか、こちらに強く訴えてくるものはあまりなかった。

私なりに割りきってみる。言葉によって伝えられる、「どんな人間にも生きる価値がある」というメッセーじと、それを際立たせる3人の生きる世界と人間関係は、筋の展開と畑広美、狂井たかし、里中真の誠実な演技で、それなりに表現されていた。しかし、あの映画が最も雄弁に語った、言葉によらない、言葉を超えた何かは伝わって来なかった。それは必ずしも道化たちの表現不足のせいだけではない。舞台の作りそのものにどこか計算違いがあったのではないだろうか。「もらった宿題は限りなく大きい」と岸本は言うが、その宿題を俳優の肉体の問題に限定しては、今後の「財産」にはならない気がする。

（9月25日 新開地まちづくりスクエア）

劇団演集 磯谷 誠

劇団名芸の栗木氏執筆。作品を生み出すという原点が蘇ってきたという作者の言葉、現代日本が忘れかけている戦争の傷、それに立ち向かう人々の生き方に連なりたいという演出の言葉には感動し、両氏の粘り強さには感服します。

あらずじ：名古屋に住むカメラマン、中根里子が沖縄の空港で偶然、宮城栄子という人物に出会う。里子は栄子がこれから帰るといふ実家に同行することに。栄子の実家・宮城家は、ひめゆり学徒の生き残りである祖母たえ、高校教師の姉悦子、看護師の妹萌、農協にパートで働く母喜久と女ばかりの一家。たえは、辺野古の米軍海上基地建設反対のため、ヨシおばあ、平良おじいらと座

り込んでいた。そして、いよいよ海上基地建設のための海底ボーリング調査が強行されるとの知らせが入る。舞台上は主に、名古屋の中根家と沖繩の宮城家に分かれていた。

全体的に、いろいろと盛り込み過ぎという気がした。観ていて結構あつという間だったので、何時間だったか記憶は定かではないが、場面から次の場面への展開が早く、人物の関係が描ききれなかったように思った。沖繩在住の俊と秀人の掛け合いなんかはおかしくて笑ってしまったが、特に中根家の家庭の事情がわからなかった。お父さんがなぜあんなに怒りつばい、飲んだくれなのか。娘が何に心閉ざしているのか。里子はどうして勝手に

家を飛び出すのか。果たして、この家庭を描く必要性があったのか、いまち伝わらないのである。里子が写真家として向かう沖繩。そこで見たものだけを描けば十分なのではなかったか、などと疑問が残った（他の劇評家は、あるいは中根の家庭だけ描いて、沖繩の部分をカットしてほしかったと言っていた）。演出がそれぞれの人生、そのドラマを描きたかったために敢えてそうしたのかもしれませんが。栄子役の阿南留圭はうまく芝居全体を引っ張っていた。役柄の得もあるかもしれないが、彼女の登場で舞台上に活気が出ていた。俊と秀人を演じた岩田史郎、谷川伸彦との絡みをもう少し観たかった。

：今の時代、今回の劇団名古屋の舞台のようなメッセージ色の強いものに、舞台人として我々も挑戦していかねばならないのか、ということを感じさせられた作品だった。

## 劇団名古屋『美ら海（ちゅううみ）』

栗木英章／作 久保田明／演出



たらしいのか戸惑ってしまう。これらの理由で、（私はそうは見なかったが）延ぶも初江もただの変わった人に移ってしまう危惧があったことは否めない。規則に縛られ、不自由でありながらも心の自由さを失わな

い、そんな青春を生きる少女たちに観客は心打たれるのだ。

新庄の「はあ」というセリフはなぜカットだったのだろうか？あれで新庄の人柄が大きく変わったように思える。また、新庄が延ぶに告白する場面においても、唐突過ぎて心を打たれない。パツイチの教師が女生徒に気軽に声を掛けている、そんな風に見えていた。新庄がほんやりしている風が全く無くなっていたので、素性のわからない、正体不明の人物になってしまった（セリフの挿入で説明していらしいが伝わらなかった）。

安達と菅沼の関係の描き方もよく伝わらなかった。菅沼は安達同様、生徒を常に監視し、立派に育て上げようという熱心な教師なのだ。が、これもやはり前半部分のカットでわからなくなっていた。板谷順吉は、演技の問題なのか、とても軽薄に

映っていた。なぜ箸を持っていたのかも不明のまま出番を終えていた。

：いろいろと辛口批評で恐縮です。が、実を言うと本番を観劇中はそんなことはほとんど感じず見ることができた。やはり、延ぶ役の近藤亜由美、初江の武藤陽子、木暮美の柴田晃子らの熱演に助けられたのだと思う。初江が号泣する場面ではハッキリ言って私が泣きそうだった。一緒に観ていた友人も「よかった」と言っていた。私もよかったというのが終演後の正直な感想だった。先にも述べた通り、3時間から1時間45分なので、そう考えるとすごいと思う。ただ、演出の意図がわからなかったのは事実だ。惜しい！

追記 名古屋芸術賞奨励賞受賞おめでとうございます！



## 善人であることの難しさ

神澤 和明 (演出・評論)

### 人形劇団クラルテ『セチュアンの善人』

ベルトルト・ブレヒト／原作 市川 明／翻訳・台本  
東口次登／台本・演出

クラルテが一昨年の『三文オペラ』に続いて、ブレヒト作品を取り上げた。舞台の色合いはまるで変わっている。『三文オペラ』は辛辣で猥雑だった。社会風刺という以上に人間のあくだい部分をえぐる「人間芝居」を、かりに人形で演じているという印象をもった。今回は人形劇として見やすい舞台に創られ、まさにクラルテの作品になっっている。「おとなのための」という限定した視野でなく、「子どもも楽しめる」人形劇で

ある。

ブレヒト劇では総体にそうだが、とくにこの芝居で顕著な「寓意性」が、人形劇という表現に合っている。また人形が人間を演じるという、そのこと自体が「異化」効果だ。太陽、月、星をデフォルメした3人の神様が人間ならざるものとしてユーモラスに表現されるし、シエン・テがひっくり返るとシユイ・タが現れたり、シエン・テの店の狭い空間が押しかける居候たちではみ出すほどあふれ

かえったり、人形ならではの表現手段が効果的におもしろく使われている。そして人形の姿がチャーミングで、楽しい。結婚式の祝宴など、おもしろいが背骨からはずれる部分が削られる。それでもシエン・テがこの社会において善人として生きてゆくことが困難で、シユイ・タという冷酷な人物の存在が必要だという状況が、はっきりと示される。脚色者の手際はよい。人形役者たちの台詞は聞きやすく、庶民にベースを置く人物造形も無理がなくて、話がよく伝わってきた。

貧しい善人を食い物にするのは、やはり貧しい人だ。弾劾されるべき

は、そんな社会をつくり出す支配者階級である。その階級に資本主義の論理でのし上がるのがシユイ・タであって、だからシユイ・タは善人と対立位置を占める。だがシユイ・タは悪人だろうか。底なしのお人好しをいように食い物にする社会のずるさを跳ね返すのがシユイ・タではないか。人々は楽をするためにシエ

ン・テを欲し、シエン・テは生きるためにシユイ・タを求める。そして神様はシユイ・タと切り離れた存在としてのみシエン・テを肯定する。金を与えるだけで、社会を変える力ももたず、見たくないことに目をつぶって「善哉、善哉」と唱える神は所詮、慈善家の金持ちにすぎない。善人として生きることが可能である

社会がどうやったら到来するのか、そそくさと立ち去る神に投げられたシエン・テの叫びは、私たち全体の叫びである。全体に音楽の使用が少なく物足りない気もしたが、舞台としてはまともりがあった。

(9月30日 テイジンホール所見)

### 劇団きづがわ『こんにちは、母さん』

永井 愛／作 林田時夫／演出

「ただいま、母さん」ではなく「こんにちは、母さん」だ。それが今の一般の親子関係を示している。「母さん」は夫を亡くしてから、東京下町の家で一人暮らしをしている神崎福江(和田雅子)。こんにちは、と訪ねてきたのは息子の昭夫(山田一己)である。大手自動車会社のリ

ストラ担当にされ、連日、同僚・部下から突き上げられ、妻との仲も崩壊寸前にある。心身ともに疲弊して、2年ぶりに実家に足を向けた。ところが彼を迎えたのは、彼をこそ泥扱いする中国人留学生の娘・李燕(西田裕子)と、福江の「恋人」らしき「直ちゃん」こと元大学教授・

荻生直文(中屋光雄)。そして茶髪

に染めて留学生支援のボランティア活動にいそしむ、元氣な福江であった。昭夫が戸惑いながらも腰を落ちつけていると、リストラされた同僚の木部(河塚俊哉)が文句を言いにかけてくる。義父の「老いらくの恋」をたしなめんと、直ちゃんの嫁・康子(橋野悦子)もやって来た。だが様子を聞くと、康子と夫の間もうまくいっていないらしい。

それぞれが自分の悩みを持ちなが



開する。丸山定夫（南出謙吾）、團井恵子（柳辺育子）が素人の隊員たちと一緒に、今度の慰問大会での出し物、「富島松五郎伝（無法松の一生）」の稽古に励んでいる。時間軸で彼らの後ろにいる私たちは、彼らがこの3ヵ月後に原爆によって全滅することを知っている。それだけに、重苦しい時代に芝居に打ち込むことに生きがいと喜びを感じる人々の、懸命な姿が心を打つ。

劇団として力以上のものを見せてくれているが、役柄と演技者の間の年齢、演技スタイルのギャップや未熟さも見える。だれなように、テーマをはずさないようにと頑張っているが、全体の弾みが弱いと感じた。井上芝居はミュージカルではないから、アリアを心情的に歌い上げる必要はない。作者が書く歌は情景、説明としてあり、コーラスが主だ。役者の歌でよい。だが流行歌がそのまま取り込まれた場合は、娯楽的要素が大きくなる。テーマが重いほど、軽々とにぎやかに歌われる方がよい。その点で、歌唱力に不満が残る。大坊はいかにも無骨な武官らしく見せる。いい人の役で、ちよつと水戸黄門みたいになる。岩崎は、長谷川大将とは反対の立場にある軍部の密偵の役。底意地が悪く頭の堅い国粹主義者というところだが、滑稽な軽みもある。客演の南出は、あの「丸

山定夫」というには線が細くすつきりしすぎて、松五郎の演技にしても「熱演役者」にはほど遠いが、さわやかさは買える。同じく、ベテラン柳辺に元宝塚スターの気分を求めるとは難しいが、死の不安に怯えながら芝居に打ち込むという表現が、しっかり示される。ホテルの持ち主、神宮淳子の佐藤栄子は「敵性国民」として圧迫されながらもどっしりしているし、WIPPYがはいやいだ感じで、熊田正子を演じて、舞台を明るくしている。言語学者・大島の寺氏菊夫は、役より大分年かさだが考え深げでよい味を出す。女学生役の木下沙也子はけなげ、淳子を監視する警官の青堅充裕も、後ほどユーモアが出る。例によって凝った転換で、舞台を分割して床を動かす。おもしろいが効果はいまひとつ。奈落（地下壕）の使い方はよかった。（10月28日 プラネットホール所見）

ら、周りの人を見ている、小さな社会である。和田が演じる、はつらつとした福江の姿がまず魅力的。きつぱりとした性格で、息子も含めて他人の心配ごとをあまり気に掛ける人間ではない。人は人と割り切り、他人の眼を気にせず、自分の決めたことをためらわず前に進めてゆく。今回は台詞が粘らず、好演だ。そして芝居の展開とともに次第に、昭夫がおもしろく見えてくる。父と折り合いが悪く家を出てめったに寄りつかず、会社では事務的にリストラを進めて、福江からも「冷たい」と言われる彼。いかつい顔の山田は始め、ひたすら不機嫌にしている、いかにも嫌な奴に見えるのだが、だんだんと彼の鬱屈ぶりがわかってくる。やはり夫婦仲のことで悩んでいる康子と共感し、メンコ遊びで心を触れ合わせるところに心がほぐれる様子が見え、自分の立場を悪くする覚悟で

本部を会社に取りなしていたことも示される。シエン・テのように善人と悪人を分けることができない私たちは、善人の上に悪人の仮面をかぶって世の中を渡ってゆくまでだ。中尾の直ちゃんがインテリの品のよさと、人と争うことを逃げる気の弱さ、世慣れない無頓着さをほ

## 劇団息吹 『紙屋町さくらホテル』

井上ひさし／作 佐藤日出美／演出

プレヒト劇と同様、井上ひさし作品も多くが「唄入り芝居」で骨太の喜劇である。普通の芝居のやり方は通じない。

井上ひさしはどんどんナマに発言するようになってきたように思う。巣鴨拘留所に初老の男が現われ、取り調べにあたった針生（岩崎徹）に自分を、A級戦犯として拘留するよ

長谷川大将（大坊晴彦）は、天皇に戦争を始めた責任は問えないが、終戦を決意してから実際に決定するまでの長い空白、その間におこった沖繩戦や広島・長崎の原爆などで死んだ人たちに対して天皇は責任があると明言する。

そして場面はさかのぼり、移動演劇部隊「さくら隊」の宿舎にされた「さくらホテル」を舞台に芝居は展

## かすがい、新・劇団スタジオ柿落とし公演

演劇評論家 今泉おさむ

劇団「かすがい」の新しい稽古場が、劇団員による内装作業も終わり、完成した。

練習場所の拠点であり、「スタジオオ公演」も可能。そして今月、柿落とし公演が行われた。最近、制約のうるさい公民館など公立施設さえほとんど有料化されるなか、それが

解消されるだけでも大きなプラスであり、しかも『スタジオ公演』ができるとなると、セットを組んだ練習はもちろん、多彩な活動も企画できるよう。ただこれから、ここを維持するために有形無形の困難も出てくるだろう。それを乗り越え、いい舞台を創り上げてほしい。

### 劇団大阪『世紀末のカーニバル』

齊藤 憐／作 堀江ひろゆき／演出

大阪新劇フェスティバル参加。戦前戦後、貧しい農民たちは新天地を求め、海外へ移住していった。中南米、特にブラジルでは、交通通信が

遮断された奥地にまで入り開墾し、村を作った。そこでは戦後、うそのような「勝ち組」「負け組」の対立まで生み出した。激動の「昭和」が終

焉し、「平成」に入ったとき、日本はまさにバブル景気に沸き立ち、単純労働者不足から、出稼ぎ外国人たちが流入。本国ブラジルの経済破綻から、日系ブラジル人も大量に来日してきた。

永瀬一家は30年ぶりに日本の土を踏む。1世のタツは満州帰りから再度の移住という苦難のみち、2世のミツルとヘジーナ夫婦は本国の職を捨て、3世のマリオは未だ見ぬ地に希望を抱き、彼らは群馬県の小さな町工場で働きた。それぞれの世代を持つ、祖国への感慨。結果、タツは日本を終の棲家と覚悟を決め、ミツル夫婦はやはりブラジルでの再起を決心、日本の生活習慣に戸惑い、

不満から、日本でできた恋人と帰国したマリオは「日本」を経験したため、「ブラジル」社会にも居辛くなり舞い戻る。三様の世代の生きかたを描き、これからの「世界」の中の「日本人」を問いかける。

舞台上部に10個近くのテレビが吊られ、当時の世相が映し出される。これは、解説以上に観客には効果がある。沖縄からのブラジル移住者、出稼ぎ幹旋業者、町工場主人、そしてタツの日本に残したミツルの異父

### 劇団未来『ダモイ』

辺見じゅん／原作  
森本景文／演出

大阪新劇フェスティバル参加。

「ラーゲリ（収容所）から来た遺書」と副題がつく。第二次世界大戦終結後、大陸にいた多くの男たちは、軍

ふたくちつよし／脚色

（11月12日 谷町劇場）

人も民間人も、シベリア強制収容所へ捕虜として送られ、森林伐採などの強制労働をさせられ、異郷の地に多くが死んだ。50年までに47万人が

ダモイは帰還したが、対ソ連の情報活動に従事していたとのことで、13万人余りが残された。当時、国交が回復していないソ連は、捕虜送還終了を通告し、ダモイの道は閉ざされた。これは、過酷な状況の中に残された男たちの物語である。ダモイを熱望しながら異国の地に果てた数多くの男たち。7年後、ダモイが再開された時、文書持ち出し厳禁のため、彼らの「遺書」を分担暗記して持ち帰った記録を舞台化している。

ソ連に迎合する「党史研」グループが牛耳る、当時のラーゲリの実態の中で、それに屈することなく、文化活動を広め、仲間に希望の灯火を点そうとした山本幡男。その遺書を持ち帰った仲間たち。それを登場人物「3人」に絞り描き出そうとした。当時の状況説明と自身の気持ち、それを台詞の中で、どう語り分けて演じるか。波田久夫・山本幡男が、





「新稽古場・柿落とし公演」。ダブ

### 劇団かすがい『父と暮せば』

井上ひさし／作 榎崎英三／演出

ルキャストで計15回。B班を観る。間口4間四方の舞台に、詰めて50の客席。階段状で観やすい。

この戯曲は、数多の劇団が上演しているが、今回は「斬新な演出構想で、今、進化する、誰も観たことのない決定版」とのキャッチコピー。それは、父と同じく被爆死した、老若男女6人が舞台上に現われ、「頑なな美津江の心を解きほぐそうと、無言ながら動きや表情で力づけようとする。これは肉親の情だけでなく、無惨に死んでいった者たちすべての願いを示している。2人芝居には煩雑とも見えるが、うまく処理され、父の願いを増幅させる効果がでた。何本もの直垂状の黒布が舞台を囲み、

不屈の男を熱く創り出した。あとの平尾光秋、牧達郎も充分に対抗できている。どんな逆境にあっても、希望を捨てず生き抜く闘志。人間の不屈さを力強く謳いあげている。ただ舞台としては眼にも見せること。ラストの遺書の朗読には「救」がほしいし、極寒の大地に建つだら

### 関西芸術座『請願』

ブライアン・クラーク／作 吉原豊司／翻訳  
亀井賢二／演出

うラーゲリ。ダモイの希望を閉ざされようとした、荒涼とした思いは、舞台美術（板阪晋治）は様々に工夫しているが、「スタジオ公演」の狭さから感じ取るのに、残念ながら不満が起ころのは酷か。波田久夫・山本幡男が男優演技賞を得た。

(11月20日 劇団スタジオ)

「反対」の請願署名広告に名を連ねているのをエドムンドが見つけたからである。そこから、2人の現実的会話が始まる。エリザベスが、余命数ヶ月の癌に冒されていること。若き日、副官と楽しんだアバンチュールをエドムンドが知っていたことなど。戯曲には「静かな叫び」と副題が

つく。余生を静かに暮らしているはずの老夫婦が、現実社会への参加をきっかけに、自分たちの現実を顧みる。コーヒーを嗜み、新聞に眼を通しながら、穏やかではあるが、そこには多くの示唆がある。残された人生。あとの人々に何を残すのか、若い頃ならば激しい応酬にもなったであろう。その顛末をいかに組み立てて、どれだけ提示できるかであろう。結果として、充分に期待に応えた。「平和への願い」も主体が「政府」か「国民」かで微妙なズレを生む、その「男と女の異なり」が、後半や「夫婦」に傾いてしまったか。「社会」参加への揺り戻しがもう少し強くほしい。溝田繁と河東けい、ペテランの力量を枯れずに出すことができた。河東けい・レディ・エリザベスが女優演技賞を得た。

(12月2日 劇団スタジオ)

薄く透かし見えた線巻きの白い円球に、最後、灯が点る。

3年後の広島。生き残った美津江も被爆者。図書館に勤めているが、「幸せになってはいけない病」に取り憑かれ、ひっそり暮らしている。親友を失い、焼け死んでいく父を眼の前で見捨てざるを得なかった負い目がそれをさせている。日々、現われてくる「父」との会話で、心に自問している。現われた木下青年との恋も、「私は幸せになつたらいいんじや」と、消極的に逃げようとする。その心の揺らぎを、関みさとが期待どおりに演じきった。大浜誠吾が、ユーモアをたたえながら、娘を想う切なる竹造像を創り出し、いいアンサンブルを生み出した。このスタジオを劇団は「コミュニケーションターAQ」と名づけ、他にも利用を呼びかけている。

(1月22日 劇団スタジオ)

## 「復興支援」の本質暴く

劇団弘演『ぢらい』を観て

津軽保健生活共同組合平和委員会

竹浪 純

劇団弘演『ぢらい』（森田有／作・作問しのぶ／演出）を観た。とある病院の診察室、1人の老人が医者からの診断を受け、「杖組」として日本政府が進めるカンボジアの「人道復興支援」へ派遣されることになる。そして「杖組」とは、命を失う危険と隣り合わせの地雷探索係であった。政府が「杖組」を選定する条件は、医療費がかさむ疾患をたくさん抱えた老人である。

場面は一転、カンボジアの赤茶けた大地。杖組となった老人は、後ろに除去係兵士を従え地雷の探索に当たる。ところが兵士が誤って地雷を踏んでしまった。その地雷は圧力が解けると爆発するものらしい。足を

動かすことができなくなってしまう兵士を中心に、シリアスかつコミカルな事件が次々と繰り広げられる……。

結果的に地雷だと思っていたものは日本人が持ち込んだ空き缶であった。なぜカンボジアの大地に空き缶が捨てられているのか。現地の母子が、日本政府が進める「人道復興支援」の実態と大量のごみ投棄を告発する。しかしともかく地雷爆発の危険は去った。やれやれと引き上げようとしたところ、老人が本物の地雷を踏んでしまう。地雷は爆発し老人は片足を失う。場面は暗転し病院の中。医師と看護師が心配そうに見守っている。「だいじょうぶです

か?」。老人は夢を見ていたようだ。「ああ、もうだいじょうぶです」。片足がないその老人は松葉杖を受け取り、病院を去る。

『ぢらい』の中の兵士が、イラク復興支援をすすめている自衛隊とダブって見えたのは私だけだろうか。実際は存在しない「地雷」＝大量破壊兵器、それを「除去」し「復興支援」をすると称して送り込まれる他国の軍隊。

実態は他国の企業による経済侵略の基盤の確保であり、一番の被害者は戦争により環境を破壊され、命を奪われる現地住民である。『ぢらい』は、アメリカを中心に進められたイラクへの侵略とその「復興支援」に

対し、その本質を暴き鋭く告発するものとなっている。

劇中、地雷を踏んだ兵士を演じた田中毅の熱演が光る。2人でのかけあいという単調に走りがちなストーリーをコミカルな演技で支えた杖組の老人伊藤剛。この2人の緊張感あふれるやり取りにホッとする息抜きと舞台に華を与えた秋本博子、森

下法雄のベテラン陣。そして劇の骨格を形成する復興支援の本質を語り演じた伊藤かよ子、竹浪歩の現地母子。劇の「起」では「にこやかな」笑顔で恐ろしい棄民政策の手先となり、「結」の意外な結末をミステリアスに締めくくった三上恒子と真鍋幸市。音楽、効果もよく、それぞれ個性と経験がうまく調和され充実

した舞台が作り上げられた。舞台をデネガに選んだことも功を奏している。暗く狭い空間が、通路ぎりぎりに埋め尽くした観客と舞台の一体感を作り上げることに成功していたように思う。弘演次回作品に期待がかかる。（公演日 12月11・12日）

（陸奥新報）2005年12月21日付

## 初々しい演技、力強い舞台

『多摩川に虹をかけた男―田中兵庫物語―』

日本児童演劇協会会長

内木 文英

川崎市が青少年舞台として、公募した青少年と、市内の演劇人が協力して創ったという話題の作品「多摩川に虹をかけた男―田中兵庫物語―」（小川信夫／作・高木達／演出）を、2月11日の午後、小田急新百合が丘駅近くの麻生市民館で観ること

ができた。

洪水を防ぐ民衆の努力、協力という場面から始まる舞台だが、農民と権力者（江戸幕府側）の争い、貧しさが生む悲劇が懸命に描かれた戯曲である。

プログラムによると、この劇の主

人公である田中兵庫という人物は、今から300年ほど前（18世紀初め）、川崎、江戸に生きた人で、43歳で川崎宿本陣名主となり、46歳で川崎宿の問屋、年寄役に就任、六郷の渡舟権を得た人である。50歳で江戸に遊学、『民間省要（みんかんせい



よう」を書き注目されている。利根川、荒川、多摩川の治水事業などにあたり、代官をつとめる、とも書かれている。

1千人のキャバを持つ大きな会場がほぼ満席、年配の観客が多く、地元で創り上げた、地元の生んだ偉人を扱った舞台ということで、期待感の満ちあふれた会場であった。

つまり、作品も、観客席も、演技者も、照明舞台を支える裏方も、すべての人たちが一生懸命であった、ということだ。これほどキャスト、スタッフの人たちの、力のこもった舞台を最近観たことがないほどだ。

50人を超える登場人物のうち、半数以上は公募によって集められた人たちである。公募青少年(約30)、公募市民(数人)が中心で、それを助ける形で、京浜協同劇団、劇団川崎演劇塾、劇団民芸、人形劇団ひとみ座などから何人かのプロが参加し

ている。たくさん登場人物がいるということとは、たくさん的人物が、多摩川の水をめぐる、さまざまな出来事の中に生きることになる。

スライドで解説されたり、簡略装置に工夫がこらされたり、複雑な筋立てを説明するために努力されていた。しかしその、たくさんの場面が、すべての観客に、すっかり理解されていたわけではない。原作の持っている激しい情熱と、初々しい演技者たちの努力が、その混乱をまねきそうな舞台上の葛藤を、力強くまとめ上げていた、といえるだろう。

ラストシーンでは、登場人物の多くが舞台にならんで歌う。ほぼ満席の観客のあたたかい拍手が、そのすべてをつつんでいい雰囲気幕がおりた。

力のこもったいい舞台だったな、と今思い返してそう思うのである。

## 再演の舞台に向き合う勘考

はぐるま「夜空の下に降る花は」と

銅鑼「流星ワゴン」に寄せて

舞台には初演から間をおかずに再演するということがよくある。初演と再演と、どちらがよかったのか、と客席にいると無責任のようだが、つい比較をしてしまう。そして、再演の意図を理解することもできるのだが、初演のインパクトが強く残っている場合には、再演が必ずしも成功したとは思えない場合もある。逆に、初演で見えなかつたものが再演では確認できるということもある。

あるいは、初演を見逃した観客のために、好評を得て、熱のさめないうちに、再演して、より多くの人たちにみてもらいたい、ということもある。

### ◆「良さ」の基準とは

初演の「良さ」をそのまま残すと

演劇ライター 鈴木 太郎

いうとき、その「良さ」の基準とは何かということもある。作り手としての「良さ」と観客としての「良さ」の受け取り方も違ってくることもたしかにある。ひとつの作品をめぐるでも、初演のもつ「未知との遭遇」のような興奮もあれば、再演がもつ「改めて確認できる」という認識度を深めることもある。

たとえば、数年前(1998年)のことになるが、もつとも初演での「良さ」で印象が強に残っている舞台として劇団俳小が上演した「どさ回りのハムレット」がある。初演は東京の大塚ジェルスホールという小さな劇場だった。「ハムレット」の悲劇を描いた作品だが、シエイクスピアの作品とは違って、ドイツ

の巡回劇団が十八世紀に上演していたものだった。狭い空間でのダイナミックな動きに圧倒されたし、主役のハムレットを演じた隈元勇治の迫力のある演技にも注目させられた。

この舞台でその年の池袋演劇祭で豊島区長賞を受賞した。そして、翌年、東京芸術劇場小ホールでの再演となった。再演で感じたことは、舞台空間は広くなった分だけ、動きにも散漫な印象をうけたということである。初演のときの迫力には届かないものになっていた。俳優たちの演技にも懸命さが希薄というより、余裕のようなものを感じてしまったのだ。これは、あくまで個人的な感想で、決して劇団や俳優陣が手を抜いたとかといったものではないことは



自明のこととして断っておく。

もうひとつの例として、再演で「良さ」を感じたのは、劇団息吹の「喜劇 日本牛」である。初演は2003年7月、大阪の森の宮プラネットホールであった。農や食、狂牛病問題など今日的な深刻なテーマを喜劇タッチに仕上げた労作だったが、いくつかの問題点も感じた。そのことは、本誌(VOL113)の劇評でもふれておいた。再演は1年後、三重・桑名市で開かれた「第9回全日本演劇フェスティバルINくわな」での上演だった。初演での空回りのだった人物配置やセットの使い方などの工夫がみられたことや、かぶりものの牛の存在が大きくなり、ドラマに厚みをもたせたことがあった。

演出の木田昌秀と話す機会があったが、彼自身再演にのぞむこととして、「初演でやりきれなかったこと、ないが、岐阜での舞台でも「確かな手ごたえ」を感じることはできた。御浪町ホールは小さな劇場である。間口3間ほどの小さなビルの屋上にある。客席は100人で満員。それだけに観客の反応はきわめて敏感であり、ごまかしがきかないのは当然である。舞台装置は空間にふさわしい工夫がされていて、遠近感なども巧みに表現されている。客席の通路も舞台の一部として活用されることはしばしばある。今回、訪れた驚いたのは、上演時間が1時間半ではあるが、なんと1日3回の公演(午前11時・午後2時半・午後6時)の日が、4日間で9ステージという強行日程であったことだ。

物語は、戦地に出征している父を思う少年・木村ユキオを中心にした家族の日常が描かれている。明るい日常から戦争による暗い日常へと変化していくさまを丹念につきあっ

批評で指摘されたこと、アンケートなどに書かれたこれまで気づかなかったこと、それらをもう一度確かめようという意義はある。初演では時間切れで終わってしまったときは、そのことを頭に置いて一から始めていくことになる。その結果はどうかということがある。役者の方にも、観客の反応とか、環境的に慣れたときに、初演のもっていた素直な新鮮な気持ち表に出てこないこともある。再演は観客とも相互の影響力がでてくるものである。観客の想像力をどれだけ引き出せるか、ということになる」と語ってくれた。

#### ◆新作初演の緊張感

劇団はぐるま「夜空の下に降る花」を岐阜市の御浪町ホールでみた(05年10月8日)。この作品の岐阜空襲をおして戦争のむごさ、悲惨さを訴え、問いかけるたもの。ふるさ

て、素直に表現していく。そのことによって、「戦争とは腹のへるもの」という子どもの実感が哀切な叫びとなっているのである。終戦間際の岐阜の大空襲、逃げまどう人びとの群。そして、戦場における人間性をも喪失させる軍隊のありかたを問いかける。

演出の汲田正子は初演では時間切れになった「課題」があれば、再演ではどのように克服したのだろうか、というような思いで舞台を観た。湯田の銀河ホールと御浪町ホールの違いを意識しての演出はたしかにされていたと思われる。それは、ことばを正確に伝えていくこと、計算された動きと人物配置、通路や客席を使った反応など、小さな空間であるからこそ大切にされるべきものとして考慮されていたと感じたからである。ユキオ少年を演じた糸永しのぶは子役のできる貴重な存在となっ

と岐阜に思いをこめた作者いずみ凜の新作。演出は汲田正子。

初演はつい先月(9月4日)の岩手県湯田町の銀河ホール。岐阜公演のパンフに作者は「銀河をこえて、岐阜」という一文を寄せている。そのなかで「初めての劇場で、限られた時間内で仕込み、新作の初日を迎えるのだ。仕込み始めてからずっと緊張感がみなぎっている。通し稽古を観にいけなかつたわたしは、まだ舞台の仕上がりを観ていない。どんな舞台になっているのだろうか、そして、果たして受け入れられるのか」と率直な気持ちをのべている。初演の幕開けの不安な気持ち、緊張感が伝わってくる。そして「銀河ホールでの初日は無事に終わり、満員の観客席の集中した息遣いに確かな手ごたえを感じた」という。残念なことだが銀河ホールの初演は観ていないので、ここでは再演との比較はでき

いる。今回の熱演もみごとであった。

#### ◆再演からの個人的功績

劇団銅鑼「流星ワゴン」の初演は昨年の2月であった。それから1年もたたないうちに再演となったのは、それだけ大きな期待があったからだろうと思われる。劇場も銅鑼アトリエ(東京・板橋区中台)から、池袋の東京芸術劇場小ホールに移しての公演となった。

「サイテーの現実にごんざりしたら、もう一度、一緒に旅に出ませんか?」不思議なワゴン車に乗って、あなたの大切な場所へ……というキャッチフレーズにあるように、タイムスリップという演劇的手法を巧みにいかしたファンタジードラマに仕上がったのが人気を得たのであろう。重松清の原作(講談社刊「流星ワゴン」を、「リアリステイックな会話劇の名手」(三重竜太郎の評価)

である青木豪（ダリグ）が脚色、新進気鋭の演出家として注目をあつめる磯村純（青年座）の演出である。この異色の顔あわせを実現させたのは制作の平野真弓であった。彼女は「青木さんが重松ファンだったから実現した」と、喜びを語っていた。



演出の磯村純は「初演の台本から直したせりふはほとんどない。変えたのは芝居だけ」と語ってくれた。具体的にはどうのこうのとはいわなかったが、空間が広くなった分だけ動きが多くなり、スピード感を与えたかったのではと思ったりした。銅鑼スタジオでは舞台ぎりぎりセットが、東京芸術劇場ではかなり余裕があるため、客席からみると全体を俯瞰することが容易であった。ドラマの流れや人物配置、出入りなどもよくつかむことができて、安心してみることができた。しかし、逆にハンドルをとられて車が空中で消えるシーンなどは、銅鑼スタジオでの緊迫感は薄くなった感じがした。それは、すでに初演をみて展開を知っていたからくる認識の差ともいえるかもしれない。

さて、初演をみたときの感想は本誌（VOL118）にもふれている

が、なかなかの出来栄であった。そのなかで運転手の橋本義明を演じた三田直門について「これまでになく老け役に挑戦、新たな一面をみせていた」と書いたが、「老け役」というのは、銅鑼スタジオの照明や客席の関係で受け取った印象からきた誤りであった。実は33歳で交通事故を引き起こし死去した幽霊が5年後に出てきたという設定であった。役者の実年齢に近く決して「老け役」ではなかったのだ。こうしたことも再演をみて確認することができた。三田本人からは「評価してもらってうれしかった」といわれたが、おもしろい思いをした。再演で充実した演技をみせていた。足をひきずる役の困難さを聞いたところ、「本当に足の骨を骨折した」というから笑えない話であった。再演の功績もこんなところにあるのかも知れないと個人的に感じた次第である。

戯曲

## 夜空の下に降る花は

いずみ 凜

キムラユキオ —— アジアの少年  
 キムラヤスヒサ (ユキオのおとうさん)  
 キムラヨネ (ユキオのおばあちゃん)  
 キムラミツ (ユキオのおかあさん)  
 キムラケイコ (ユキオのおねえちゃん)  
 キムラヒサシ (ユキオのおとうと)  
 コウちゃん (近所のおにいちゃん)  
 ケイスケ (親戚のおじさん)  
 カツタ

片足をひきずりながら、こちらへ走って逃げてくるアジアの少年の姿がスローモーションで浮かぶ。  
 「逃がすな」「かまわん、撃て！」怒声が飛び交う。

少年が後ろを振り向くと同時に銃声。銃を持って何かを叫んでいる日本兵キムラヤスヒサの姿。しかし、その声は

聞こえない。  
 弾丸が少年を貫いたかどうかはわからない。ただ、ゆっくりとたおれこむ少年を闇が包みこむ。  
 爆撃機の飛行する音が近づく中、キムラヤスヒサもまた闇に消えていく。  
 暗闇の中、頭上をつぎつぎと飛ぶ爆撃機の音だけが響く。そこに、女のうめき声が混じりだす。それは命をかけた行為に伴う苦痛の叫びだ。産声がほとばしる。爆撃機が飛ぶ音は消え、赤ん坊の泣き声だけが高らかに響く。  
 赤ん坊を抱いて座っている母キムラミツがうかぶ。おばあちゃんキムラヨネが出てくる。

ヨネ ほんと、近所でも鼻が高いわ。ミツさん、ようがんばったねえ。ほんでこ

そほんとうの愛国婦人や。しかも男の子やでねえ。立派なもんやわ。町内会長さんも誉めとらつせに。「ひとりでもたんと少国民を育てることが今はお国の急務やで。ミツさん、よう産んでくれた」って。「産めよ増やせよ」やもんね。女も赤ん坊もみんななりっぱな戦力やで。ヤスヒサがあんなひよろひよろしとるもんで、お国のお役にちつとも立てんと、肩身の狭い恥ずかしい思いをしとったけど、こんでやつとお国の為に働けるって思つたら、今度また男の子やもん。ほんとにありがたいこっちゃ。(ミツの手から赤ん坊を抱きあげる)

ミツ ……はあ…  
 ヨネ ええの、ええの。ミツさん、わかつとるよ、わかつとる。

赤ん坊の姉キムラケイコとその弟キムラユキオが出てくる。キムラユキオはアジアの少年をやつていた役者がやる。ケイコは母のかたわらに座る。

ユキオ ほんとやね、おかあちゃんは立派な「銃後の母」やね。

ヨネ (笑いながら) 何、この子、おとなみたいな口きいて。ユキオ、意味わかつて使つてるの？

ユキオ わかつてるよ。あたり前や！

ヨネ ほお、なら「銃後」つて何やね？

ユキオ おとうちゃんたあ兵隊さんは戦場におんさる。ほくんたはこゝ、鉄砲持った兵隊さんたああつと後ろの方、戦場やないところおるやろ？ それをジユウゴつて言うんや。銃の後ろつて書いて「ジユウゴ」。

ヨネ ほお、そつかね。(まるではじめて知つたように)

ユキオ (ちよつと不安になり) おねえちゃん、あつとるやろ？

ケイコ うん。

ユキオ (ほつとしてさらに得意になり)

腹へつたんやろか？

ミツ ああ、わたしのおっぱいがあんまり出んもんで…

ヨネ そんなこと気にやまんと、な、ミツさん。ほら、しょうがないわ、食べるもんも食べとらんやで。心配せんでも、おもゆも缶詰の乳もあるし。

ミツ (うなずく) おもゆ、やつてきます。(ヒサシを連れて去る)

コウちゃんの声 こんにちはー！ おじやまします。

ユキオ あ、コウちゃんや！

近所の学生コウちゃんが、手に小さな袋を持って入ってくる。

コウちゃん 元気によう泣いとるなあ。(ヨネに袋をさしだし) これ、うちで少し手に入つたて、おふくろが持つてけつて。

ヨネ (ミツにヒサシを渡すと、さしだされたものを受け取つて) 何やろ。(と中をのぞく) あ…、ちよつと、これ、お砂糖？

コウちゃん (うなづく)

もちろん心は兵隊さんとひとつ、いつやつて一緒や。(むねをはつて) それがほくんた銃後の務めなんや！

ヨネ ほん、勇ましいねえ。

ユキオ お国を守るために、こうやつて赤ちゃん産んだおかあちゃんは立派な銃後の母、おばあちゃんは銃後のばば！

ヨネ ユキオ！ (赤ん坊が泣き出す) ああ、ヒサシ、あんたに言つたんやないよ。ユキオ、ヒサシ、泣いたらあかん、ニッポン男児やろ、大和魂や。

ヨネ よしよし、ヒサシ、おとうちゃんも今、戦地でがんばつとるんやで、おまえも元気でがんばらんと、ね。(あやしなながら) どうしとるやろうねえ、ヤスヒサは。ヒサシの顔、見たいやろうにねえ。抱つこしたいやろうに…。ほんでも、ヒサシ、心配せんでもええでね。おかあさんもおるし、おばあちゃんもおる。

ユキオ (赤ん坊に向かつて) おにいちゃんもおるし！ おにいちゃん、ええ響きやなあ、へへ、おにいちゃんか…。(ケイコがじつと見ているのに気づき、あわててつめたす) あ、おねえちゃんも

ユキオとケイコの顔が輝いて、砂糖のそばに、つかかけよる。

ヨネ まあ、こんな貴重なもん、よう手に入れんさつたなあ。

コウちゃん こんだけばかやで、ヒサシくんが産まれたお祝いつて言うのと大げさやけど。

ヨネ 何いつとるの、甘いもんなんて今は手に入らんやで。ありがとつねえ、コウちゃん、何よりやわ。

ユキオとケイコ、ヨネのそばでうろろししながら心待ちにしている。

ヨネ (ユキオとケイコに) これはヒサシのお祝い。

ケイコ・ユキオ えー！！

ヨネ あとで、あとで。(コウちゃんに) まあ、おかあさんによつとつていてね。

コウちゃん はい。

ヨネ (奥へいきながら) ミツさん、お砂糖いただいたよ、砂糖！ 缶詰の乳がなくなつたときのためにとつとこか、ねえ。

おるよ。

ヨネ (笑つて) ユキオは念願やつたもんなあ。

ユキオ うん、ほくもどうとうおにいちゃんや。(ヒサシを覗き込んで、手にさわる) ちつちやい手やなあ。あ、ほれ、ぎゅーつて、ほくの指、握つとる。おにいちゃんがいろんなこと、いっばいおしえたるでな。はよ大きなつて、一緒に遊ぼうな。

赤ん坊がまた泣き出す。

ヨネ あれあれ。

ユキオ しゃべれんもんで、泣き声で返事したんやな、ヒサシ。

ヨネ ほうかほうか。うん、今のうち思いつきり泣いとくやわ。大きなつて泣かんでもええようにね。おお、泣け、泣け。

赤ん坊の泣き声がさらに高まる。

ユキオ あーあ、おばあちゃんがそんなこというで。

ヨネ (笑つて) よしよし、ん？ あ、お

がつかかりするケイコとユキオ。

コウちゃん ユキオ、ええもん、やろか。

ユキオ ええもんつて何？

コウちゃん (ボケツトから小さなガラスのかけらのようなものを出す) ほれ。

ユキオ 何、それ？ ガラス？

コウちゃん ガラスみたいに見えるけど、普通のガラスやないぞ。(少し離れたところから見ているケイコに) ケイコちゃんも来てみい。これをなあ、こうするんや。(ちらりとおとなたちの去つたほうに目をやり、すばやく柱にそのかけらをこすり付けて、柱をさし) こゝ、匂いかいでみ。

ケイコ あ。

ユキオ ええ匂い。

ケイコ 甘い匂いがする。

コウちゃん どうや、ふしぎやろ。

ユキオ うん、ふしぎやなあ。

ケイコ コウちゃん、これ何？

コウちゃん 飛行機の風防ガラスのかけらや。

ケイコ 風防ガラスつて、兵隊さんがのつ



とるところのガラス？

コウちゃん そうや。

ユキオ そんなもん、なんでもつとるの？

コウちゃん 今、各務原の飛行機工場に行つとるんや、おれ。

ユキオ なんだ？ 学校は？

ケイコ (ユキオに) 学生さんもみんな戦争のために軍需工場に働きにいくことになつたんやて。

ユキオ ほん。各務原の飛行機工場やつたら、飛行場も見える？ 飛行機、さわれるの？

コウちゃん そら、さわれるわ。飛行機、おれんたがつくつとるんやもん。

ユキオ すげえ！ ええなあ、飛行機にさわられるなんて。どんな飛行機つくつとるの？

コウちゃん 飛燕と虜龍や。

ユキオ 飛燕と虜龍か。ああ、ほくもさわつてみたいなあ。コウちゃん、乗つたことある？

コウちゃん 乗つたことはないわ。外側をつくつとるだけやもん。ほん。

コウちゃん、ふたりにひとつずつかけ

らを渡す。

ケイコ くれるの？

コウちゃん うん。でも、あんまりやりすぎたらあかんぞ。柱に傷つくで。こつそりな。

ユキオ (にっこりと) うん、こつそりやる。

コウちゃん 砂糖、あんだけしかないで、その代わりや。匂いだけでもな。

ユキオ うん、ありがどう。

ケイコ (庭のほうを見て) あ、ホタル？

コウちゃん (庭のほうを見て) あ、ほんとかや、ホタルや。

ケイコ ホタルなんて、どっから飛んできたんやろつ。

ユキオ あ、(庭におりて、ホタルを追いかけていつてしまふ)

コウちゃん 弥八のお地藏さんで売つとるのが逃げてきたんかなあ。きれいやなあ。ケイコ うん、そうやねえ。

しばし黙つてホタルを見るふたり。  
ケイコ、ホタルを見ているコウちゃんを見る。

コウちゃん ほんなら、おれ。

ケイコ うん。

女関へと向かうコウちゃん。

ケイコ、コウちゃんの後について見送りに行く。

ケイコ コウちゃんも…

コウちゃん ン？ (ケイコのほうを振り返る)

ケイコ …、ううん。

コウちゃん (庭に向かつて) ほんならな、ユキオ。

ユキオの声 うん、ありがどう、コウちゃん。

コウちゃんとケイコ、女関へと去る。

ユキオが庭からもどると、やがてヒサシの泣き声が聞こえる。

ユキオ あ、またヒサシが泣いとる。

(観客に向かつて) 名前をつけるとき、ヒサシはどうやろつていつたのは、ほくなんや。おとうちゃんがヤスヒサつて名前やで、そのヒサをとつてヒサシ。

つまり、ほくはヒサシの名付け親なんや。ほくの初めての弟ヒサシは、ほくが小学四年生のときに生まれました。あ、今は小学校やなくて、国民学校つていつとるけど。おとうちゃんは戦争に行つとります。お国の為に兵隊さんになつて闘つとるんです。やで、まだヒサシに会つたことないんや。おとうちゃんの名前を取つてヒサシはどうやろつてほくがいつたのも、ほんでなんです。おとうちゃん、どうしとるやろなあ。ヒサシにはよ会えろとええなあ。(はつとして) あかん、あかん。日本男児たるもの、国家の大事にそんなこと言つとつたらあかん。おとうちゃんはほくんたのために、みんなの為に闘つとるんやで。恐れ多くも天皇陛下の為に、お国の為に、アジアの人たちの為に、(だんだん得意になって) 大東亜共栄圏の為に、正義の為に！

ユキオ ニッポンはねえ、鬼畜米英にいじめられとるアジアの人を…、ああ、鬼畜米英っていうのは、鬼みたいなアメリカやイギリスのこと。その鬼畜米英にいじめられとるアジアの人んたを助ける為に、ニッポンはこの戦争をはじめたんや。アジアの解放の為に、大東亜共栄圏をつくるんやと。すこいやろ、えらいやろ、正義の為に戦つとるんやで！

腹が減るのはちよつとつらいけどな。(まわりを見て、こつそり) ここだけの話やけど、どんだだけ正義の為やいつても、腹が減るのだけはがまんできんわ。…戦争が始まったばつかんときは、ほくも、まだ白いごはん食べとつたんやよ。それが、だんだん麦飯とか、アワめしとか、ヒエめしになつてつて、とうとう赤い高粱(コーリヤン)飯になつて、どんだん米の割合が減つてつたんや。そのうち、大根めしになつて、雑炊になつて、水の量がどんだん増えてつて、米の量がどんだん減つてつて、今じゃもうしゃびしゃび。この頃じゃ米なんてめつたに食べれんやよ。芋やかぼちゃばつか。それもほくほくしたうまいやつやないんやで、こじこじのやつ。食べ物「配給」つていつて、それぞれの家が決められた分だけしかもらえんことになつとるんや。食べ物だけやないよ。炭やマッチやろうそくや石鹸も、ぜんぶ配給。戦争でみんな兵隊さんに行つてまつたやろ。働く人がおらんで、あれもこれも足らへん。物があらへんで、買いたくても買ええへん。だつて、お

店に行っても、何にもないんやで。うちは履き物屋やけど、おとうちゃんもおらへんし、品物も入ってこようへんで、お店もやってけん。ほくはまんだほろほろのくつはいとるけど、しかたないでみんなたいていわらぎうりはいとる。配給なんか、そうたんとあるわけやないで、おなかいっぱい食べれることなんてあらへん。いっつもべんべんや。

この頃は代用食いって、くろいうどんとか、へんなもちとか、なんやわけわからんもんで配給されとる。イモのつるでも、かほちの葉っぱでも、豆かすでも、へんな代用食でも、まずかろうがなんやろうが食べれるもんはなんやつたて食べるよ。その辺に生えとる草まで食べるとな。ほんとやよ。みんな学校帰りに摘んできて、「こはんにいれるんや。ほんでも、腹べこやでね。」(威勢よく)「せいたくは敵だ！」ほしがりません、勝つまでは！」っていてもねえ…。腹が減るのだけはどうしようもない、がまんできんもん。こっちは育ち盛りの食べ盛りやでね。ああ、腹へった…。(座りこむが、あわてて立ち上がり)

ヨネと一緒にバケツの土を外に運んで空にして持ってくる。

ヨネ ほつばつええんやないの？

コウちゃん まんだ、こんでは全員入れんでしょう。

ヨネ そうやねえ、ヒサシ入ると、五人やもんねえ。小さなつて入っても無理やるか。

ユキオ (のぞきこんで、5人を見回して) 無理やねえ。

ミツ もう一回りは掘らんと。ケイコ、替わるわ。(とバケツとスコップを交換する)

ヨネ (コウちゃんに) 休みの日にすまんなも。コウちゃんが来てくれたで助かるわ。

ミツ ほんと。わたしらだけやったら、とてもやないけど。

コウちゃん 町内のもんが手伝うのは当たり前やて。おれ、おじさんに頼まれとるし。

ユキオ ほんとに岐阜もやられるんかなあ。

ヨネ どうやろねえ。

あかんあかん！ 正義の為や！ おとうちゃんも兵隊さんも、みんながんばつとるんやで。

(明るく元氣よく) 腹はへつてもワレラ少国民！ 疑うことを知らない純粋で素直なほくは、迷いもなければ曇りもない、兵隊さんに憧れるこくこくあつうの軍国少年やつた！

「朕思フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト」と、直立不動で教育勅語を唱え出すユキオ。ユキオのむこうで、泣いているヒサシをあやすミツとヨネがいる。

ヨネ (速くを見る) …

軍靴、爆音など、戦争特有の音が入りこんでくる。暗くなつていく。

ユキオの教育勅語が闇の中に響く。それに重なつて、ヤスヒサの唱える軍人勅諭。「一つ、軍人は忠節を尽くすを本分とすべし。一つ、軍人は礼儀を正しくすべし。一つ、軍人は武勇を尊ぶべし。一つ、軍人は信義を重んずべし。一つ、軍人は質素を旨とすべし。」ユキオの教

ミツ こなんだらこなんだでええけど、備えだけはしとかなとね。

ユキオ 空襲空襲って言うけど、うちなんか爆撃したつてしようがないやろ。B29は戦闘機つくつとるような工場を爆撃してくるんやつて、先生がいわつせだよ。

ケイコ 工場…(コウちゃんのほうを見る) コウちゃん うん、各務原の工場は確かにねらわれとる。今までも何回かやられたとるでな。ほんでもな、この間東京であつた大空襲は工場だけやなかつたそつやぞ、普通の家も何もかも爆撃受けたつて。

ユキオ 焼夷弾なんかなんや。防空訓練ちゃんとかつとるし、みんな水かけて消せばいいんやろ。必勝の信念を持つて守ること、防空精神はすなわち日本精神でもある。」

コウちゃん はは、さすがユキオやな。(少し声を落として) ほんでもな、焼夷弾はそう簡単には消えんらしいぞ。東京はどえらいこと燃えて、今、焼け野原やそつや。

ユキオ 火、消せんかったの。

ヨネ 消せるなんてもんやなかつたげな

育勅語が聞こえなくなつていく。

兵隊姿のヤスヒサとカツタが銃を持って現れると、銃を構える。銃口が客席に向けられる。

爆撃機が空を飛ばす音が聞こえる中、暗くなつていく。明るくなると、ユキオ、コウちゃん、ヨネ、ミツ、ケイコが出てきて、並ぶ。

ユキオ 一つ、私達は「御国を守る戦士」です。命を投げ出して持ち場を守ります。ケイコ 一つ、私達は必勝の信念を持って、最後まで戦い抜きます。

コウちゃん 一つ、私達は準備を完全に、自信のつくまで訓練を積みまます。

ミツ 一つ、私達は命令に服従し、勝手な行動を慎みます。

ヨネ 一つ、私達は互いに援け合い、力を協せて、防空に当ります。(内務省「時局防空必携」昭和十八年改訂版より)

コウちゃんは、畳を上げて、スコップで床下の土を掘つてはバケツに入れた。ケイコも一緒に土を掘っている。ミツはヒサシをユキオにおおわせると、

よ。田中さんとこ、空襲に遭つた親戚が東京から疎開してござつたそつやけど、そりやあおそがかつた。木造やでなあ、そこら中よう燃えて…。

コウちゃん 日本の家は木と紙でできると、よなもんやでなあ。あちこち燃えると、上昇気流が起こつて、炎が空まであがるんや。普通の火やないぞ。千度にも二千度にもなつて、あつという間に影も形もなくなつてまう。

ヨネ 家も何もかもみーんな焼けてまうて、なんにもないもんで、速くまでずーつと見渡せるんやと。

ユキオ みんな…。東京、全部？

コウちゃん 岐阜もいつくるかわからんぞ。うちもめぼしいもんだけでもつて、荷物、田舎の親戚に疎開させたで。こつちが空襲で燃えてまうても、親戚に荷物が残つとれば、なんとかなるやろつてつて。

ミツ そら、荷物だけでも疎開させといたほうがええかも知れんねえ。(ヨネに) うちも考えんといかんですわえ。

ヨネ そつややねえ。東京じゃ大勢死んだそつやで。おそがいねえ。

一同

ヨネ やつぱり防空壕はちゃんとしたもん、つくつとかんとあかん。さあ、まあちよつとがんばつてやろまいか。

みんな、また防空壕作りに糧を出す。ユキオはおぶっているのが重くなつたらしく、おおい紐を緩めて、ミツにヒサシをおろしてもらつて、すみに寝かせる。

ユキオ (ヒサシの頭を見ながら) なかなか治らんねえ。

ミツ 何が?

ユキオ ヒサシの頭のおでき。(指に自分のつばをつけては、おできにつける)

ミツ ああ…

ヨネ 栄養が足りんでや。ここんとこ、毎話の乳も手に入らんしねえ。

ミツ …

ヨネ (ヒサシをのぞきこむ) あ、あくびしてる。よしよし、こりや、背が伸びるわ。

ユキオ あくびしたら、背え、のびるの? ヨネ そつやよ。

ユキオ ほんなら、ほくも。あーあ(と、

あくびをする)

ケイコ 赤ん坊だけやわ。いつまでもあぐびのたんびに背が伸びるんやつたら、ユキオなんか今頃大男やわ。

ユキオ そつか、なんかおかしいとは思つたんやけど。

みんな、くすつと笑っている。

ミツ おかあさん、わたし、ケイスケおじさんとこに相談に行つてきます。

ヨネ ああ、ケイスケさんとこならお百姓やで、少しやつたらなんかわけてまえるかもしれんなあ。

ミツ 荷物も預かつてまえるかもしれんし。

ミツ、ヒサシを抱いて立ちあがる。

ミツ ユキオ!

ユキオ ハーイ。

ユキオは防空頭巾に水筒、リュックを肩にかけながら出てくる。

ヨネ、ケイコ、コウちゃん、いなくなる。

と、場面は数日後。

ミツ (ユキオに) 防空頭巾持った? いつ何が起きるかわからんやで。道歩いとるときに、もし飛行機の音が聞こえたら、草ん中でも木の陰でもええで、すぐにかくれるんやよ。このごろは空襲警報やないときでも、いきなり雲ん中から出てきて、ダダダダター! つて撃つてくることあるそうやで。

ユキオ わかつてるて。機銃掃射やろ。学校の防空演習で習つたもん。

ミツ、ユキオの服やかばんの名札やらを確認している。

ユキオ でも、この辺にはまず来んやろつて。

ミツ そんなこと、わからへん。いろんなとこで死んだ人がおるんやで。

ユキオ わかつた。こうやって(手で)目と耳を押さえるんやろ…

ミツ そつやよ。さ、行こ。(歩き出す)と、バスがバス停に止まる音がする。

バスに乗るふたり。バスに揺られながら。

ミツ ユキオ、久しぶりやろ。ケイスケお

じちゃんに、ちゃんとこ挨拶するんやよ。

ユキオ だいじょうぶ、まかせといて。

ミツ おお、頼もし!

ユキオ へへへ

バスが止まり、ミツとユキオがおりと、バスの走り去る音。

田舎の親戚へと歩きだすふたり。

田舎の道を歩き続ける。

ユキオ ……ねえ、おかあちゃん、まんだけ?

ミツ まあちよつと辛抱しやあ。

歩くふたり。

ユキオ おかあちゃん、まんだけ着かんのか?

ミツ まあちよつとやねえ。

歩くふたり。

ユキオ おかあちゃん、

ミツ ほんとにもうすぐやで。

ユキオ …お腹へつた。

ミツ (笑つ) そつやね、もつだいおん歩いたもんねえ。しょうがない、とつておきの…(もつたいぶつて何かを出そうとする)

ユキオ 何、何が?

ミツ (千レイモの切れ端を一つだして、渡す) はい!

ユキオ やつたあ、千レイモや!

ミツ すくかんだらいかんよ。できるだけ長いこと、なめとくんやよ。

ユキオ うん! (ふと氣ついて) あ、おかあちゃんは何?

ミツ おかあちゃんはお腹へつとらんもん。

ユキオ …(しほし、千レイモを見つめる)

ミツ (笑顔で) ええで、食べやあ。

ユキオ うん。(口に入れる)

歩き続けるふたり。

ユキオ 「お腹へつとらんもん」おかあちゃんはいつつもそういいます。自分はおんまり食べとらんのに、「心配せんでええよ。おかあちゃんはお腹へつとらん

もん」少し笑つてそういつては、ほく

やおねえちゃんにくれるんや。ほんなもんで、おかあちゃんはおっぱいがちつとも出んようになりました。ヒサシは栄養がとれんで頭がおできだらけになつてまつて。早く治るようにつて、つばつけたるんやけど、なかなかおらへん。

あたりをぐるりと歩くと、そこはすでにケイスケおじちゃんのうちである。

ミツ こめんください。こんにちは。ミツです。こんにちは! (奥へ声をかける)

奥から年配のケイスケが出てくる。

ミツ おじさん、ミツです。ごぶさたしとります。

ケイスケ ああ、ミツさか…

ユキオはミツの背後に隠れるようにしている。

ミツ ユキオ、ごあいさつせな。

ユキオ …



ミツ あれ、さつき頼もしいこと言ひつたのは誰やね？ ほれ。

ユキオ ……(少し顔を出して、のぞき小さく会釈する)

ミツ もつ、ユキオ。何照れとるの。前に来たときに遊んでまっただでしよう？

ユキオ (観客に向けて) 快活で元氣なほくは、実は単なる内弁慶やった。

ミツ すんません、ほんとに。あ、この子、この間生まれだヒサシです。ヒサシ、ケイスケおじちゃんやよ。こんにちはつて。

ケイスケ (ヒサシを見て) そうか、生まれたんか、赤ん坊…。

ミツ はい、おかげさんで。そちらもみなさん、おかわり、ないですか。

ケイスケ きょうはわざわざ何や、こんなところまで？ 子どもあたりも連れて。食いもんか。

ミツ あ、はあ。ケイスケおじさんに相談に乗ってもらえんかと思ひまして。

ケイスケ せっかく来てまっつても、うちもぎりぎりやでなあ。人様のせわまでするような余裕はないんやわ。

ミツ おじさん…

ケイスケ ヤスヒサもおらんし、赤ん坊生まれ、あんたんとこも大変やろうけど、どうしたんこともでさんのや。うちだつてあんなだけの家族が食べてかんならん。これからどうなるかもわからんしなあ。

ミツ わかつとります、おじさん、こんなときやで、どこもたいへんやつてことは充分わかつとります。わかつとるで、今まで、なんとか頼らんようにつてやつてきたんです。ほんでも…。うちらおとなはまんだなんとかなるんです。やけど…

ケイスケ ……

ミツ 生まれたときはよう泣いたこの子が、このころはあんまり泣かんのです。そら、空襲警報のときに泣かれると、何や近所に申し訳ないで、ありがたいといやあ、ありがたいんやけど…。泣く元氣もないんやろかと思うと…。情けないんですが、すつかりおつぱいも出んようになりまして…薄めたおもゆ飲ましたつてもたいした栄養にならんし…、お願いします、おじさん、なんとかならんでしょうか。少しでもわけまえるもんがあつたら、お願いでき

んですか。(背負った袋から運動靴を出しながら) あの、これ、うちの商売もんやけど、売らずにとつたつたんです。よかつたら使つて下さい。それから、これ、嫁入りのときにもつてきた着物なんやけど、どなたか着てまえたらと思つて。こんなもんしか持つてこれんですが…

ケイスケ ……

ユキオ (ケイスケをじつと見ている) ……

ヒサシがぐずりだす。あやすミツ。それを見てケイスケ。

ケイスケ (ユキオを見て) ヤスヒサとよう似てきたなあ。(ふたたびヒサシをみて、ミツに) なんて名前やった？

ミツ ヒサシです。

ケイスケ ヒサシか。(ヒサシを抱き上げる) まんだヤスヒサにも…、お父ちゃんにもあつとらんのやろ。(ヒサシのおできだらけの頭を見て) …。(ミツにヒサシを返すと、無愛想に) ちよつと待つとつて。

ミツ はい。

ユキオ ケイスケおじちゃん、前よりしほんだね。あんなにシワシワやなかつたになあ。

ミツ たいへんなんやて。みんなたいへんなんやで。

ユキオ 人つてしほむんやなあ、大きなばつかやないんやねえ。

ミツ (とがめて) ユキオ。

ユキオ ……なんぞ分けてまえるやろか。

ミツ ええで、黙つとりやあ。

ユキオ うん…。

ケイスケ、でてくる。

ケイスケ ヤギの乳なら、ちよつとあるで、その子に…。ちよつとあがつて、まっとりんさい。

ミツ ヤギの乳…。(頭を下げる)

ケイスケ (奥へとむかいかけて、ふと) ヤスヒサから便りはあるかね？

ミツ いえ、もつずいぶん…

ケイスケ どこで戦つとるんやろなあ、中国やろか、南方かねえ。

ミツ ……

ケイスケ、そのあとをミツ、ユキオがついて去る。

だれもない舞台、暗くなつていく。夜である。虫が鳴いている。

めがねをかけ、銃を持ったヤスヒサ、周囲の様子をうかがいながら、舞台を横切り、やがて、また来た方へと戻る。ここは戦場、東南アジアの小きな島である。時折ホタルがあちこちでふわつとともる夜。不寝番に立つヤスヒサ、どこか及び腰である。力が支配する戦場の価値観では、下位に属する男である。黒い影が走り出て物陰にうすくまる。

ヤスヒサ 誰や！

氣配に銃を構えるヤスヒサ。影は別の場所に移動する。ヤスヒサ、慌てふためき後ずさりながら、銃をかまへ、

ヤスヒサ だ、誰や！ 出てこい、出てくるんや！ (悲鳴に近い)

カツタの声 おつさん、おれだよ、おれ。

ヤスヒサよりも年は若い古参兵の

ツタ、布袋を担いで出てくる。

ヤスヒサ ああ、カツタ上等兵殿。(ほつとす)

カツタ 水、

ヤスヒサ あ…

カツタ 水くれ！

カツタ、ヤスヒサの水筒をひつたくり水を飲む。肩で息をしている。呆然とそれを見ているヤスヒサ。

ヤスヒサ (はつとして) こ、ご苦労様です…

カツタ、袋から手を出すと、かぶりつく。水を飲み、一息つく。ふとヤスヒサを見ると、黙つてひとつさしです。

ヤスヒサ え…

カツタ 食えよ。

ヤスヒサ しかし…

カツタ いいから。

ヤスヒサ ……

カツタ だいじょうぶだ、上官たちはみんな

な寝てる。びくびくすんな。食えよ。ずつとろくもん食っちゃいねえんだから。緊張しつばなしで、こんなことまともやってたら、からだもちゃやしねえ。おっさん、ちったあ気い抜け。

カッタ 年はくつても、おっさん召集兵だもんな。気は抜けねえか。

ヤスヒサ ……

カッタ 生まれたんだってな、おっさん。

ヤスヒサ え？

カッタ ガキ。

ヤスヒサ あ、はあ。

カッタ ガキの顔みたいんだろ。クソまじ

めだけじゃ生きて帰れんぞ。

ヤスヒサ ……は、はい。

カッタ すわれよ、いいから。

ヤスヒサ あ、はい。(腰を下ろす)

カッタ 生きて帰るんだろ？ 食えるとき

に食う。

ヤスヒサ ……いただきます！ (芋にかぶりつく)

カッタ 生きて帰ったかつたら要領だ。要

領よく立ち回る奴だけが生き残る。

ヤスヒサ はあ、まんだ、そこんこの加

カッタ、すかさず銃をかまえる。虫の声がやみ、ホタルが消える。ヤスヒサも銃をつかむ。やがて。

カッタ 風だ。心配すんな。

ヤスヒサ (ほっとして) カッタ上等兵殿

は銃の腕前がすごいって聞いたります。

カッタ 芸は身を助ける。おかげで、上

官も多少のことは大目に見てくれるつ

てわけだ。たくさん撃つたもんな。上

官たちに文句は言わせねえつてぐらい、

たくさん。

ヤスヒサ (おすおすと) 撃つたつて…、

人を、ですか。

カッタ (笑つて) おっさん、たのむよ、

ここは戦場だぜ。おれたちは人を殺し

に来てんのよ。

ヤスヒサ ……

カッタ けつ、人じゃねえ。あの未開のサ

ルどもだ。

ヤスヒサ ……

カッタ (小さく笑つて) なんだよ、その目は。そんな顔して見せるな、へどがでる。戦場つてのはな、こういふとこ

滅がようわからんもんで。

カッタ おっさんらも気の毒だな。戦争が長引くもんだから招集されちまつて、それも景気よく勝ち進んでたときならまだしも、こんなどうしようもなくならつてからよ。

ヤスヒサ そ、そんなこと上官に聞かれたら。

カッタ だいいょうぶだつて。上官殿は

グーグー高いびきさ。

ヤスヒサ ほんでも…

カッタ よう、びくびくすんなつて、おっ

さん。みつかりやしねえよ。

ヤスヒサ はあ…(それでも不安である)

カッタ みつかつたところで、現地調達は

軍の命令だ。芋のひとつやふたつ、そ

こらの畑から盗んで食つたからつて、

どうつてことないさ。

ヤスヒサ ……

カッタ おっさんも相当やられてるもん

な。いい年してても、まだ新入りだか

らな。初年兵と召集兵はビンタの雨の

中で鍛える、軍隊じゃそういうことにな

つてるんだ。今、殴つてる奴等もみな

殴られてきただから、どこまでいっ

なんだ。殺せば殺すほどえらい。ここまで来ちまつたら最後、殺すしかねえんだよ。殺すか殺されるかさ。あんたもそういう兵隊さんのひとりなんだぜ。遅かれ早かれ、いずれそつうなる、生き延びるつもりならな。

ヤスヒサ ……

カッタ 生きて帰るんだろ？ ガキが待つ

てるんだろ？ せいぜい精進してくれ

よ、おっさん。

ヤスヒサ ……そりや、そうかもしれん。戦

争つちゆうのはそういうもんかも知れ

んけど…。(穏やかに) ニッポンは大東

亜の新秩序をつくるんやなかつたんで

すか。アジアの人を救う為に、アジア

の平和の為にはじめた戦争やなかつた

んですか。兵隊さんは正義の為に命か

けとるんやないんですか。…内地で聞

いとつた話とは大違いや。日本軍は島

の人に歓迎されとるのかと思つたつた

ら、ゲリラが出るで、こうやって毎晩

見張りせんならんつていう。アジアの

平和の為つていつとつたのに、「百人斬

り」なんて言葉も聞いたとるし…、ここ

でだつて、みんな島の人のこと、土人

てもとまらねえ。ま、みんな通る道さ。

おっさん、要領も悪いしな。

ヤスヒサ キ、キムラです。何べんも言

ますが…

カッタ つたく、くそみてえなことだよ、ここは。ああ、早く帰つてえ。帰つて腹いっぱい食いてえ。(闇の向こうに銃口をむける) サルどもの相手はもううんざりだ。

ヤスヒサ サル…

カッタ 土人だよ、土人のことだよ。あの、

わけのわからんことわめいてるサルど

もさ。

ヤスヒサ あ、ああ…

カッタ ふつうの人間のいるところに帰

りてえ。ちゃんとまともな話ができて、

抱きしめるとあつたけえ人間のいると

こによお。こんな、くそ暑い上に、ま

ともなもんも食えねえようなところ！

…。(あたりを見回して) 今夜はいやに

ホタルが多いなあ。戦死した誰かが会

いにきてるのか。

虫が鳴いている。ホタルが光っている。

何かの気配に、びくつとするヤスヒサ。

やいって、ばかにしとる。わしにはほん

んと、わけがわからんです。

カッタ 大東亜の新秩序か。ガキじゃある

まいし、気持ちよく耳に入つてくる言葉、

全部真に受けるなよ。アジアの正義つ

てのはなあ、「八紘一宇」「八紘一宇」つ

てのはなあ、資源が豊かなアジアの土

地をニッポンが手に入れるつてことさ。

土人どもなんざどうでもいいんだ、あ

んなサルどもはな。

ヤスヒサ ……

カッタ (笑い出す) しかし、おっさん、

まさかとは思うけど、そんなことクソ

真面目な顔して上官に聞くなよ。

ヤスヒサ いくらわしでもそんなこと…。

カッタ上等兵殿だから話すんです。上

等兵殿は口も態度も悪いけど、絶対に

初年兵を殴つたりはせん。殴らずにお

るのがどんだけたいへんなことか、他

の人をみとればわしにだつてわかりま

す。

カッタ ……

ヤスヒサ でも、その上等兵殿まで、この

島の人のことになると、そうやって憎々

しげに「サルども」つて言う。なんで

やる。あの人んだあ、何いっとるかはさつぱりわからんけど、よう見とると、何や、むしろとあんまり変わらんような気がするんです。きょうも、子どもが走りまわっていたらずらして親に叱られとつた。叱られて、泣いて、ほんでも、しばらくすると親子そろって笑つとる。ユキオと、うちの子とおんなじや。わしどうちの子がしとると何にも変わらん。そりや、もちろん違うこともあるやろうけど、生活しとるってことはおんなじやもん。あの人んだあも、むしろとおんなじように、笑つたり泣いたりしながら、この島で「生活」して生きとる。何でこんな人たちと殺しあわないかんのか、わしにはようわからんのです。あの人んだはサルとはちがう。どう見たつて人間やもん。

カツタ ……  
ヤスヒサ ……あ、すんません、わし…。  
カツタ 人と思つて殺せるか。  
ヤスヒサ え？

カツタ どつちみぢやなくちやいけねえんだよ、ここまで来ちまつたらな。だつたら心通わせたりすんな。徹底的には

かにして、人間だなんて思わねえことだ。  
ヤスヒサ ……

ホタルが飛んでいる。

カツタ またホタルか…。

ヤスヒサ ……

カツタ 初めて人を殺した晩は震えが止まらなかつた。でも、戦場にいる限り殺しつづけなくちやならねえ。(手を銃のようにして人差し指を伸ばし) パン。ひとり撃つ度に自分の中のまともな神経を一本ずつ切つてくんだ。パン。一本ずつ、確実に。パン、パン、パン、パン、パン！ そうやってだんだん平気になつてく。気がついたら、殺しても震えなくなつてた。

ヤスヒサ ……

カツタ それでも、何かの拍子に切つたはずの神経がふつとつながつちまうことがあるんだ。たまんねえよ、頭おかしくなるかと思うよ。でも、おかしくならない。おかしくなりそうにはなつても、ホントに狂つちまつたりはしないんだ。いつそ狂つちまはずつと楽なのに。

狂えないなら、自分で思い込んで狂うしかない。おれはあいつらを人間だと思つことをやめた。人間じゃない、あいつらはサルだ。人間なんかじゃない。  
ヤスヒサ ……

いつのまにかホタルがあちこちで光つている。

溶暗。

明るくなると、ユキオの家。  
夜である。

ヨネが庭から外を見ている。月に向かつて手を合わせ、心から何か拜んでいる。不安の中、込み上げるものがあるのか。ミツの気配に気づき、あわてて拜むのを終える。

ミツ ……おかあさん？ お星さんに願ひ事ですか。そういえばもうすぐ七夕やもんねえ。

ヨネ (低く) どうしとるやろねえ、あの子。今頃、どこにおるんやろ。

ミツ あの人も、どこぞでこのお月様見とるんですねえ。

ヨネ のんきにお月さんなんて見とれるや

ろうか。(考え直して) いや、あの子のことやで、見とるかも知れんねえ、お月さん。

ミツ (小さく笑う)

ヨネ ……務まるわけないやろつにねえ。向いとらんよ、あの子に軍隊は。

ミツ ……ほんでも、おかあさん、帰つてきますよ。あの人は帰つてきます。

ヨネ (自分に言い聞かせるようにうなずく) そうやね。まだヒサシにもあつとらんのやもん。何があつても帰つてこなね。うちらはただ待つとるしかない。どうすることもできん。拜むだけや。

ミツ ……

ケイコもやつてきて、黙つてふたりの話を聞いている。

ヨネ (外を見る) きょうはよう晴れて星がきれいやわ。梅雨の中休みやねえ。

ミツ そろそろ梅雨も終わらんですかねえ。ケイスケおじさんとこに行く日は何が何でも晴れてもらわんと。

ヨネ そうやなも、ケイスケさんとこに荷物運ばんならんでなあ。荷物預かつてま

えるだけでも、ありがたいこつちや。

ミツ (すまなさそうに) そのまま二日間も畑仕事やなんて、おかあさんにはたいへんやろうけど。

ヨネ 何いっとるの。まだこつち見えても畑仕事ぐらい。

ケイコ わたしががんばるで、あんまりふたりは無理せんといてね。あとで腰いたなつたら、たいへんやで。

ヨネ ええわ、腰いたなつたら、またケイコにさすつてまうで。(ケイコと微笑みあう) ほんでも、その晩はとめてまえるんやろ？ あそこまで通うこと考えたら、とんだけ楽か。

ミツ その晩は夕飯もいただけるそうです。

ケイコ ほんと？

ヨネ 荷物あずかつてまつて、夕飯よばれるんやで、その分、ちゃんと働かな。持つべきものは親戚じゃ。あそこもみんな兵隊にとられて男手言つたらケイスケさだけやでな、人手も足らんのやろつ。せめて畑仕事ぐらい手伝わんとな。

ミツ 最初はいやな顔しんさつたけど、思

い切つて相談してみてもよかつたです。

ヨネ ミツさんもうがんばつてくれたなあ。

ミツ ヒサシにヤギのお乳をもらえろのが、ほんと、ありがたい。

ヨネ 何よりやわ。ヒサシはまだ食べれんで。お乳だけが栄養やもんなあ。

ミツ ケイスケおじさんにお願ひして、畑仕事でも何でも手伝わせてまえるんなら、これからもわたし、行きますで。

ケイコ うん、行こ。

ミツ あの子のお乳だけでも、なんとかせんと。

ヨネ そうやそうや。

空襲警報が鳴る。外から「空襲警報発令！ 空襲警報発令！」の声。

ミツ ケイコ、ラジオ！

ケイコがラジオをつける。

ラジオの声 中部軍管区情報、中部軍管区情報、ただいまB29の編隊が潮の岬を北進中。くりかえします、中部軍管区



情報、中部軍管区情報、ただいまB29の編隊が潮の岬を北進中。

奥で寝ているユキオを起し、ヒサシをつれてくると、たたみをおげるミツ。

ヨネ またや。B29、今夜はどこへ落とすつもりや。ユキオ、ユキオ！

ヨネがユキオに防空頭巾やリユックなどを持たせているが、ユキオはまだ眠い。ケイコは自分で身支度をしている。

ヨネ ユキオ、これ、しゃんとせんかね。ねほけとつたらあかん。空襲警報、空襲警報やて。水筒も首にかけて。ほれ。

ユキオはすべて身につけると、またそのあたりに座り込んで、うとうととしている。みんなは身支度をする、防空壕に入る。

ヨネ ユキオ！  
ユキオ うん。

ミツ (ヒサシを抱いて) ユキオ、何やっ

ケイスケ ほうか、ほらありがてえわ。ほんなら、行こまいか。

ミツ ユキオ、ヒサシのこと、頼んだよ。(哺乳瓶を見せて) これ、ケイスケおじちゃんかヒサシにつてまたヤキのお乳くれたで、飲ませたつて。ええ(いい)？あんなにも、これ(小さな器を見せて) いただいたでね。

ヨネ まあ、来るなりすまんも、ケイスケさ。ユキオ！

ユキオ (おすおすと) おじさん、ありがとう。

ケイスケ なーに、夕飯までの辛抱やで、それまでのつなぎや。

ユキオ おじさん、その川、魚とれる？ケイスケ 長良川か、おう、鮎もおるし、うまい魚がよるとれるわ。

ユキオ ほく、夕飯に魚とつとこか。

ミツ あかん！川は危ないで。

ケイスケ (笑いながら) 魚とるのはなあ、なかなか難しいでな。まあちよつと大きなつてから、おじさんが教えるで。

ミツ 川なんか行くんやないよ。ヒサシもおるんやで。  
ユキオ はい。

とるの、はよ！  
ユキオ はい。(立ち上がった、防空壕に入ろうとする)

遠くに爆撃の音にわかに空が明るくなる。

振りかえるユキオ。

ヨネ どこやろ。

ミツ 名古屋のほうやろか。空が真っ赤やわ。

ユキオ (目がさめる。が、夢見るように) …きれいやなあ。(爆撃の空の方へ誘われるように歩いていく)

ユキオひとり残して。

ユキオ こんなきれいなもん、初めて見た。まるでつかい花火みたいや。はあ、きれいやなあ。

爆音とともに、明かりに照らされたユキオの顔が浮かび上がる。溶暗。

いきなり明るくなると、

ヨネ ほんなら、ユキオ、行つてくるで。ユキオ いつてらっしゃい！

ケイスケとともに、ミツとヨネ、ケイコ、去る。

ユキオ ぼくは、うちの中にある、ふだんは使わんもん、——ええと、火鉢とかタンスとか、それにうちにある一番いい柱時計やろ？ あと、よそ行きの着物や服、そういうもんをケイスケおじさんのところに置かせてまえることになりました。おかあちゃんは自分よそいきの着物を、またケイスケおじさんにあげとりました。お米や野菜、それからヒサシのお乳と交換してまうためです。おかあちゃんの着物はそうやって一枚ずつのうなつていきます。それでもほくはいつとも腹べこでした。

ヒサシの哺乳瓶の横においてある器をのぞく。

ユキオ …またカボチャか。こりこりてうまもないもんなあ。(といいつつ、かは

「これで最後です！」というミツの声とともに、行李を運ぶミツが出てくる。ケイスケが現れ、ミツが奥へと行李を運ぶ。

ミツが入つていつたほうから、ヨネ、ミツがもつてくる。

ケイコがヒサシを抱いてくると、ユキオにおおい紐で負おわせる。

ヨネ ケイスケさ、助かったわなあ。ケイスケ なーに、置いとくだけやで。この辺は田んぼと畑はつかやで、まず空襲も来んやろ。

ヨネ 置いといてまえる思っただけで、心強いでも。

ケイスケ ほんなら、畑のほう、手伝つてまおか。あ、くたびれとるなら、ちよつと一服してまつてもええけど。

ヨネ いや、なんてことあらへん。荷物と一緒にわたしらもここまで馬車の荷台に乗つてきたで、何にも疲れとらへん、なあ。

ミツ へえ、だいじょうぶです。

ケイコ ケイスケおじさん、きょうはうちらみんなやる気満々で来たで。

ちやをつまんで食べる) ああ、うまいうどんが腹一杯くいてえ。天ぶらうどんがええなあ。えびの天ぶら！ ううん、野菜の天ぶらでもなんでもええわ、くいてえなあ、ああ、天ぶら…(こくこつとつばを飲む)、いや、天ぶらはいつとらんでもええわ、揚げ玉だけでも(こくこく)、ううん、油揚げだけでも(こくこく)、ああ、まあ、うどんだけでもええわ、腹一杯くえるんやつたら。(うつとりしながら妄想はさらにふくらむ) ほんで、おやつにカステラひとかけあつたら最高やな。まんじゅう一個、ううん、キャラメル一粒でええわ、あー(うつとりと想像しながら、ため息。と、お腹が鳴る) いかんいかん、食べ物のこと考えとると、余計腹が減つてまう。いかん、何か別のこと考えよ。背中(ヒサシを見る) …あ、そうや、ヒサシ、あくびしよ。あーあ、(大きく伸びをしてあくびをする) ほれ、ヒサシ、一緒にしよまい。あくびすると、背が伸びるんやと。おばあちゃん言つとつたやろ。ヒサシ、なかなか大きならんもんなあ。ええか、あくびするんやぞ。あーあ、あーあ、あー

…(とあくびをしてのびながら、背中のヒサシを見て、途中でやめる)、はくひとりやつても何にもならんわ。(しはしののち、背中のヒサシに向かつて) あそほか。何して遊ぶ? んー(考え込んで)、よし、おにいちゃんがヒサシを戦闘機に乗せたるわ。何がええかなあ。雷電か? 紫電改か? 雷電はちよつとデブつちよやでなあ、あ、屠龍か飛燕にしようか。あれ、コウちゃんがつくつとるんやよ。すごいやろ。…ほんでも、この間ひどい空襲にあつて工場めちやめちやになつてまつたつてせつかくつくつた飛行機もぜんぶだめになつてまつたんやと。ん? コウちゃんか? コウちゃんはだいたいじよぶや。「逃げろー!」つて友達と一緒にどえらい勢いで逃げたもんで、空襲が収まつて帰ろうとしても、ちつともたどりつかへなんだんやと。「よう夢中であんな速くまで逃げたわ」つて言つとつた。ああみえてコウちゃん、身軽やでね。身軽かそうやな、身軽やないとな。やつぱ、ゼロ戦にしよう。うん、ゼロ戦や。よし、行くぞ、ヒサシ。(ヒサシを背中に負

ぶつたまま、ゼロ戦の音を口まねしながら、両手を広げて走りまわる) どうや、ヒサシ。こんなに身軽で小さいけどな、ゼロ戦は5時間やつたつて飛び続けられるんやぞ。すごいやろ? 世界中がびつくりしたんやで。「岐阜上空にB29が現れました。キムラヒサシ上等兵出撃お願いします!」「キムラヒサシ上等兵、了解しました。よし、出撃!」ダダダダダダダ(何度か旋回すると、外へかけて行つてしまふ)

やがて、ユキオ、泣いているヒサシを抱きかかえて入つてくる。

ユキオ なんや、どうしたんや? 堤防登つてつたぐらいで、そんなにびつくりせんでもええやろ。こわかつた? ニッポン男児がそんなことでどうするんや。泣くんやない、しつかりせんか! (ヒサシは相変わらず泣きやまない) きようは元氣によう泣くなあ。このころはあんまり泣かへんで、おばあちゃんが心配しとつたに。あつ…(と何かに気づき、ヒサシのおしりをくくん

とかぐ。くささに顔をしかめる。が、にっこりして) おしっこやで、まだだいいよぶやろ。(ヒサシの頭を見て) おできすこーしよなつたよな気がするなあ。痛い? 痛いの? (指につばをつけては、頭のおできにつけてやる) はよなおるとええな。(ふと気づいて) ああ、おなかすいたんか。そうか、そうやね、それはいい考えやわ。おにいちゃんもヒサシに賛成や! よし、おやつの間や。(と、自分のかほちやの器を見るが空っぽである) あ…。(山羊のお乳の入つた哺乳びんをながめつつ) 山羊のお乳がよかつたねえ、ヒサシ。ねえ、山羊のお乳つて、おいしいの? 甘いんやろか。(ヒサシの口に哺乳びんを含ませるが、泣き止まない) どうしたの。山羊のお乳、飲まへんの? 出てこんのかなあ。

哺乳びんを自分でくわえて、一口吸つてみる。ユキオ、いったん止めるが、口の中に広がるミルクの味がユキオの抑制を押し流す。ふたたび吸い口をくわえるともう止まらない。悪かれたよ

うに哺乳びんを吸う。やがて、はつとして哺乳びんを口から離すユキオ、呆然としている。

ユキオ …

やがてじつと哺乳びんを見つめるユキオ。ヒサシを見る。

ユキオ …(ごめん…)

自分の犯してしまつたこととうちのめされるユキオ。

ユキオ …ほくはヒサシの大切なミルクを飲んどつた。いつもいつもおなかがべこべこのほくは、ヤギのお乳がおいしそうで、うらやましくて…。おかあちゃんのおっぱいが出んもんで、栄養が足りんと、ヒサシの頭にはおできがいっぱいできとつて、それがかわいそうでしかたないとおもつとるのに…。ほくはヒサシの名付け親で、ほくには初めての弟で、ヒサシがかわいてかわいてしょうがないのに、そんなほくは…。

ユキオ、ヒサシを抱きかかえる。

ユキオ ごめんな。(抱きしめる)ごめんな、ヒサシ…。

ユキオ、ヒサシに残りのミルクを飲ませる。

やがてミツがやつてくると、「ただいまおるすばん(くろろさん)とはほえんで、ヒサシをユキオから抱き上げて、さる。

ユキオ …夕飯は白いごはんでした。しゃびしゃびの雑炊やない、いろんなものの混ぜとらん、白いごはん。きゅうりのつけもと菜っ葉の少し入つた味噌汁、それとナスの炊いたやつが少し。そのころのほくはあんたにはそれだけだものすごいごちそうでした。おばあちゃんには白いごはんのはいつとるお茶碗に「ありがたいこつちや」つて頭下げとつた。ごはんのおかわりはできんかつたけど、そんな、おばあちゃんもおかあさんもおねえちゃんもほくも、おいしいね、おいしいねつて何べんも何べんも言

ました。

明日も朝からみんな畑仕事を手伝うことになつとるので、その晩はケイスケおじさんとこに泊めてもらいました。夜中、ほくはおしっこがしたくて目を覚ました。ほんでも、田舎の便所は外にあるし、外は真つ暗なんです。いややなあ、おそがいなあ。ほくはずつと我慢しとつたんやけど、だんだんがまんできんよになつてきました。よつほど、おかあちゃんかおばあちゃんを起こそうかと思つたけど、ふたりとも疲れてよう寝とるみたいやし…。おねえちゃん起こしたら、一生言われるやろなあ。ああ、あかん、(こらえつつ早口で) ニッポン男児たるもの、ひとりでおしっこぐらいいけんどうする! ほくは思いきつて起きると、走つて便所に行きました。(走り去る。出てくると) はあ、間に合つた…。

ホタルがふわりと点る。

ユキオ ひえ! (とあとずさる。よく見ると) はあ、何や今頃ホタルか。ああ、

びつくりした。ホ、ホ、ホタル来い。(と歌う)へへ、(ホタルに向かつて)長良川の水は甘いんやろか? あ、あっちにもおる。

ユキオ、一匹のホタルを両手でそっと包みこもうとする。包みこめない。ホタルを追う。やがてホタルを捕まえるとしやがみこむ。うつむいて、手に包み込んだホタルをそっとのぞきこむユキオ。

ユキオ (手の中を覗き込んだまま) 光つとる。

ホタルがあちこちであかりをともしだす。

虫の声。  
やがて、そこに不寝番のヤスヒサが現れる。

しやがみこんでいる少年に気づく。  
銃を構えるヤスヒサ。

ヤスヒサ だ、誰や?

ユキオ、ゆつくりと振り返ると、それはすでにアジアの少年である。

ヤスヒサ ユキオ…? (はっとして) どうかしとる。(少年に) 何しとるんや?

少年、思わず身を引く。じつと銃を見つめる。

ヤスヒサ (銃を突きつけている事に気づき) あ、ああ、怖がらんでもええよ。

ヤスヒサ、銃を傍らに立てかける。

ヤスヒサ ほれ、こんならええやろ。怖いことないやろ。どうしたんやね、こんな時間に。(少年に近づくと) この辺の子やろか。

少年、ヤスヒサの脇をすり抜けて、立てかけてある銃に向かつていく。

ヤスヒサ、あわてて少年を追いかけて、銃を守ろうとする。

ヤスヒサ な、何するんや。

銃を奪おうとする少年、取り返そうとするヤスヒサ、もみあうふたり。ヤスヒサは銃を守ろうとして、思わず少年を突き飛ばす。突き飛ばされて、足を強く打ちつけたのか、少年はうずくまっていたまま足を抱えてうめく。

ヤスヒサ だいたいどうぶか? なんでこんなこと…。これはおもちゃやないんやよ、人を傷つける道具なんや。子どもが持つもんやない。

銃を置いて、少年の様子を見ようと近寄る。おびえて、いためた足を投げ出したまま、あとずさる少年。

ヤスヒサ 何にもせん。傷をみるだけやで。何にもせんて。

少年はおも抵抗するが、ヤスヒサは少年の足をすばやくつかむと、傷を見てやる。あきらめて抵抗を止める少年。ヤスヒサ、少年の足をゆつくり伸ばし、またゆつくりと曲げる。うめく少年。

ええやろ。(安全な場所を探そうとあたりをみまわす)

少年、また銃を奪おうとする。

ヤスヒサ、少年から銃を取り上げようとする。

ヤスヒサ まんだ、そんなこと……。(はっと気づき、少年を見て) まさか、あんたも……。 (なおも銃にしがみついて離さない少年に) やめやあ、やめんさい。もみ合ううちにカツタがかけつける。

カツタ (銃口を向けて) キムラ、どけ! どくんだ!

ヤスヒサ カツタさん!

「容赦するな! 撃て!」

少年、ヤスヒサを突き飛ばし、足を引き摺りつつ、逃げていく。

「ひとりも逃がすな!」  
ねらいを定めるカツタ。

ヤスヒサ、カツタにさがる。

ヤスヒサ あかん! ゲリラや。(少年に) 今、外に出たら危ないで。どうしたら

ヤスヒサ ちがう、カツタさん、まだ子どもやで。やめてください。カツタさん! お願いや、サルやない、人間の子どもや!

「バズバズするな! カツタ、撃て!」

カツタの銃口が火を噴く。

銃声と同時に、ヤスヒサが叫ぶ。

暗転。

B29が飛び交う音が聞こえる。

空襲警報が鳴る。

ラジオの声「中部軍管区情報、中部軍管区情報、B29の編隊が琵琶湖上空を旋回中。くりかえします。中部軍管区情報、中部軍管区情報、…」

ヨネの声「いよいよござったか」

ミツの声「ケイコ、ユキオ、ユキオ!」

はよ!

ヨネの声「ケイコはわたしを連れて来て、あんたはヒサシとユキオを!」

焼夷弾が落ちる音とともに、真っ赤になり、空から明るい光とともに、きれいな銀の短冊のようなものが降り注ぐ。ゆつくりと空を見上げ、あまりの美し



とに目を真張るユキオが浮かびあがる。

ユキオ …はあ、火の花が降ってくるみたいや、…、さらさらしとる…、あれ、なんやろ。いつか遠くで見たのよりもっともつときれいや。

次の瞬間、現実がユキオを襲つ。

ミツ ユキオ！

ユキオ 気がつくつと、あちこちが燃え始めとつた。おかあちゃん！

ヒサシをおおい紐で負ぶつて、防空頭巾をつけたミツがかけよると、ユキオの手を引つ張る。ミツに手を引かれて、走り出すユキオ。

ヨネがケイコと手をつないで、ミツたち三人に駆け寄る。

降り注ぐ火の粉と充滿する煙。

火の粉を振り払いながら、煙にむせ、すすだらけになる五人。

ケイコ (ヒサシの防空頭巾が煙を出しているのに気づく) おかあさん、燃えと

る！

ヨネがヒサシの防空頭巾の火をあわてたたたき消す。

ヨネ 水、どこぞ水はないやろか。

ユキオ 川、長良川や！

川に向かう五人。

焼夷弾が落ちる音、堤防に刺さる音、馬のいななき、人々の叫び声。

ユキオ 燃えさがる火の中を馬が狂つたみたいに走つとつた。ぼくんたは堤防に向かつて、無我夢中で走つた。やつとの思いで堤防にのぼると、今度は川のほうに向かつて滑り降りた。

五人が川へ滑り落ちる水音。川の流れる音。

ユキオ そこはもう川中やつた。

ミツ (背中 of ヒサシに) ヒサシ？ おかあさん、ヒサシ、だいじょうぶやるか。

ヨネ (ヒサシの顔を覗き込んで) ヒサシ。

だいじょうぶや。こんなときにも泣かんと、ヒサシはえらいなあ。

ユキオ 昼間はあんなに泣いたのに、ヒサシはぜんぜん泣きませんでした。一生懸命こらえとつたんかなあ。よく見ると、川の中には、ぼくんたのほかにもよかけ人がおりました。みんな逃げてきたんです。

ヨネ 防空頭巾に水つけときゃあ。(川の水を手にとつては、みんなの防空頭巾をぬらす) こんで火もつかんわ。川ん中におりや、焼夷弾が落ちてきてもだいじょうぶやろう。しばらくここにおるまいか。川なら燃えん。

ユキオ 川なら燃えん、そうや、水ん中なら火も消えるはずや、これで助かる、大丈夫や、そう思つたとき…

飛行機の爆音と焼夷弾の落ちる音、人々の悲鳴。

ケイコ 火が、火が川を流れとる…、火の塊…

火の塊が流れてくる。

ユキオ 川ん中でも火は消えへんのです。

あれは火のついた油の塊で、からだにひつつくとそのまま燃え続けるんやと誰かが教えてくれました。焼夷弾がはせるたびに、あちこちに火のついた油の塊が飛びちつて

飛行機の爆音と焼夷弾の落ちる音、人々の悲鳴。

次々流れてくる火の塊を、スエとミツが防空頭巾をぬいで、それではたたくようにして追い払う。しかし、追い払つても追い払つても次々と襲ってくる火の塊。やがて、いくつもの火の塊が取り囲むように五人に迫ってくる。それを追い払うスエとミツ。また爆音と焼夷弾が…

いつせいに火が消えると、五人はその場に座り込む。そこは川原。息を切らして座り込む五人。しばし、ほうけたようになって声もない。

ケイコとユキオが震えだす。

ケイコ おかあちゃん…、寒い…

ユキオ さ、さむいよお…

ユキオはがちがちと震えてすでに小さくしゃくりあげている。

ミツ、はつとして、ヒサシを見る。

ミツ おかあさん、ヒサシは？

スエ (ヒサシを見ると) ヒサシ、ヒサシ…？

急いでおおい紐をはずし、ヒサシを背中からおろす。

ミツ (ヒサシを抱いて呼びかける) ヒサシ、ヒサシ？ ヒサシ、ヒサシ、ヒサシ！ …ヒサシ…

ユキオ …おとつちゃんは、ヒサシの顔を見るのができなくなりました。おとうちゃんに会わんまんま、ヒサシは逝つてまつた。…ほくのせいかもしれん。ほくがヒサシのお乳をとつたで…。あのときほくが空襲をきれいやなんて思つたでや…。

やがてケイコがうなだれるユキオのそばに来て、背中にそつと手を添える。

ケイコ せつかくケイスケおじさんのうちに運んだ荷物はなにかも全部燃えてしまいました。明け方、ぬれたからだをひきづるようにして、わたしたちはうちまで歩きました。ほんでも、うちも全部燃えて、何にも残つたらなんだ。

ヒサシを抱いたまま座り込んでいるミツ。やがて、古い石炭箱を持って現れるヨネ、そばにそつと置く。

ケイコ おばあちゃんがどつかから、古い石炭箱をもちつてきました。

ヨネにうながされ、石炭箱にヒサシをそつと寝かせるミツ。

ユキオ 棺おけなんてないで、その古い石炭箱にヒサシを寝かせました。大きな石炭箱の中でヒサシが小さく小さく見えませんでした。あくびしよつていつたのに、

せんでやぞ、ヒサシ。

ヨネ（ヒサシを見ながら）やけどもせんと、きれいなまんまで……。よかつたなあ、ヒサシ。

ユキオ 七月九日、七夕の二日あとのことでした。

そのひと月あとは、ヒロシマとナガサキに原爆が落とされて、八月十五日、戦争は終わりました。戦争が終わると神様やつた天皇陛下は人間になりました。戦場から戻ったおとうちゃんは魂が抜けたみたいになって、何にも話しません。

舞台奥にヤスヒサが出て来て、背中を向けて座る。

ユキオ 戦場で何があつたのかぼくにはわかりません。おとうちゃんはずっと黙ってたまんまで。

ぼくの初めての弟、ヒサシが死んだあの空襲の日。この世のものとは思えないほどきれいな光の下で、岐阜の町は焼け野原になりました。ぼくの弟はもういません。

ゆつくりと暗くなっていく。  
ホテルが一匹、どこからか現れ、ヤスヒサのもとにやってくる。ふと顔をあげ、ホテルを見るヤスヒサ。

T20210022  
西東京市柳沢2-14-62003  
FAX 0424-63-8716  
izumilin@aaisas.ne.jp  
いずみ 凜

### 事務局だより

## 韓国・馬山演劇祭に出演しませんか

馬山国際演劇祭の主催者から全リ演劇に対し、今年も複数の劇団を参加させてほしいとの出演要請がありました。今年5月20日から6月4日までの2週間、観光地になっている豚島という島で特設舞台を組んで行われます。昨年はアジアを中心に10カ国が出演、日本からは、京浜協同劇団と三重県の舞踊グループの2集団が参加しました。

上演時間は30分から70分前後が望ま

しいでしょう。日程は、この2週間の中から自分の好きな日を選べます（京浜の場合、土、日の2回公演で4泊5日を選びました）。

往復の渡航費（1人当たり約3万8千円）と輸送費は出演劇団の負担となりますが、韓国での交通費、宿泊費、食費、観劇料、通訳費、観光費などはすべて韓国で持ってください。輸送が大変な場合、ある程度の装置や小道具などは韓国側で用意してください。

締め切りは3月末。お問い合わせやお申し込みは全リ演事務局城谷まで。

電話・FAX

044-544-3737

## 岩田直二さん／かたおかしろうさんを偲ぶ

わが師ガンさん

劇団京芸 藤沢 薫

ガンさんが亡くなった。通常岩（ガン）さんであるが、僕にとっては頑（ガン）さんである。寡黙でおだやかな表情の奥に、頑としてゆるぎないものをもっていた。

僕が演劇を職業とするようになったときの、最初の師である。1950年代、京都のお寺の離れを借りた京芸の稽古場で、町工場のように芝居を仕込み、西日本の農漁村を駆けめぐった。リーダーであったガンさんとその実践から学んだことは、今日までの僕の演劇人生の礎となっている。

演劇は生活に根ざした芸術

岩田 直二（いわた なおじ）

大正3年3月25日生

享年91歳



演出家・俳優

本名 木下正三（きのした しょうぞう）

1932年 大阪商科大学（現・大阪市大）入学。

劇団新人劇場に参加。

1935年 在阪新劇団合同して大阪協同劇団を結成。

1942年 NHK 大阪中央放送局嘱託、その後大阪放送劇団に移籍。

1948年 在阪新劇団を集め劇団芸術劇場を結成。

1949年 京都芸術劇場（現在の京芸）を結成。

1954年 大阪で五月座を結成。

1957年 五月座、制作座、民衆劇場が合同して関西芸術座を結成。

以来、一貫して演出を担当。80歳を超えても現役の演出家として新しい舞台を創造し続けていました。関西における新劇のリーダーともいべき存在。演劇の歴史を虚心坦懐に見つめれば新劇の果たした役割は極めて大きい。岩田氏は、その新劇の関西（大阪）の代表者でもありました。

かたおかしろう（片岡明郎）

昭和3年12月3日生

享年76歳



大阪市出身 大阪工業専門学校卒

中学校数学教師として勤務しながら、中学校演劇部を指導。その活動が、映画「どこかで春が」になる。一方演劇集団息吹に所属して「天満のとらやん」（1960）を発表。代表作となる。1970年から専門劇作家として活動。多くの秀作を書く。

主な作品「信太の狐火」（69）「ごじんじょ山の鬼の村」（70）「牛鬼たいじ」（70）「大阪城の虎」（73）「四季の女たち」（76）「男どあほう大忠臣」（80）「いま生きる」（91）人形劇「大工のへいやんじごくでどんどこ」（87）創作オペラ「美男におやす八尾地蔵」（95）「若き日の道鏡」（98）他 多数

著書に「ごじんじょ山の鬼の村」（金の星社）「鬼ものがたり」（有文社）「三人の戯曲集」（テアトロ社）「大阪むかしむかし」（清風堂書店）他 絵本など多数。

であること。いつも弱者の視点でものを見ること。少数意見に耳を傾けるのが民主主義の原点であることなどは、僕の演劇活動の根幹である。

中国に文化大革命が吹き荒れた60年代の半ば、僕たち西日本リリズム演劇会議とガンさんとの間に、不幸な意見の対立があった。このときもガンさんは頑なに自分の意見を曲げることはなかった。だがいつかきつと一緒に仕事ができる日が来ると僕は信じていた。

ガンさんは京芸公演のみならず僕の仕事のほとんどを親でくれた。頭の下がる思いである。

そして5年前の京芸50周年記念公演「文殊九助」の演出を引き受けてもらった。50年昔が一挙に甦えり僕は夢心地だった。一揆の指導者九助を演る僕に「心やさしい人だ」と言ってくれた一言が光明の

ように役づくりを導いてくれたことをありがたく思いおこしている。

### 岩さんとの初の出逢いから

関西芸術座 溝田 繁

戦後間もなく岩さん演出の「罪と罰」を拝見。この上演を契機に結成された劇団芸術劇場に一緒にさせてもらったのが、私と岩さんとの初の出逢いだったわけだ。

この翌年、昭和23年の「ロミオとジュリエット」でのロミオ役が岩さんだったのは、今ではご存知の方も少ないかもしれない。演出に東京から土方与志先生、三島雅夫さん、原泉さんらの応援出演、開幕の序曲を、朝比奈隆さんの指揮による生演奏で幕を開けました。そして、ジュリエットを当時の大スターだった轟夕起子さん。岩さん33歳の

ときでした。岩さんなりの颯爽と凛々しいロミオは今でも険に焼きついております。

昭和32年、在阪劇団の大同団結で現在の関西芸術座になるわけですが、初代の劇団代表は岩さんでした。

岩さんは戦時中から今日に至るまで、実に70余年にわたって、この関西で一貫して新劇界の中核として指導者として、権力化、金権化していく世相の中、働く人たちの側からの舞台づくりを貫かれました。また、演技を体現してこられたからでしょう、役者には自由のびのびと役づくりをさせながら厳しく対峙されました。

当然のことながら数多くの表彰も受けておられます。つい2年ばかり前に、大阪芸術賞を受賞された際の祝う会ではまだまだお元気でしたのに、もう岩さんの演出にも、あのしみじみ温い笑顔にも接

しられないのかと、残念ではありません。

### 追悼 かたおかしろうさん

栗原 省

2005年11月23日、劇作家かたおかしろうさんが世界されました。

かたおかさんと全リ演西会議とのお付き合いは古く、ひと時は「劇団息吹」「劇団コロ」などの座付作家をなされ、またその作品は西会議参加劇団だけでなく広く全国各劇団で上演され、広く観客の心を捉えてきました。

かたおかさんの作品は、一貫して庶民の視点、弱者の立場から、彼等を抑圧するものを告発し、人々の連帯とたたかいを勇気づけてきました。かたおかさんが日本民族の豊かな芸能の遺産に着目され、伝統芸能の様式や表現形式の

色濃い作品で独自の世界を創造されましたのも、民衆への深い愛情と共感から到達した帰結でした。

1960年から70年代にかけて、かたおかさんの『天満のとらやん』は本家本元の『息吹』だけでなく、九州へいけば『博多のとらしゃん』紀州へ行けば『いこらのとらやん』という具合に、西会議傘下各劇団で競演され絶賛されたものでした。『天満のとらやん』は今日も「劇団コロ」に受

けつがれ、爆笑と共に庶民に愛され続けています。

また、例えば関西芸術座の歴史をみると、かたおかさんの代表作『大阪城の虎』が繰り返し繰り返しとりあげられ、『牛鬼退治』や『大枝の鬼』その他多くの作品でかたおか作品が関西芸術座の顔になった時期が長くつづきました。

かたおかさんは「西日本劇作家の会」の主要メンバーで、晩年体調を崩されてからも、『浪華家定九郎遺問』『歌しば

### 第23回西日本劇作家の会

2006年1月6日〜7日  
KKRホテル大阪(国家公務員共済組合立ホテル)

(出席者) 井上満寿夫・東川宗彦・楠本幸男・熊本一・栗原省・広島友好・芳地隆介・堀江ひろゆき・和田澄子  
昨年11月23日、かたおかし

### 総会と作品研究会

ろう氏が逝去された。享年76歳。私たちは土屋清、野尻敏彦、梶武史氏につづいて、また有力な会員を失った。第23回総会は、かたおかさんへの黙祷から開会した。

第1日目は、久々に駆けつけてくださった芳地氏から

「最近思っておられること」を3点に要約されて話していただき、それをめぐって話し合った。

い・きよ」や「いま生きる」(『ドラマの森』第一集掲載)など最後まで意欲的作品を提示し、後輩を励ましてくれました。その旺盛な創作力、演劇への執念には驚嘆します。

一方でかたおかさんは、この国の自由と平和、民主主義のありように積極的にアンガージュエマン(参加)する姿勢を崩さず、例えば羽曳野市への民間団体による不当な行政介入と闘った記録「共産党市長でえらいすんまへん」の刊

向。劇団も作家もそれを意識している。そのことをもっと深めたい。

その2、最近「現実をどう書くか」という話が出てこない。「そんな作品を書いても客が集まらない。笑いがとれない」と言う。しかし、少数派になってもいい、現実を書く姿勢が必要ではないか。(昔、労働現場を書けといわ



れた頃、昼仕事でくたくたなのに劇場でまたそれをみせられてカナワンという批判があり、「幽霊哀話」のような寓意劇を考えた。寓意が万能ではないが、創造上の工夫により、少数派でもいい、現実を書くという姿勢は貫きたい。その3、我々の作品には「色気がない」という問題。この世に男と女しかない。エロスを抜きにした「現実」はない。何が突破口になるか考えて、以上3点を提起したが、切実に思うのは、現代というこの異常な現実社会をどう描くか、ということである。

芳地提言を巡って話し合う。 広島友好氏の昨年の問題作「レター・オブ・グランドゼロ」をめぐる「わからない」という声が多くあったが、作品の内容、戯曲に問題があったのか、観客の作品のうけとめ方、観客の側に問題があるのか」と「つくる側と観客との距離」

について、はからずも「観客論」が中心的話題になった。今日の「時代の気分」として「変ることがよいこと、変らないことは悪」という判断基準があるが、私たちにとって少数派であっても、オリジナリティのある現実の真実を描いた創作劇が求められていると、芳地さんの意見に、一同「うん」「うん」。

第2日目は会場を「大阪市労働会館会議室」に移動して、楠本幸男「風吹にひびく唄」(創作、歴史劇)

広島友好「島ひきおに」(山下明生/原作、らくりん座)上演予定の脚色も。民謡劇)

和田澄子「風鈴と西瓜」(六十年目の夏)(創作、西日本劇作家の会)「戦後60年記念の、30分前後の創作劇を書こう」という呼びかけ応募作品)

(他に参考作品として、栗原省「道成寺」宮子と道成もの

がたり」)

作品研究会の内容は略。『西の風通信』(西日本劇作家の会会報)に詳述)

芳地さんから、最後に「歴史劇を否定するわけではないが」と前置きで「やはり現代のわれわれの生き方に迫る創作劇が出てほしい」と「西日本劇作家の会」の姿勢をえぐる一言で「作品研究会」終了。

### ピースリーディング vol 8に感動

青年劇場 上甲まち子

12月8日、非戦を選ぶ演劇人の会ピースリーディング vol 8がなかのzero西館小ホールで開かれ、参加してきました。参加といっても出演したわけではありません。客席からの参加です。演劇人としての私には参加という言葉がピッタリだったと思います。

- ①「ドラマの森」第4集(西日本劇作家の会編・発行)の売れ行きや今後の販売、および、第5集発行について。
- ②役員選出。世話人 井上満寿夫・東川宗彦(副代表)・久後孝雄・楠本幸男(事務局)・熊本一・栗原省(代表)
- ③年間行事計画は第1回世話人会で決定します。

今の日本が憲法9条を変え、戦争のできる国にするために多くの人が動いている危険なときに、演劇人として何ができるのか、そしてそれがどんな力を発揮することができるとか、確認し背中を押される思いがしたからです。

作品は、3時間にわたり2部形式になっていました。渡辺えり子さんが書かれた第2部は、睡眠時間、毎日2時間で、膨大な資料を駆使して書かれたそうですが、圧巻とし

か言えません。1994年12月8日、開戦を境にラジオや新聞などのマスコミで、世の中に影響力を持つている多くの文化人、演劇人も例外でなく、戦争賛美の発言をし行動を起こしている。私も菊池寛のことや高村光太郎の話などは知ってはいましたが、その発言の一つ一つが俳優によって読み上げられるとあまりに生々しくシヨックを受けました。そして治安維持法によって投獄された土方与志、滝沢修はじめ、大勢の演劇人のこと戦争賛美の詩をラジオで読んだ名優のことなどが、頭をよぎりました。

最後の朗読が「あたらしい憲法のはなし」で女優さんたちが読みました。こんな清々しい力強い朗読を聞いたことがない、というのが私の感想です。沢田知可子さんが「美しい国」を歌いました。涙がこぼれそうになりました。

### 落語で9条を

劇団コロロ 坂口 勉

憲法9条について考える運動を関西の演劇人らしいやり方で始めよう——こういう趣旨で始まった活動の中から落語「自衛隊に入ろう」は生まれました。落語作家・さとう裕氏の創作で、シノギにあぶれた下っ端ヤクザが自衛隊に入ってさまざまな矛盾に気づく、という作品です。

昨年4月7日にワッハ上方(大阪)で初演して以来、今までに10回公演してきました。大阪府下各地の9条の会、女性団体、演劇実行委員会、



「自衛隊に入ろう」(さとう裕/作)はすでに10回公演。真剣にうなずきながら聞いてくださるし、その中で、ちょっとしたネタを振ると大きな笑いがあつたりして、ただ一人の高座の上で浴びる

お客様の反応を楽しませてもらっています。それがどういうネタか……というのが、実際に聞いていただくのがいちばんなので、ぜひ、お声をかけて下さいませ。これからは日程が合う限り、出張いたします。でも、本当はこんな運動を必要としないような世の中であつてほしいんですけどね。そう思いませんか？

### 「いたおかしろうさんを偲ぶ会」のお知らせ

日時 4月2日 PM 1時~4時  
会場 アビオ大阪5F 錦の間  
会費 5000円  
問い合わせは、事務局 東川宗彦まで  
TEL 0729-41-0554  
FAX 0729-41-4401

2006年3月中旬以降の公演

●劇団通信の中から3月中旬以降の公演をまとめましたので、都合のつく方はぜひ観劇しあってください。  
●今後、公演予定については、劇団通信とは別に、公演日・会場・タイトル・作・演出をはっきりと書いてお送りください。

東京芸術座	4/1～9	東京芸術座アトリエ	マーゲインの部屋	スコット・マックラフターソン/作 松本永実子/翻訳 杉本孝司/演出
劇団四紀念	4/7～9	新聞地まちづくりスタジオ	悪女について	有吉佐和子/作 岸本敏朗/演出
関西芸術座	5/10～14	関芸スタジオ	心と意志	坂手洋二/作 松本昇三/演出
劇団石るつ	5/19・20	深川江戸資料館小劇場	『蒼い空をすてナギウギ』	境野修次・笠置リエ/作 境野修次/演出
青年劇場	5/20～28	紀伊國屋サザンシアター	尺には尺を	W・シェイクスピア/作 小田島雄志/翻訳 高橋久男/演出
劇団名芸	6/17・24	天白/南文化小劇場	かさじぞろ	栗木英章/脚本 近藤亜由美/演出
劇団大阪	6/23～25・30～7/2	谷町劇場	月夜の道化師	渡辺えりこ/作 堀江ひろゆき/演出
劇団四紀念	7/14～16	神戸アートビレッジセンター	だるまんがころんだ	坂手洋二/作 狂井たかし/演出
劇団名芸	10/20～22	テートピアホール	野に立つ	栗木英章/作 北原雅子/演出
劇団大阪	10/20～22・27～29	谷町劇場	時の物語	永井愛/作 熊本一/演出
青年劇場	10/27～11/5	紀伊國屋サザンシアター他	族譜(仮題)	梶山季之/原作 ジェームス三木/脚本・演出

編集後記

☆「9条の会」は、各地域、各分野で全国的な広がりをみせています。演劇界でも、俳優座、前進座など。全リ演加盟劇団では、青年劇場、東京芸術座などで、若手が中心となって立ち上げています。

☆全リ演としても、立ち上げようと10数人の人たちが呼びかけの準備をしています。演劇的創造課題と合わせて発展させていければと思っています。

☆本誌は、リアリズムシリーズとして、戦争と演劇、労働と演劇、作家、作品などの企画をすすめてきました。取り上げてほしい提案があれば、ぜひ、お寄せいただきたいのです。

☆それから、表紙の公演チラシ

シをできるかぎり、寄せてください。

☆いずみ凜/作『夜空の下に降る花は』は、各地域版として、上演しても可です。その節は作者に一報ください。

☆減誌が続くなかで、『演劇集団土くれ』が2部の増誌です。ありがとうございます。(境野)

〔原稿の送付について〕

・次号(7月号)の締切は5月20日です。

戯曲などは作品ができたときにすぐ送ってください。また、劇評なども各劇団で依頼して上演が終わり次第送ってください。

①戯曲は、境野修次または、栗原省へ。

②劇団通信および舞台写真は、(株)シイム内 石田章へ

③それ以外の原稿は、必ず、東会議は境野修次、西会議は栗原省に送ること。

※原稿は、メールまたはフロッピーを送っていただければ効果もよく助かります(その場合は念のため原稿のコピーもあわせてお送りください)。

後藤 陽吉  
〒184-0014  
小金井市貫井南町5-12-13  
TEL&FAX 0423-81-1590

栗原 省  
〒643-0111 和歌山県  
有田郡吉備町庄684-32  
TEL 0737-52-5963  
FAX 0737-52-6099

境野 修次  
〒272-0136  
市川市新浜1-23-5-103  
TEL&FAX 047-356-7217

(株)シイム  
〒547-0027  
大阪市平野区喜連5-1-145  
TEL 06-6707-3833  
FAX 06-6799-3833  
E-mail  
shiiimu@lime.ocn.ne.jp

演劇会議 120号 2006年3月11日発行 定価 700円(送料240円)

編集長 後藤陽吉  
編集委員 境野修次 よしだはじめ 郡司 勇 栗原 省 楠本幸男 田坪文一  
発行所 〒212-0052 神奈川県川崎市幸区古市場2-109 京浜協同劇団  
TEL/044-511-4951 FAX/044-533-6694

誌代振込先(郵便振替)口座番号00200-4-78639  
全日本リアリズム演劇会議事務局(〒212-0052 神奈川県川崎市幸区古市場2-109 京浜協同劇団・城谷護)